

40
244

ジェンナー種痘發明百年期記念文集
私立奨進医會編

058125-000-8

40-244

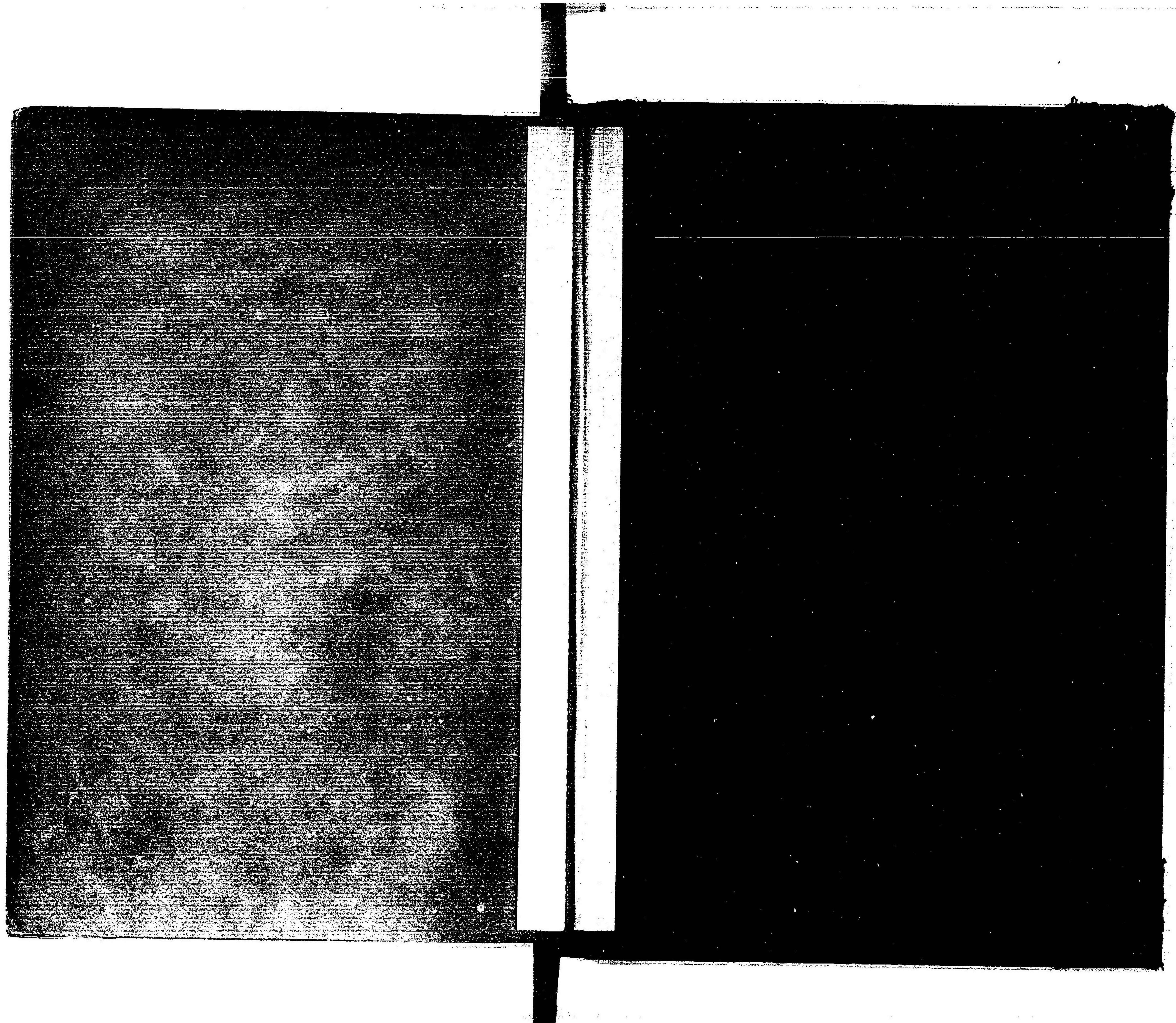
ジェンナー種痘發明百年期記念文集

私立奨進医會

M29

CBB-0268



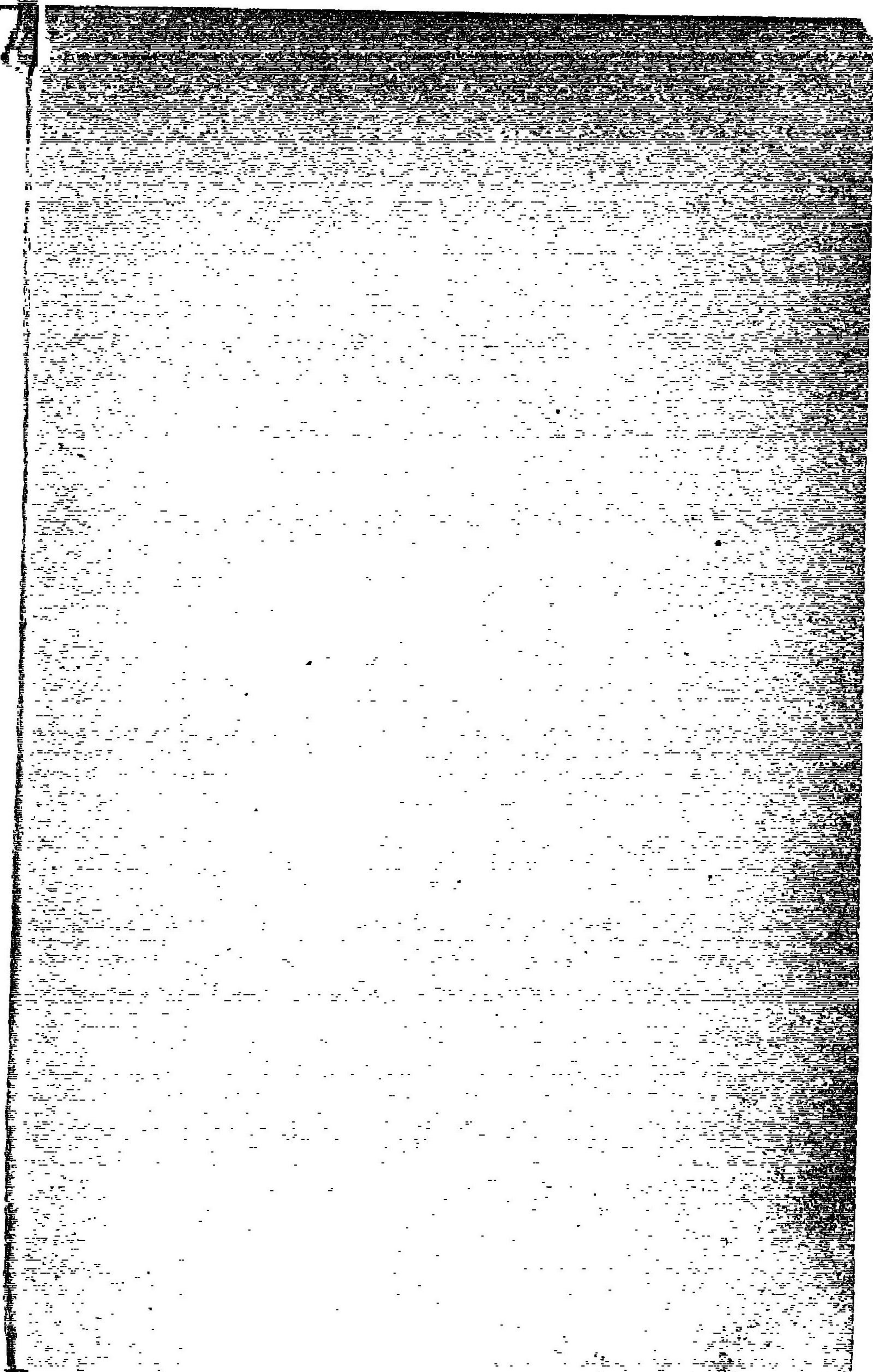


40-344

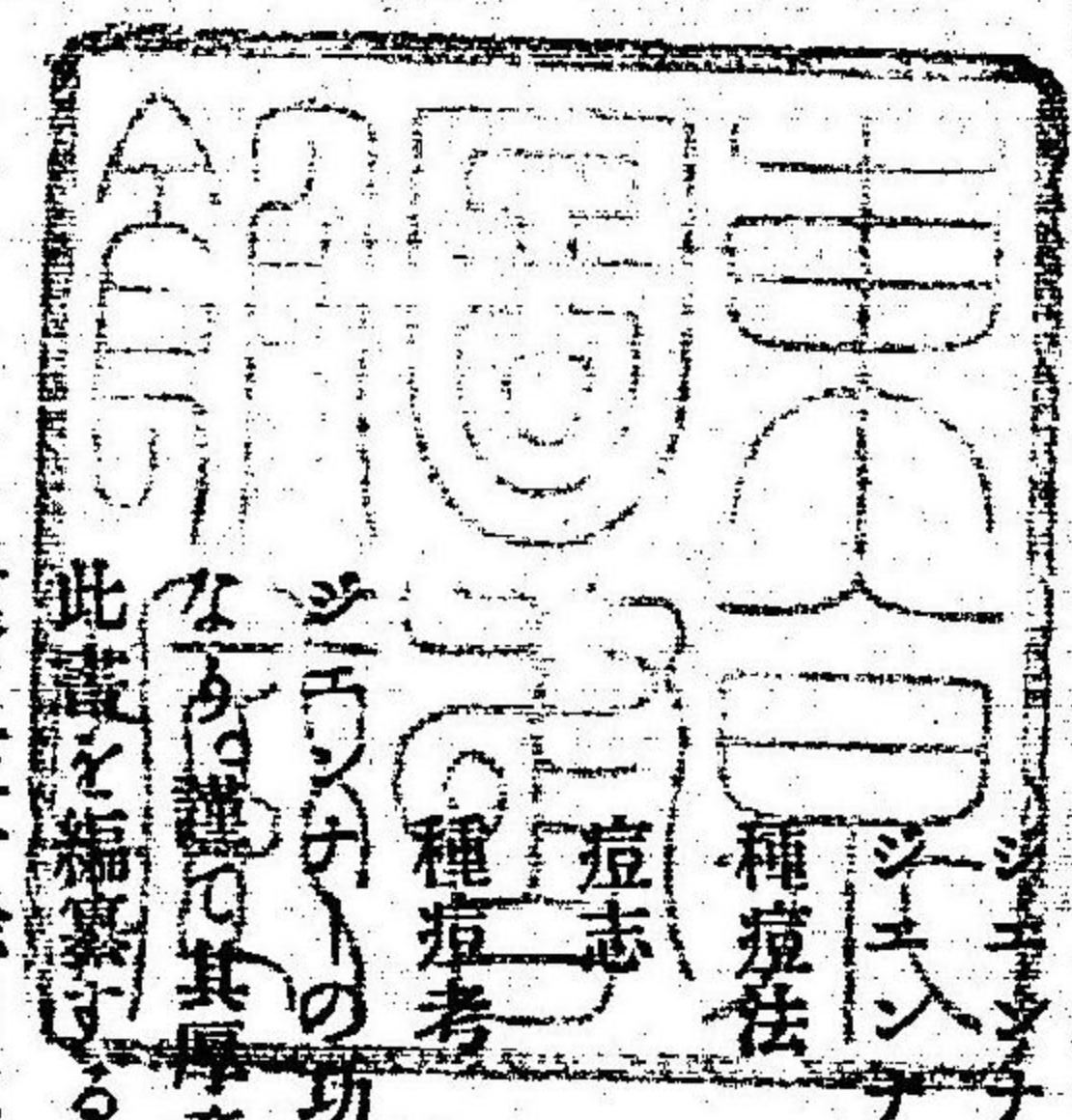


Engraved by R. Wallis from an original Painting by N. Pons.

EDWARD JENNER M.D.



此書は明治二十九年三月四日我會が第五回醫家先哲追薦會を行ふと同時にジエンナー種痘發明百年期紀念會を開くにつき。ジエンナーの大發明及びその世界萬國殊に我邦に效せる功績を表彰せむとて。編纂せしものなり。
撰者の氏名を左に明記す。是れその責任の歸する所を明にせざるを得ざればなり。



ジエンナーの功績を讚美する歌
種痘法

- 三 浦 千 春
- 吳 田 耕 安
- 高 田 耕 安
- 吳 士 川 游 三
- 富 士 川 游

ジエンナーの功績を讚美する歌は三浦千春翁が特に我會のためにものして贈られたるなり。其の厚意を謝するために一言す。
此書を編纂するの議の起りしは一月の中旬にして原稿の成りしは二月の中旬なり其間僅に三十餘日に過ぎず考證穿鑿の足らざるは多くはこれがためなるべし大方君子の是正を待つのみ。

明治二十九年三月四日

私立獎進醫會





種痘術發明百年の辰にあたりて其開祖英國人ゼンナー翁の

功勞を讚美して作る歌

赤裳のこあるいものさ、もつさてふその瘡のしも、青よよ奈良の大宮に、をす國をいりて一たる、
 天皇は御代のあつたよ、あくふまはまらたの國の、筑紫人らはり傳へて、ゆゑさや此あさけの、秋つ
 ばやほとくぬちよ、はる草のそびあまみたり、まうより千とせといひて、百年あまる年月、はふ萬
 の絶るとなく、世中みありとある人、こも枕さうたをじりき、玉さばる命のうちみ、一きびとやまぬ者な
 く、いもまのれられ得たを、せんまへのきづきをまらず、終てゆゑ母神のやまひと、このうさ波おち
 かりこそ、やまののある家ごとに、ま光へていつきはつと、老わうき來よりはとひて、やまうらすもて
 ささげをば、くまらひ足を空みて、をちこちにはいさほどへり、まうれともいうみかもせん、このうさ
 ろはやる年なり、天の下ひきも都も、おあべて家より家も、もゆる火けうはり行つ、春草のわうさ子
 どもら、冬くさのまをるいふこと、病こや命をぬるも、かきうぞふ多くまあま、こを救ふ道のあら
 り、こをいやすべうさたうぜ、うつそこの世のくさ、むらぎもの心つくいて、もと光ももと光
 得て、年久に過來あたるを、大御代の榮えともみ、物どのをらくる時と、あやさりものさの種

を、人ならぬ牛より取て、ミどり子のうでのあきりに、眞針もて植ておふて、痛まなくあづくもな
く、いもぢのやもぢづらひ、いと易くのされうる道、ひらけつゝこゝ母はト死て、ミどり國乃千年は
りの、ミどりひの根のたえにたて、あやにしくまゝさうも、此道のかくひらけつる、みぢもとをいひ
といふに、わづの外の海に國に、せんあせいひたる人の、さううるをせりのは、いふ牛のもの
さの種を、人の身にとりうるをせ、さとり得て世にさる先、いそとせれ後おふて、なほはたに
わらん舟に、その種を持てり來て、傳へりぞもせありたるを、かきりつぎいひ繼來たる、せんあ
いふを思へり、あゝ引の山より高し、わづはその海より深し、ことゝりも道の開き、始めよりひと
とせに、成ぬてふ昔きのびて、かゝこもまたそのふゆを、後の世に忘るゆゑと、さうらにちとあ
けり、いそよりちとせのれちも、この道れいやははしく、世に弘く傳はりゆれば、世をうる人のと
く、いもぢのうらさ先よくる、せんあおれたまものさすを、そのひと改るゆゑに先や、まのたぢ
先や、

エドワード、ジエンナー

エドワード、ジエンナー Edward Jenner は一千七百四十九年の五月十七日に、英吉利國グロースター
候の領地なるバークライといへる所にて生れけり。父はステフェン、ジエンナーといひて副教師 (Vicar)
といへる役柄を勤めたる人。母は幼き頃の名をヘッドと稱へ。其父もバークライの副教師なりき。父母
の間に五人の子供ありて、エドワードに二人の兄あり。其他は皆女子なり。

エドワード、ジエンナー五歳になりけるとき。父ステフェン身終りしかば。其より後は總領のステフェ
ン、ジエンナー跡目を繼ぎて父母の如くエドワードが養育教訓に心を盡せり。

ジエンナー八歳の時。ウオットン、アンダー、エッチなるクリツソルド宗教學校に入り。尋ぎてサイレン
セスターなるウラシゴホルン氏の學校に移りぬ。此の地に近き邊りには化石の甚多かりければ。ジエン
ナーは之を集むるに餘念なく。また動物植物などに關はる材料をも蓄へ集めたり。

其後ブリストルの近傍なるソッドバリーの外科醫者兼藥種家ダニエル、ルドロウといへる人に就きて
外科の教を受けしが。千七百七十年の歲。年僅二十一歳にてロンドンに至りて。世に名立たるジョン、
ハンターの家に寄留して其學生となりぬ。

二
ジェンナーが學問の方針は此時に定まりぬ。ジェンナーが万有科學を研究せんとする精神は此時に興りぬ。ジェンナーが學問の途上に於て百たひ折るゝも屈すまじき志と器とは實に此時に養ひ成されたること甚多し。授くる人も受くる人も共に博物學上の興味を同くしたるによりて。一は教への篤きに服して。學問の師と頼むのみならず。父とも兄とも思ひて事への道を怠らず。一は志の篤きに感して。弟子とのみ思はず。子弟の如くに誘掖してければ。ハンターか世に在りし日は後々までも常に志をも業をも同くしたり。

ジェンナーはハンターの家に寄食せしこと二年許にて。ハンターの推薦によりて。ジョセフバンクス (Joseph Banks) に備はれ。バンクスが千七百七十一年に「クック」(Cook) の最初なる世界一周の航海より携へて歸りたりける標本を調製することに従事し。其後セント、ジョージ病院に入りて醫術を修めたり。

千七百七十三年。故郷なるパークライに歸りて。次の兄と同居し。醫業を開きたりしが。其の性質の温にして爽なる上に。詩歌音樂に長けたる爲に。交はる人に愛でられ。醫術の優れたるより。訪ふ人に譽められ。幾何もあらで。其名遠近に隠れなく。藥請ふもの絶えず。門に盈ちたり。此頃ジェンナーは身の飾に心を盡ししと見えて。そが病家を訪ひ巡るとき。青き上衣を着け。銀の鞍を置きて馬

に跨がり出でしといふ。ジェンナー實業の暇には笛を弄びヴァイオリンを弾することを好み。折にふれて詩をもものせり。詩什の中にて "Address to a Robin" などは最妙なるものなりとぞ。

此の如くにて醫學に勉め風雅を好める刻にも万有學上の研究心は止むとさなかりき。化石を探り集め。植物學禽の學に心を潜め。ハンターの奨励によりて。動物の體温に就きて研究し。又鱧、蛙、河豚、鳥及び化石のことを調べたり。『鳥の自然史』(Natural History of the Cuckoo. 1787) 千八百八十八年刊行の Philosophical Transaction に載せたり(を著したるも此頃なり。この論文は鳥類の習慣の特殊なることをは委細に説明せしものなるが。其中にヘッジ、スハローのことなきをもて。ウァータートン氏の爲に其著書 Essays on the Tay の中にて此の説の正しからざることを駁されしが。之に關する實驗はジェンナー自から爲ましにあらで。そを従兄弟なるヘンリーといへる小童に托せしに。うが不注意よりして誤を來たしたるものなりとぞ聞えし。

是より稍前の頃ジェンナーはロッド、ポローの「フリス、イン」に初めて開きたる醫學會の創立に盡力し。其會合に於て屢々醫學上の論説を演述せしが心臟神經痛、眼炎、心臟瓣膜病に關する説は頗る有益なるものなり。其頃又プリストルに程近きアルヴェストン「シッパ、イン」に開きたる醫學會にも。力を盡したり。

千七百八十八年學士會院の會員 Fellow of the Royal Society に推擧せられぬ。此頃ジェンナーの業名は世に高くして。門邊に集るもの多く。うが爲に産科、外科など片業のことは廢やひべき程になりけり。千七百九十二年となりてレント、アンドリュース學校より M.D. (學士) として學位を贈らる。かゝる事忙しき中にもジェンナーが研究の心はいさゝかも弛ゆるひ隙なかりき。再またひ結晶法によりて醇精吐酒石を製する法』と題せる論文が内外科改良協會報告 (Transactions of a Society for the Improvement of Med. and Surg. Knowledge) に出でしは。千七百九十二年なりき。

その明くる歲即千七百九十四年はジェンナーが熱心に其の大功德あり大名譽ある發明の事業に従ひたる初の年なり。されど此ことを究めんと志はいと幼き頃より念頭にかゝり居たる事にて。ジェンナーの生れしグローセスターの地にて既に牛の乳製る家の奴婢等が間に流傳の説ありて一度牛痘に罹りての後には。復彼の猛烈慘酷なる天然痘瘡といふ病にかゝることなしといふ。此事はジェンナーより以前の人も見聞するもの寡からざりしが瑣々たる流俗の説と侮りてこれを查察するもの一人もなかりけり。ジェンナー少年のときサンドバリーの外科醫ルドロウの徒弟となりけるとさ一の村女あり其師の家に來りその疾を診視せられんことを求むれば痘瘡なりと言ひければ村女答へて予れこの疾を得る事あるべからず何いかにとなれば予嘗て牛痘を受けたるといひけり。ジェンナー之れを聞て忽ち思へるは之れ

を用ゐたらましかば必痘瘡の防ぎとなるべしと。因りてこのことを究察せんと思ひ起し一日これを其朋友に語りければ友人輩は大に嘲り笑ひ且かつ此の如き説を固執せばその社中を逐ひ出すべしと嚇おそかしけり。其後ロンドンに來りジョン・バンターの徒弟となることを得てその牛痘の説を語りければ。この外科解剖の大家の言大に尋常の外に踰えたり。曰く徒に思ふことなくして實にこれを試みよ。久しきに耐べし。又精細なることを要すと。ジェンナーこれによりて勇氣益奮ひ此事を研究せんために故郷に歸り「フリース、イン」の醫學會を起し、折にも牛の痘に就きて幾回會合にて公に説を演べしことありけり。

千七百七十五年。ジェンナー牛痘研究のためにバークライに歸りて熱心にこれに従事しけるが牛の乳房に於ける痘の圖乳取女の手に出でし牛痘の圖は千七百八十八年に當時名ありける醫エウエラード、ホーム其他ロンドンの醫師共に送りたることあり。其が業は其前後凡そ二十年の星霜を経實驗の効を積み牛痘を植るの益あること疑ふべからざるに至りぬ。其心を潜めて研究したる成績は集りて二の論點となれり。一は牛痘の馬の「グリース」と同病なることにて。一は牛痘は天然痘を豫防することなり。第一の事は其後の人々の種々なる實驗によりて正しからぬこと明白となりたれども。牛痘に豫防の効あることは年を経て彌々確乎動かすべからざることとなれり。

今より指僂^{かた}ふれば正さに一百年なり。千七百九十六年といふ年の五月の十四日なりき。 Jenner は此説によりて其證を擧げなむために。サラ、チルムス (Sarah Nalms) てふ牛の乳搾る婦の手に出でし牛痘より漿液を取りて。ジェームス、ヒツプスといへる年八つ許なる童の小腕に接けたり。ヒツプスはために牛痘にかゝりしかば。七月十一日に至り。更に膚の下に天然痘の膿液を灌きしに。事も見事。ヒツプスは遂に天然痘を患ひずして已みぬ。そも此實驗をば推して行ひたるは。此處其地方に痘瘡の流行あり。ある豪家に於て。一人の娘痘瘡を患ひしより。之を看護する婦女とも相尋きて同じ病に襲はれたり。然るに一人の小娘にして。牛の乳を搾るを生業^{すまわい}とせるもの。長き間その傍に侍りしも心地悪きことだにあらざりし。 Jenner は此小娘が前つ方飼牛の乳房に膿瘡の満てるものに接して其病移り。手の指に同じ膿胞の數多生せるを知りしかば。眞痘の傳染せざりしは。全く之かためなりしと推し。よりてヒツプスに種痘を施すに至りけるが。同じ時又この女子にも眞痘を種え試みしに。亦効なかりしといふ。

Jenner 既に試験によりて己が説の正さをば証せり。よりて其實驗せし要領を認めて一篇とし。『牛痘論』、On the Cow-Pox と題して之を官立外科學院 (Royal College of Surgeons) に贈りしが其説は外科學院に用ゐられずして。其稿は遂に刊行せられずして已みぬ。

千七百九十八年の六月。 Jenner ロンドンに於て『牛痘接種の原因及結果に關する研究』 (An Inquiry into the Cause and Effects of the Variolae Vaccinae, a Disease discovered in some of the Western Counties of England, particularly Gloucestershire, and known by the Name of the Cow-pox) と題する書を梓にせり。凡そ七十五ページなる小冊子にして。實驗例を擧ぐること二十三。數枚の着色圖を挿し。其中にはサラ、チルムスの手に牛痘の膿胞を呈せるもの一あり。而して其が結論は『牛痘は人體の天然痘に權ることを防ぐ力あり』といふにありき。嗚呼此結論は Jenner が數十年刻苦の餘りに出で。其當時は學問社會には科學的實驗にあらずと卑められ。世俗社會には妖術外道の如くに罵られたるも。非は理に勝たず正は邪に改められず。世論も次第に定まり時評もやがて Jenner に傾き。爾後一百年世界至るところ其説を採らざるはなく。坤輿人として其恩澤に沾はざるはなきに至れり。此の論文には此病はもと馬に始まりて。それより牛に傳染するものにして。而も牛より人に移すにあらざれば。天然痘を豫防する効なしと説きてあり。そが全く誤謬なることは明らかなり。されどかゝることの誤謬なる否とは Jenner の本論の價值發明の價值には幾何の増減あるべきぞ。

是歳の四月。 Jenner はロンドンに出で、七月十四日迄逗留し。種痘發明の事を醫學社會に唱へるを推擴めんとしつれど。當時ロンドンの醫家は一人として其言を用ひて牛痘を接種せんとするものな

かりしは。心にもあらで空しくその郷里に歸り來ぬ。其後一月程経て「シント、トーマス」病院の醫員クラインといふものジェンナーより得し淋巴を某の人に接種せしより。書をジェンナーに寄せて。復ひロンドンに出でんことを勧め。且つ収入の少なからざるべきをも保證すといへりしが。ジェンナーは唯其の厚意を謝するのみにして。其言には従はずき。

世俗の人々には此古今會有の一大發明はとて容易には容れられざりけり。されはジェンナーかくの如きことを開き。人類をして牛の乳房の病質を受けしめ。人獸の差別なきに至らしめんとすと嘲けり罵しり合ひけり。教師輩は牛痘を種うるは妖術なりと説き。世俗の人の説には。種痘したる小兒は其の面次第に牛の面に似來るものなり。その瘡は牛の角を生ずるの始なり。牛痘せる小兒の泣聲は牛の吼る聲に似たりなどいひてこれを惡み嫌ひけり。されは其頃會々牛痘を種ふし子供あれば。そが門外に出づるとき。村中の人々。これに石を投して室中に追ひ入れたる程なりしと云り。

當に世俗のみならず。學者の間にも。反對説を懐ける人ありき。

同じ歳。ドクトル、インゲンハウスは書をジェンナーに贈りて。其著作を評し。己が實驗をも數多舉げてジェンナーの結論には服ふこと能はざる旨を述べたり。ジェンナーが之に對する答書はいとも眞率なりき。唯『余の實驗は猶ほ甚僅なれば。益年月を累ね。諸家の實驗によりて不當を證明することあらん

を望む』と。尋さて反對の説は多く起りたり。ジェンナーの報告によりて種痘を施したる人も。許多あり就中ウィリアム、ウッド、ウィル (William Woodville) は熱心に之を試みけり。されは當時是等左袒者に於ては。種々疎忽なる仕方ありて。却て反對家の喙を容るゝ便ともなりければ。ジェンナーは遂に千七百九十九年四月五日を以て『牛痘研究の追加』(Further Observations on the Variola Vaccinae or Cow-pox)と題する書を出版して是等の反對家の説を駁したり。此時にはジェンナーの説は世に容れられざるのみにあらで甚きは此説を立てしために仇敵視する人々へありき。反對説は彌々上に出で來りて窮なれど。ジェンナーの心は更に屈することなく。パークライに於て。シムランナムに於て。益其實験を續け。千八百一年四月には。『牛痘接種の起源』(Account of the Origin of the Variola Inoculation) 『牛痘に關する事實と觀察上の總説』(A Continuation of Facts and Observations relative to the Variola Vaccinae or Cow-pox) の二書を出版し。千八百八年四月には『從來注目せざりし痘瘡感染の事實』(Facts for the most part unobserved of not duly noticed, respecting variolous contagion) を公にし。千八百十九年四月には『皮膚の水疱状態より生せる痘膿胞の種類』(On the Varieties and Modifications of the Vaccinae Pustule occasioned by an herpetic state of the Skin) を出版せり。

先是。千七百九十九年四月二十一日ジェンナー再びロンドンに出でたりしが。其の種痘の術は一面には

甚しき反對家ありしも。一面には是頃よりして漸く信用を得て。貴顯富豪の人に其の術を受くるものあるに至れり。されど前にも述べける如く。此頃の施術には不注意なること多く。愚かにも天然痘の膿を用ひたるなどもありければ。ジェンナーは力を窮めてかゝる批謔を指摘し。且は英吉利其他の邦々迄も品よき牛痘漿を供給せんことに苦心して。之がために多數の日子を費したり。一千八百年の一月三十一日ジェンナーは三たびロンドンに赴きアデルフィのアダム街に寓しエグレモンド公を商議して牛痘所を設立し。此所にて諸方に痘漿を頒つことを計畫したり。其明くる月エグレメント公の邸第あるサッセックス州のヘットウオースに至りて此に近きあたりの人々に種痘を施せり。三月の七日といふに。パークライ公の奏聞によりて英吉利國王に拜謁し。著書 Inquiry 第二版を献上せしに國王之を嘉納めらせられ。同き二十七日。女王に御目通りして牛痘に關する下問に答へ奉れり。四月十五日。陸軍の司令官より第八十五レジメントの兵士に種痘せんことを請托せられしが。其内には疥癬を患ふるもの多くありて先づそを療治すべき困難あり。又其他にも種々の阻礙ありて十分なる成績をうる程の事なかりき。かくてロンドンに滞在すること數月にして六月にもなりける頃。ヲクスフォード府に赴き。此地にては醫院副長某、醫科大學教頭某等のために大發明家として稱揚推重せられたり。さればジェンナーの功と名とは是より益世間に知られて。今は歐羅巴のみには限らざる迄になれり。

ジェンナーは尋きて痘漿を亞米利加に送りぬ。此地に於ても又學者社間に傳稱せられたるが故にて。是より前の方マッサチウセツツ洲カンブリッヂのプロフェッソルウオターハスは千七百九十九年三月十二日の『Columbian Lintinel』に『醫學社會の大奇事』(Something curious in Medical Line)と題する紀事を掲げてジェンナーの大發明を報告したるなり。之に尋きて佛蘭西に。西班牙に葡萄牙に。其法次第に擴まり行はれ。エルギン公によりて土耳其、希臘にも傳へられたり。ジェンナーは此頃痘漿を送る方法の如何にすべきかを種々に研究して。象牙の尖りたる棒は最も能く適ふことを認めて。送附の途も開けたり。

ジェンナーの發明は此に至りて世上一般に一大事功と認めらるゝに至り。一千八百一年には諸方より發明を祝する詞を受け。或は金牌を贈與せられ。露西亞帝より金環を受け。グロウセスターの貴紳よりも賞與を得。英國の艦隊は其船員の皆種痘を受けしを以て。其醫官をして金牌を贈りてその惠澤に報いしめ。次の歳には六月の二日。議院の議決によりて二万ポンドの賞金を得たり。

是歲ジェンナーはパークライに歸りしが。千八百三年二月四度目にロンドンに出で。「ジェンナー、インスチャート」の設立に奔走せり。此「インスチャート」は千八百八年に至りて國立種痘所となりたりといふ。此時マイフーヤのハートフォードに住まひして。醫業を開きしが。成績思ふ儘ならずしてパーク

ライに歸りぬ。

千八百六六年七月二日。ヘンリー・ベッチー公官立内科院に請求するに。ジェンナーの發明及び其結果を研究することを以てせしが。同院はこれを納れて種々講究したる後。大に種痘の利益を稱揚し。深くジェンナーの功績を讃する報告をなしたるにより。衆議院はジェンナーに二万ポンドを贈ることを議決せり。

千八百十二年。フックスフェルド大學よりM.D.の學位を贈らる。ジェンナー後年に及びても學問著述に力を効せしは。千八百九年三月二十一日。内外醫會といへる創立時より會員に列なり居りたる會にて。『犬の病』に就きて演説し。同し年又『子宮内胎兒の天然痘に感染せる二例』を報告し千八百二十二年には。『二三の人身疾病に對する人工發疹の影響』(On the Influence of artificial Eruptions in certain diseases incidental to human body)を出版し。千八百二十三年には。『鳥類の移住に關する實驗』(Observations on the Migration of Birds)を出版せしを見て知るべし。

千八百三年。パークライに歸りたる後も。ジェンナーは久しく此に退隱するを好まず。千八百十一年。微恙にかゝりたる後さへ。復又ロンドンに出で。千八百十四年の四月にも。ロンドンに行きて。其より三ヶ月の間。此に滞在し。幾何もあらずセルテンハムに歸りたりしが。千八百十五年九月十四日に妻

を失ひてよりは。遂にパークライに退きて餘生を此地に送り。千八百二十年八月六日。腦卒中にかゝり。幸にして一旦は恢復しけるも。三年を経て千八百二十三年の一月二十六日。復たび同し症によりて遂に身終りぬ。二月三日といふに。パークライの某寺院に葬れり。ジェンナーの妻はカザリン・キングスコートといひて。千七百八十八年三月六日。ジェンナーに歸り。明くる歳一月二十四日。一男エドワードをは生きたりき。ジェンナーは天性謙虛にして。隠顯ともに節を改めざる人なり。ロンドンに來り住まひしなば。一年一萬金を得べしとてこれを招くものありけるとぞ。ジェンナー答へて曰く。吾れ一生の晨に於て遠僻卑下の路を行かんことを求め。幽谷を欲して高山を欲せざりき。然るに今や一生の暮景に及んで吾身を役して名利を求むるの具とするは心ならぬことなりと云へりしとぞ。是れスマイルスが自助論に掲たる話なり。

ジェンナーの肖像。世に残れるもの許多あり。一はトーマス・ラウレンスの畫きたるもの。一はジェムス・ノースコートの畫きしものにして。ノースコートの畫きたるものは「萬國肖像集」(National Portrait Gallery)と云へる書にのせ。千八百四年の「歐洲雜誌」(European Magazine)にも載せ。此度吾々が物しつる文集の初に掲けたるものは即ちこれを寫せしなり。

グローセスターのカセドラルの村西。民家の盡さんとする處に。大理石に刻みしジェンナーの像あり。

千八百五十八年九月には。トラファルガー、スクエアーに紀念の爲め後の人銅像を建てたり。こは千八百六十二年。ケンシントンケントンのの公園に移されたり。

書にかきし像。金石に刻みし形。筆に寫きし記事はなくとも。ジエナジエナは萬世無朽なるべし。

ジエナジエナの傳は左の諸書に詳なり。

J. Baron, The life of Edward Jenner with illustrations of his doctorines and selections from his correspondence. London. 1827. 8. 1838. 8. 2 Voll.

L. Choulant, Edward Jenner, Biographie und Charakteristik, Leipzig. 1829. 8

Charles Creighton, Jenner and Vaccination. (in the Encyclopaedia Britannica 9th edit.)

Crookshank, Pathology and History of Vaccination. 1889. 2 Voll.

本條に Sidney Lee, Dictionary of National Biography, Vol. XXIX, Haeser, Lehrbuch der Geschichte der Medizin 1881.

Dr. A. Viharef, Handwörterbuch der gesamten Medizin. 1891. vol. II; Smiles, Self help (中村敬字譯)。其他數書に據る。

種痘法

ジエナジエナ氏種痘法發明以前ノ防痘法

ニ根基セリ
ジエナジエナ氏發明ノ種痘法即チ牛痘接種法ハ其原理及ヒ施術式ニ於テ舊時ノ防痘法即チ天然痘接種法ニ根基セリ

往昔天然痘ノ災害ヲ防カンカ爲ニ小兒ヲ故ラニ天然痘ニ感染セシメタル原由ハ蓋シ曾テ種痘シタル者ノ痘瘡流行ニ際シテ健存スルト流行痘瘡ハ屢殊ニ悪性ナルモ孤獨ニ散發スル者ハ概チ良性ナルノ兩實驗ニ在ルナリ

歐洲開明諸國ニ於テ天然痘接種法ヲ稱揚スルニ至レルハ一千七百十七年土國駐劄英國公使モンテグ夫人カ當時君士坦堡ニ行ハル、該法ヲ同地希臘婦人ヲシテ其子ニ施サシメ好良ノ結果ヲ認メタルヲ以テ端緒トス翌年以後該法漸ク英國ニ行ハレ一千七百二十三年佛國ニ渡リ次テ爾他大陸諸邦ニ及ヘリ然レモ該施術ニ對スル豫備療法並ニ後療法ナル者複雑濶久ニシテ其費少ナカラサルカ故ニ實際受術者ハ資產家ニ限リシカ一千七百六十年伊國ガッチ氏本法ヲ改善シテ豫備療法ノ節略切開及ヒ多量痘漿擦入ニ對スル穿刺及ヒ少量痘漿ノ代用、接種部ノ冷却、後療法ノ簡約等ヲ以テ接種痘瘡ノ經過ヲ概チ輕

良ナラシメタルカ故ニ該法一層弘ク執行セラル、ニ至レリ而シテ同氏ノ改良法ハサットン氏及ヒテム
スデール氏ニヨリテ英國ニ、カムベル氏ニヨリテ和蘭ニ、チソ、ヘンズレル、ローゼンスタイン、
ホルター、フリーランド等ノ諸氏ニヨリテ爾他諸國ニ賞用セラレタリシカ一千七百七十年迄ニ
歐洲名族ハ殆ト悉ク天然痘接種法ヲ執行シ了レリ

接種痘瘡ノ爲ニ斃ル、者ハフェルロ氏ニ據レハ十八人ニ一人マタイ氏ニ據レハ百人ニ一人ヅカルロ氏
ニ據レハ二百人ニ一人ブレメル氏ニ據ルモ亦二百人ニ一人グレゴリー氏ニ據レハ三百人ニ一人コン
ダメン氏ニ據レハ三百七十六人ニ一人ヘンズレル氏ニ據レハ四百人ニ一人ウィルソン氏ニ據レハ六
百六十二人ニ一人ニシテ平均三分一ナリ今之ヲ普通天然痘死亡數ニ對比スレハ數十分一或ハ其以內
ニ止マリ死者甚タ少數ナルカ如シト雖モ天然痘接種法ハ國民一般ノ痘死數ヲ減少スルヲ能ハサリシナ
リ該法ハ却テ天然痘蔓延ノ媒介トナレリ蓋シ貧者ハ該法執行ニ必要ナル時日ト金銀ニ制セラレテ之ヲ
行フヲ得サルニ天然痘接種者ニ寄生繁殖スル痘毒ハ近圍ノ未痘者ヲ襲フテ往々天然痘大流行ヲ誘發シ
一般死亡數ヲ増加シタリ史家ハ之ヲ第十八世紀ノ痘難ト稱スト云フ因テ歐洲殆ト各國政府ハ法令ヲ發
シテ舊防疫法即チ天然痘接種法ヲ禁止シタリ就中最初(一千八百二年)ニ發令シタルハ澳國ニシテ最末
(一千八百四十年)ニ禁止シタルハ英國ナリ而シテ天然痘接種法カ眞ニ其跡ヲ絶ツヲ得タルハ完全純良

ノ防疫法即チジェンナー氏發明牛痘接種法ノ成効確實ナルヲ認定セラレタルニ因ルナリ

ジェンナー氏種痘法

牛痘ノ天然痘即チ人痘ニ對シテ防禦力ヲ有スルヲ發見シタル者ハ確カニ何人ナリト指定スルヲ得ス蓋
シ古來諸國ニ於テ偶然牧牛ノ痘瘡ニ感染シタル者ノ天然痘流行時無事ナルヲ知リタル者又ハ曾テ牛痘
ニ傳染シタル者ニ天然痘接種法ヲ行フテ偶然其不感ヲ實驗シタル者甚タ少シトセス然レモ故ラニ牛痘
ヲ人體ニ接種シテ天然痘豫防ノ効ヲ期シタル者ハジェンナー氏以前殆ト絶無ナリキ只獨國一教員ブレ
ット氏及ヒ英國一質商ナッシュ氏各二三小兒ニ牛痘ヲ接種シタルヲアルモ單ニ其一時ニ止マリ而シテ毫
モ之ヲ反復持續スルノ意ナク又當時弘ク世間ニ知ラル、ニ至ラス後日ノ研究ノ爲ニ供資スルトコロナ
カリキ

ジェンナー氏ハ一千七百六十八年牛痘感染者ハ天然痘ニ感染セズトノ里人ノ言ヲ聞キテヨリ後チ其事
實ヲ熟察研究スルヲ殆ト三十年間爲ニ費消スル所少ナカラス一千七百八十九年ニハ同氏男兒ニ尙ホ天
然痘接種法ヲ行ヒタリシモ漸次確信ノ域ニ達スルヤ一千七百九十六年五月十四日其郷土グロッセ
ターニ於テ公然八歳ノ一男兒ニ種痘シタリ就中牛痘ニ感染セル搾乳婦ノ手ニ生シタル痘泡液ヲ以テ接
種シタルモノニシテ實ニ人化痘藥應用ノ創始ナリ該兒ニ二、三ヶ月ノ後及ヒ五ヶ年後ニ至リテ更ニ天

然痘接種法ヲ施行シ全ク不感ナルヲ認定シタルハ現今ヨリ觀ルルハ勿論然カアル可キナリト雖モ其當時ニ在テハ實ニ必要ナル試驗法ナリシナリ

一千七百九十八年ジェンナー氏ハ倫敦ニ於テ牝牛ノ痘疱即チ本原牛痘漿ヨリ直チニ五歳半ノ男兒ニ種痘シ其兒ニ發生シタル痘漿即チ人化痘漿ヲ以テ更ニ第二兒ニ接種シ次テ第二兒ヨリ第三兒ニ、第三兒ヨリ第四兒ニ、第四兒ヨリ第五兒ニ轉種シタリシニ各兒ノ牛痘經過ニ變狀ナク又後日試ミニ天然痘接種法ヲ行ヒシニ更ニ感染ノ微ナクシテ防痘ノ効力明瞭ナリキ因テジェンナー氏云ク「余ハ此試驗ニ據リテ確知セリ五個ノ人體ヲ經過シタル牛痘素ト雖モ毫モ其固有ノ効力ヲ失ハサルヲ」ト

則チジェンナー氏ハ管ニ牛痘ヲ接種シテ天然痘ヲ豫防スルノ法ヲ創メシノミナラス又之ヲ學問的ニ攻究シテ以テ其性質ヲ明カニシ世人ニ本法ノ信用ス可キヲ知ラシメタリ加之狹地短時ノ牛痘流行ヲ待チ稍ク僅量ノ本原牛痘漿ヲ得タル時代ニ於テ同氏ハ人化牛痘漿ノ本原牛痘漿ト同一ノ効力ヲ有シコレニ代用スヘキヲ發見セシカ故ニ種痘法ヲ間斷ナク且ツ各處ニ執行シ得ルニ至ラシメタリ

抑牛痘ハ牝牛哺乳期ノ乳房ニ生スル痘疱ニシテ潜伏期三日乃至六日ノ後最初小蕾疹ヲ發シ十日乃至十一日間漸次發育ノ後扁豆大乃至豌豆大ノ痘疱ト成ル其中央ニ陷没(臍)アリ其色ハ毛色ニ應シテ眞珠様灰白或ハ暗赤ナリ痘疱ノ數ハ二十顆ヲ超エヌ又其大小不同ナルハ各疱發生ニ早晚ノ差アルカ故ニシテ

其屢出血或ハ破潰セルハ摩擦等諸種ノ外傷ニ因ル其觸接傳染毒ハ固性ニシテ蔓延スルコト緩慢ナリ

抑痘瘡ハ諸種ノ獸類之ヲ發ス而シテ其發疹ハ全身ニ蔓延シ且ツ著シク熱發スル者ト發疹限局性ニシテ熱發著シカラサルトアリ甲種病毒ハ揮發性並ニ固性ニシテ人類天然痘ニ似タリ乙種病毒ハ單ニ固性ニシテ種痘ニ同シ甲種痘瘡ヲ發スルハ羊、野牛、豚等ニノ就中羊痘最モ重ク豚痘最モ輕シ乙種ノ痘ヲ發スルハ牛、馬、驢馬、野牛等ナリトス而シテ馬ヨリ羊、牛ニ、牛ヨリ馬、驢、羊ニ、羊ヨリ馬、驢、野牛ニ、豚ヨリ野牛ニ痘瘡ヲ傳染セシムルヲ得而シテ後後ハコレニ再感セヌ又人痘ノ偶然牛、豚等ニ傳染セシコアリ接種スレハ感染一層容易ナリ而シテ其際該獸固有ノ痘ヲ發シ毫モ其性狀ヲ變セス之ニ反シテ牛等ヨリ人躰ニ接種スレハ輕症痘ノ性質ヲ維持ス故ニ人痘ヲ牛ニ接種シテ牛痘漿ヲ製造スルヲ得ルト云フ其他牛痘漿ヲ得ルノ困難ハ上記ノ如クナリシト雖モ後年犢牛ノ腹壁ニ剃毛シ淺表多數ノ切開ヲ行フテ痘漿ヲ擦入シ多量ノ痘漿ヲ培養スルニ至レリ今世紀中頃ヨリ種痘梅毒論ノ影響トシテ本原牛痘漿(牛ヨリ牛ニ傳ハリタル者)或ハ再歸牛痘漿(人化痘漿ヲ牛ニ接種シタル者)ヲ稱用スル者増加セシト共ニ牛痘漿製造ノ業甚タ盛ナリ

種痘術ノ大要ヲ記述スレハ關節ニ近接セス又外傷ノ虞少ナキ皮膚部例之ハ上膊外側ノ如キヲ撰ビテ潔淨シ其部ヲ緊張シツ、穿刺、切開等ヲ行フテ表皮ノ角層ヲ破リ痘漿ヲ創面ニ塗擦シテ深クマルビギ

氏網ニ達セシムルナリジエンナー氏ハ一個或ハ二個ノ穿刺ヲ用ヒシカ現今ハ其三個乃至五個或ハ六個ヲ隻膊或ハ雙膊ニ行ヘリ又上記穿刺ニ代エテ二、三個ノ切開ヲ行フアリ是殊ニ傳染力弱キ犢牛痘漿ノ爲ニ用ヒラル手術ノ際深ク眞皮ヲ傷ツクルハ違法ナリ單ニ其乳嘴舐ヲ損スルハ妨ケナシ皮創交互ノ距離ハ二仙迷乃至四仙迷ニシテ種痘針、痘漿受器等ハ外科的清潔ヲ要スル者トス

牛痘接種後ノ症候ヲ擧クレハ最初二日間局部ニ創傷性反應ヲ發スルヲアルモ第三日ニハ全ク消失ス第三日末或ハ第四日初ニハ接種部ニ小结節ヲ生シ第四、五日水泡ニ變シ漸次發育シテ所謂ジエンナー氏痘疱トナリ眞珠様灰白色或ハ帶青白色ニシテ中央ニ臍狀窩ヲ具シ中心點ニ小痂皮ヲ呈ス痘疱ノ周圍ニハ赤色輪アリテ漸次腫脹シ第五日以後暗赤色輪ノ外圍ニ淡赤色ノ大暈ヲ生ス痘疱ハ第七、八日ニ發育ノ頂點ニ達シ彼ノ淡赤色暈ハ火紅色ニ變シ緊張シテ光澤アリ潮熱セリ痘疱内容ニハ濃膿シ輕度ノ熱發アリ罕ニ昇温四十度ニ達スルヲアリ(殊ニ痘疱多數ノ際高熱ヲ發スルカ如シ併異説ナキニアラス)ト雖モ一日乃至一日半ヲ經過シ第九、十日ニ至レハ熱候ハ第二暈ト共ニ消散ス當時痘疱尙ホ僅ニ増大スルモ第十一、二日ヨリ其乾燥ヲ始メ第廿一日乃至第廿八日ニ落痂シテ痕痕ヲ留ム而シテ別ニ豫備療法或ハ後療法ヲ要セサルヲ常トス唯痘疱ヲ損傷スルナカラシムレハ即チ足レリ

ジエンナー氏種痘法ハ其後速ニ英國及ヒ爾他諸國ニ賞用セラレタリ而シテ既ニ一千七百九十九年倫敦

ニ種痘院ノ設立アリテピアソン氏ヲ長ト爲シ人化痘漿ヲ以テ盛ニ種痘シタリ

ジエンナー氏種痘法發明以來コレニ關スル諸家業績ノ概要

ジエンナー氏種痘法ノ大陸諸國ニ於ケル傳播及ヒ本法ノ各要點ノ研究ニ關シ最モ顯著ノ功績アルハ伊國ノサツコ氏ナリ同氏ハ一千七百九十年自身ニ種痘ヲ行ヒ次テ天然痘接種法ヲ試ミテ種痘ノ防痘力ヲ認定シタル後數年間伊國ヲ巡歴シテ衆人ニ種痘シ又幾百頭ノ獸類ニ接種シテ獸痘ト人痘ノ關係ヲ明カニシタリコレニ關スル吾人ノ知識ハ概チ同氏ノ研究ニ基ツクモノトス同氏カ天然痘豫防ノ功績ノ爲ニ伊國人ノ尊崇ヲ受クルヲジエンナー氏ノ英國人ニ於ケルカ如シト云フ同氏ハ一千八百年ヨリ著述ニ着手シ又書ヲ歐洲諸政府ニ送リテ伊國ノ例ニナラヒ種痘法ヲ盛ニ實施センコトヲ慫慂シタリ

澳國ニ於テハフェルロ、ヅカルロ、ペーテルブランクノ諸氏獨逸ニ於テハストローマイエル、バルホルン、ゾエンメルリンク、ブレームル、ハイム、フレリーヒノ諸氏瑞西ニ於テハオヂエル氏佛國ニ於テハオーベル氏及ヒフューソン氏率先シテ種痘法ヲ稱揚シ各其國ニ一千八百年迄ニ該法傳播ノ端緒ヲ爲セリ

西醫バルミス氏ハ數名ノ醫士ト共ニ二十二名ノ小兒ヲ携ヘ一千八百三年西班牙ヲ出帆シテ海上逐次種痘ヲ行ヒツ、新鮮ノ痘漿ヲ保藏シテ亞米利加ニ達シ之ヲ殖民地ニ傳ヘタリ其後同氏ハキューバ島ニ於テ

本原牛痘ヲ發見シ補給ノ用ニ供セリ
 再種ノ必要ノ認定セラレタルハ一千八百二十年ノ後ニ在リ抑モ種痘ノ防痘力ノ永久ナルヲ信シタルジ
 エンナー氏モ既ニ種痘セル者ニシテ天然痘ニ罹リタル二人ヲ報告セシコアリ一千八百六年ウイララン
 氏ハ自己及ヒ他人ノ實驗ニカ、ル既種痘者ニシテ輕症ノ天然痘ニ罹リタル三十名ヲ記述シタリ爾來種
 痘ノ効力ニ關シ疑惑ヲ生シ諸說紛然タリシカ當時種痘法ニ關スル試驗ヲ反復シ其性質ヲ一層究明シテ
 再種ノ端緒ヲ開キタルハシーライ、プリンツ、スマン、ハイム、チエーレル、パロン、ライタル、ハ
 ルデル、チーレ、ウオルフェルス、ドルンブリュート等ノ諸氏ナリ
 善良ナル痘漿ニ偈里設林(化學的純潔ナルヲ要ス)或ハ其蒸餾水ト等分ノ液ヲ混和スルハ爲ニ痘漿ヲ
 稀釋スルコト三倍或ハ四倍ニ達スルモ其効力ヲ減弱セサルノミナラス却テ其保存ヲ助クルヲ發明シ種痘
 執行上少ナカラサル便益ヲ加ヘタルハミュルレル氏ノ功ナリ
 種痘法ニ關シ功績アル人其他甚タ多シ茲ニ記セシハ只其一斑ノミ

附錄

歐洲種痘書目

Acker, Centralblatt f. allg. Gesundheitspflege. 1884. Pag. 421 (Impftuberculose).—*Argelles*, Gaz.
 des hopit. 1881, Nr. 61 (Impfschutz).—*Auspitz*, Vierteljahrschr. f. Dermatol. 1871, pag. 115 (Vaccin-

alsyphilis).—*Baron*, The life of Jenner, his doctrines etc. London 1838.—*Belin*, Zeitschr. f. Geburtsh.
 u. Gynäk. 1882, VIII, 1. (Intrauterine Impfung).—*Behrend*, Berl. Klin. Wochenschr. 1881, Nr. 49
 (Vaccinale Aussochläge).—*Berthel*, Vaccine et variole. Paris 1884.—*Blümlein*, Vierteljahrschr. f. ger. Med.
 1874, Pag. 332; 1875 Pag. 320 (Pockenepidemie).—*Boeing*, Thatsachen zur Pocken-u. Impffrage. Leipzig
 1882.—Berl. Kl. Wochenschr. 1883, Nr. 5-7 (Statistik, Impfeggnarisches).—*Baens*, Bull. de l'acad. de
 méd. belge. 1880, Nr. 8 (Impfeggnarisches).—*Bokar*, Deutsch. med. Wochenschr. 1882 (Anim. u. hum.
 Lymphé, Impferysipel).—*Bohn*, Hadl. der Vaccination. Leipzig 1875.—Jahrbuch f. Kinderheilkunde, 1875,
 VII (Erysipel).—*Bollinger*, Menscher-u. Therpocken. Leipzig 1877 (Srnlang Kl. Beiträge, Nr. 116).
 —Ueber animale Vaccination. Leipzig 1879—Deutsche Zeitschr. f. Thiermed. 1880, Pag. 1 (Ueberfrag-
 barkheit u. Impfrankh.).—*Bonneric*, Eruptions secondares par la vaccine. Paris 1880 (Thèse).—*Bowley* et
Reynal, Art. Horsepox im Nouv. dict. prat. de méd. Paris 1881.—*Bonsquet*, Nouv. traité de la vaccine
 etc. Paris 1848.—*Bryce*, Tract. observat. on the inoculation of the Cowpox, Edinburgh 1809.—*Burchardt*,
 Deutsch. militärärztl. Zeitschrift. 1873, Heft 11 u. 12.—*Carsten*, La vacc. anim. dans. des Pays.—Bas.
 La Haye 1877.—*Ceely*, Observat. of the variolae vaccinae etc. Worcester 1840 (Deutsch von Heim,
 Stuttgart 1841).—*Chapheaus*, Correspondenzbl. des ärztl. Kreisbesirks-Vereins im Königreich Sachsen.
 1885, 3-8 (Bericht f. 1884).—*Claucnem*, Vaccine et variole etc. Paris 1865.—Bull. de l'acad. de med.
 de Paris u. Gaz. bebdom. 1866.—*Ciancio*, Du vaccin de génisse etc. Paris 1882.—*Clementowski*, Oesterr.
 Jahrb. f. Päd. 1872, pag. 73 (Animale Vaccine).—*Cless*, Impfung u. Pocken. Stuttgart 1871.—*Cohn*,
 Virchow's Archiv. LV (Organismen der Lymphé).—*Curschmann*, Die Pocken. Ziemssene's Handbuch

der sp. Path. u. Therap. II, Leipzig 1877.—Danchez Des Vaccinides. Paris 1884 (Thèse).—*Dejace*, Bull. de l'acad. de Belg. 1882, Nr. 1 (Epid. Bericht).—*Depaul*, La syph. vaccin. et Paris 1865.—Monatsschr. für thierheilk. 1885, Nr. 5, 6 (Technik des anim. Vaccin).—haasregeln zur Verhütung des menschen blattern. Berlin. 1829.—*Ersärser*, Beschreibungen des menschen pockenseuchen in des Jahren 1814—1817 in Württemberg, Stuttgart 1820.—*Eubenberg*, Vierteljahrschr. f. ger. Medicin. u. öffentr. Sanitätswesen XXXVII, pag. 351 (Einfluss des Schutzpockenimpfung, XL, pag. 136 u. XLII, pag. 120 (Wirksamkeit daitsche Impfinstitute—*Evers*, Deutsche Vierteljahrschrift. f. Gesundheitspflege, 1880, Heft 4, pag. 588 (Militärstatistik).—*Fickert*, Vierteljahrschr. f. ger. Med. 1884, Heft 3 (Animale Glycerinlymphe).—*Flemming*, Lancet. 1880, Mei, September (Verglich. Pathologie den Pocken).—*Flinser* Die Blattermepidemie in Chemnitz, 1870-71. Mittheilungen des statist. Bureaus von Chemnitz. I. *Fröhlig*, Württemberg. med. Correspondenzbl. 1867 Nr. 20.—*Fürbringer*, Eulenberg's Real-Encyclopädie (Impfung).—*Galuagni*, Rivista clinica. Sep. 1884 (Statistik, Schatskraft).—*Gast*, Schmidt's Jahrbücher. 1879, pag. 201 (Experimentelles).—*Gatti*, Nouv. reflex. s. l. pratique de l'inoculation. Amsterdam 1876 (Deutsch v. Wagler, Hamburg. 1792)—*Geissler*, Zeitschrift d. kyl. Sächs. statist. Bureaus. XXVI ff. (Sächs. Impfwesen i. d. I. 1876—85).—*Gerhardt*, Zeitschr. f. klin. Med. VII. 4 (Intermittensimpfung).—*Grünhagen*, Vierteljahrschr. f. Derm. 1872, pag. 150 (Histologisches).—*Guéniot*, Gourme et vaccine. Bull. de l'acad. de med. 1882, Nr. 20.—*Guttstadt* u. *Jacobi*, Das Reichsimpfgesetz nebst Ausführungsbestimmungen etc. Berlin 1876.—*Hager*, Berl. kl. Wochenschr. 1883, Nr. 48 (Vaccinepalver)—*Heim*, Histor. krit. Darstellung der Pockensenchen etc. Stuttgart 1838.—*Hering*, kuhpocken an Kühen. Stuttgart 1839.—*Hesse*, Kuhpocken u. Blatternimpfung. Leipz-

ig 1827.—*Heyd*, Impfsyphilis. Stuttgart. 1867.—*Hüller*, Centralblatt f. die med. Wissenschaft. 1876, Nr. 20 u. 21 (Contagium der Vacc.).—*Hirsch*, Handbuch der geogr. Pathol. Erlangen 1869.—*Hodgson*, Brit. Med. Journ. 1881, Nov. (Kuh-u. Menschenpocken).—*Hutchinson*, Med.-chir. Transact. 1871, pag. 317 u. 1873, pag. 189 (Casuistik).—*Jahn*, Correspondenzbl. des ärztl. Vereins von Tübingen. 1879, pag. 337 (Successivimpfung).—*Jenner*, An inquiry into the causes and effects of the variolae-vaccinal. London 1798 u. 1800 (Hauptwerke, deutsch v. *Ballhorn*, Hannover 1799 u. 1800).—Impfgeschäft, Deutscher Reichsbericht für 1882. Arbeiten d. k. Gesundheitsamts, I. Berlin 1884.—*Krebs*, Archiv f. experim. Pathologie X.—*Koch*, Deutsche med. Wochenschr. 1882, Nr. 26, 27. (Conservirbarkeit der animalen Lymph).—*Köbner*, Vierteljahrschr. f. Derm. 1877, pag. 133. u. 507 (Syphilisübertragung).—*Kranz*, Beyer. ärztl. Intelligentsbl. 1882. etc. (Ergebnisse der Impfung in fonigr. Bayern).—*Kuschnaul*, 20 Briefe über Menschenpocken. Freiburg. 1870.—*Lanoix*, Etude sur la vacce. animale. Paris, 1886.—*Lenner*, Vierteljahrschr. f. ger. Med. XXXVI, 1882, Heft 2 (Werth der Animalen Lymph).—*Marcus* Deutsche Vierteljahrschr. f. Gesundheitspflege 1880, 4, pag. 775 (Impfgeschäft).—*Lothar Mayer*, Beiträge der geburtshilf. Gesellschaft. 1873 pag. 186 (Pocken beim weibl. Gesellschaft).—*Virchow's Archiv*. LXX, 1877, pag. 14.—*Virchow's Archiv*. LXXIX 1880, pag. 44. (Empfänglichkeit Neugeborener).—Vierteljahrschrift f. ger. Med. 1880 pag. 95 (Technik).—*Michelson*, Vierteljahrschr. f. Derm. 1872, pag. 49 (Carbol-u. antisept. Flüssigkeit).—*E. Müller*, Berliner kl. Wochenschr. 1866, Nr. 13 u. Vierteljahrschr. f. ger. Med. XI. pag. 116 (Glycerinlymphe).—*Oesterlen*, Handb. der med. Statistik. 1865.—*Osiander*, Abhandl. über Kuhpocken. Göttingen. 1801.—*Pfeiffer*, Jahrb. f. Kinderheilkunde. XIX (Rückimpfung).—*Gerhardt's Handbuch* f.

Kinderk. Tübingen 1877 (Impfung).—Correspondenzbl. des ärstl. Vereins v. Tübingen 1883, Nr. 29 (Retrovaccin, Flächenimpfung).—Die Vaccination, ihre experimentellen u. erfahrungsgemässen Grundlagen u. ihre Technik mit besonderer Berücksichtigung der animalen Vaccination. Tübingen 1884.—*Pick*, Vierteljahrschr. f. Derm. 1870, pag. 253 (Prophylaxe).—*Pissin*, Berl. Kl. Wochenschr. 1881, Nr. 44 (Conservat der animalen Lymphe).—Berliner Kl. Wochenschr. 1884, Nr. 34. (Ueber Controversen).—*Pohl-Pincus*, Untersuchungen über die Wirkungsweise den Vaccinat. Berlin 1882.—*Pott*, Archiv f. Kindes heilk. 1883, pag. 407 (Antiseptica u. Lymphe).—*Prager*, Berl. Kl. Wochenschr. 1867, Nr. 49; 1868, Nr. 25 (Revaccination).—*Presl*, Blättern u. Impfung in Oesterreich 1873—1882. Statische Monatsschr. XI, Heft 11 u. 12.—*Qinst*, Berl. Kl. Wochenschr. 1883, Nr. 52 (Künstl. Züchtung des Kuhpockenstoffes).—*Reissner*, Deutsche med. Wochenschr. 1881, Nr. 30 u. 48 (Impfpulver).—*Reiter*, Impfung des Kùhe nicht Menschenblatternstoff. Zeitschrift f. Staatsarzneikunde. 1840, XL.—Würdigung der grossen Vortheils der Impfung etc., München, 1849.—*Reyer*, Intelligenzblatt IV., 1872, Nr. 178 (Studium über Austecttungs-fähigkeit der Vacc.).—*Reynaud*, Comp. rend 1884, pag. 453 (Experimentelles).—*Reichs-Impfcomission* zur Erörterung der Impffrage, zusammengetreten am 30. Oct. 1884, im Kaiserl. Gesundheitsamte (Arnsperger, Bets, Boeing, v. Conta, Eulenberg, Grassheine, v. Kerschensteiner, Koch, v. Kch. Krannz, Krieger, Pistor, Reissner, v. Scheel, Siegel, Thierfelder, Weber). Arztl. Vereinblatt 1884, December-Nummer (Beschlüsse) und 1885, Mai his October (denkschrift n. Rotocolle); 1879, Nr 82, 89, 90; 1880, Nr. 103; 1882, Nr. 128; 1883, Nr 130; 1884, Nr 144; 1885, Nr. 137 u. 164, f. D. med. Wochenschrift 1886, Nr 15 (Petionscomission d. Reichstages).—*v. Rincker*, Vierteljahrschr. f. Derm. 1878, pag. 259

(Impfsyphilis). — *Riesel*, Aerztl. Vereinsbl. 1884, April (Animale Vacc., Erysipel); Vierteljahrschr. f. ger. Med. XLII, 2.—*Robert*, Vaccin. et Syphil L'Union Méd. 1882, Nr. 47 u. 71.—*Roth*, Vierteljahrschr. f. Derm. 1878, pag. 310 (Impfrothlauf).—*Sacco*, Tratt di vaccinazione. Milano 1809 (Deutsch v. *Sprengel*, Leipzig 1812).—*Schmid*, Bayer. ärztl. Intel, ligenzblatt 1883, Nr. 47, 48 (Impftuberculose).—*Schube*, Impfung, Impfgeschäft u. Impftechnik. Berlin 1888.—*Seaton*, Handbook of vaccination. London 1868.—*Seemann*, Deutsche Zeitschrift f. pract. Med, 1878, Nr. 21.—*Senfft*, Berl. kl. Wochenschr. 1872, Nr. 17 (Experimentelles).—*Sinnhold*, Jahrb. der Kinderheilkunde, 1876, pag. 383 (Erysipel).—*Skrzeczka*, Vilteljahrschr. f. gericht. Med. 1878, pag. 363.—*Steinbrenner*, Traité sur la vaccine etc. Paris 1843.—*Stern*, Breslauer ärztl Zeitschr. 1880, Nr. 17 (Thymollymphe).—*L. Strauss*, Gazet. hebd. 1885, Nr 9 (Impftuberculose).—*S. Sunderland*, Hufeland's Journal 1830.—*Tappel*, Schutzpocken. Berlin 1881.—*Thiele*, Menschen-u. Kuhpocke. etc. Zeischrift f. Staatsarzneikunds. 1839, pag. 3.—*Vaillard*, Archive de Med. milit. 1884, Nr 15. (Gute Anleitung zur Technik der animalen Vaccine).—*Viennois*, Arch gén de méd. 1860, I. u. II. (Impfsyphilis).—*Voelkers*, Viesteljahrschr- f. ger. Med. 1876, pag. 375 (Aufbewehrung der Lymphe).—*L. Voigt*, Vaccine u. Variolr-Vierteljahrschr. f. off. Gesundheitspflege IV. XV,—1877 (Animale Vaccin). Berl. kl. Wochenschr. 1878, Nr. 12 (Stellung der Impfarste).—1883, Nr. 5-7 (Erwiderung auf Boeings Schrift).—Deutsch. med Wochenschr. 1885, Nr 72. (Beschaffung der Thierlymphe) u. Nr 52 (Bacteriologisches).—*Waeguer*, Statistischer Nachweis über der Werth der Impfung. Köln 1881.—*Warlomont*, Traité de la vaccine et de la vaccination hum. et anim. Paris 1883.—*Weigest*, Anatom. Beitr. zur Lehre u. den Pocken. Breslau 1874.—*Welck*, Philad. Med. Times, Aug. 1881 u. 1882

(Schutz u. Gefahren der Vaccin) — *Werscher*, Zur Impffrage. Mainz 1883. — *Wolffberg*, Centralblatt f. allg. Gesundheitspflege. 1883, Ergänzungsheft. I, 4, pag 183 (theoretisches Impfschutzes, Regeneration des Pockenauflage). — *Woodville*, Beschreibung einer Reihe u. kuhpockenimpfungen. Deutsch u. *Friesz*, Breslau. 1800. — *Zülser*, Berl. kl. Wochenschr. 1872. — *Zürn*, Die pflanzl. Parasiten, Weimar 1874. — *Bonar*, — *Garré*, — *Gassen*, — *P. Guttman*, — *Pfeiffer*, — *Pissin*, — *Schnadt*, — *Wolffberg* (Bemerkenswerthe Mittheilungen über Impftechnik, Antiseptik der Impfung, Pilzbefunde in der Lymphye, Impfersipel, Consesvirung der Lymphye).

痘志

●名稱

我邦ノ書史ニ載スル所ニヨレバ我邦ニ於ケル痘瘡ノ異稱ハ左ノ如シ

瘡瘡 續日本記大同類聚方ニ出ツ 瘡瘡 續日本記大同類聚方ニ出ツ 瘡瘡一見患之。則一村流行也。猶瘡之曳地也。故名焉(大同類聚方)

赤斑瘡 扶桑略記百練抄、吾妻鏡ニ出ツ 赤斑瘡 扶桑略記百練抄、吾妻鏡ニ出ツ 赤斑瘡 扶桑略記百練抄、吾妻鏡ニ出ツ 赤斑瘡 扶桑略記百練抄、吾妻鏡ニ出ツ

腕豆瘡 万安方ニ出ツ 腕豆瘡 万安方ニ出ツ 腕豆瘡 万安方ニ出ツ 腕豆瘡 万安方ニ出ツ

痘豆瘡 類聚國史ニ出ツ 痘豆瘡 類聚國史ニ出ツ 痘豆瘡 類聚國史ニ出ツ 痘豆瘡 類聚國史ニ出ツ

疱瘡 類聚國史、日本紀、扶桑略記、和名抄ニ出ツ 疱瘡 類聚國史、日本紀、扶桑略記、和名抄ニ出ツ 疱瘡 類聚國史、日本紀、扶桑略記、和名抄ニ出ツ

痘疹 大同類聚方ニ出ツ 痘疹 大同類聚方ニ出ツ 痘疹 大同類聚方ニ出ツ 痘疹 大同類聚方ニ出ツ

支那ノ醫書ニ散見スル所ノモノヲ集載スレバ左ノ如シ

膚瘡 肘後方ニ出ツ 膚瘡 肘後方ニ出ツ 膚瘡 肘後方ニ出ツ 膚瘡 肘後方ニ出ツ

豌豆瘡 病源候論、千金方、外臺秘要方ニ出ツ 豌豆瘡 病源候論、千金方、外臺秘要方ニ出ツ 豌豆瘡 病源候論、千金方、外臺秘要方ニ出ツ

痘瘡 聖惠方、簡易方ニ出ツ 痘瘡 聖惠方、簡易方ニ出ツ 痘瘡 聖惠方、簡易方ニ出ツ 痘瘡 聖惠方、簡易方ニ出ツ

痘疹 陳氏痘疹方論、和劑指南論ニ出ツ 痘疹 陳氏痘疹方論、和劑指南論ニ出ツ 痘疹 陳氏痘疹方論、和劑指南論ニ出ツ

痘疥 證治要訣ニ出ツ 痘疥 證治要訣ニ出ツ 痘疥 證治要訣ニ出ツ 痘疥 證治要訣ニ出ツ

痘風 丹溪心法ニ出ツ 痘風 丹溪心法ニ出ツ 痘風 丹溪心法ニ出ツ 痘風 丹溪心法ニ出ツ

天行痘瘡 羅氏、全幼心鑑 天行痘瘡 羅氏、全幼心鑑 天行痘瘡 羅氏、全幼心鑑 天行痘瘡 羅氏、全幼心鑑

天行豌豆瘡 羅氏、全幼心鑑 天行豌豆瘡 羅氏、全幼心鑑 天行豌豆瘡 羅氏、全幼心鑑 天行豌豆瘡 羅氏、全幼心鑑

痘疹 證治要訣ニ出ツ 痘疹 證治要訣ニ出ツ 痘疹 證治要訣ニ出ツ 痘疹 證治要訣ニ出ツ

痘疥 證治要訣ニ出ツ 痘疥 證治要訣ニ出ツ 痘疥 證治要訣ニ出ツ 痘疥 證治要訣ニ出ツ

痘風 丹溪心法ニ出ツ 痘風 丹溪心法ニ出ツ 痘風 丹溪心法ニ出ツ 痘風 丹溪心法ニ出ツ

瘡痘 八十一論ニ出ツ 木痘 醫說ニ出ツ 痘癰 炮瘡 病源候論、古今錄驗ニ出ツ 瘡疱 備門事親ニ出ツ

瘡疹 小兒直決方醫說ニ出ツ 斑疹 三因方ニ出ツ 癩疹 關家秘藏ニ出ツ 天行斑瘡 芋 三因方ニ出ツ

萍 三因方ニ出ツ 麻子 活幼心方ニ出ツ 疥瘡 百一選方ニ出ツ

百歲瘡 胡璣 痘疹心印 人生無不發痘疹者。自幼及長。必生一次。故名百歲瘡(痘疹毒集)

聖瘡 景祐全書小兒直指方論、痘疹世醫心法ニ出ツ 或曰、以爲三變化莫測之義。(万密齋)或曰、痘者四節十二日。陰陽相和。而成功如期。形色端正。好潔清。惡穢濁。實痘中之聖者也。故名聖瘡。

天瘡 痘疹世醫心法ニ出ツ 或曰、爲天行疫瘡也。()或曰、因毒與拾先天也。(心要々訣)

天花 痘疹心印ニ出ツ 或曰、痘古稱天花。貴清潔。而厭腥臭。(孫一奎心印)類天行疫癘。故名天花(馮楚瞻)

●疫史

痘疫ノ史ハ之ヲ細論シ難シ日月ト史籍トニ乏シケレバナリ

其最初流行ノ時ヲ攷フルニ痘瘡ハ我邦及ビ支那ニ於テ共ニ上古ニハ行ハレズ故ニ

○支那ノ最古醫書ニテハ「素問」「靈樞」「難經」共ニ其事見エズ痘ニ似タル病ダモ記スルヲナシ下リテ張

仲景(「傷寒」「金匱」)衛沈華佗王叔和等モ之ヲ論ジタルヲアラス左ノ二家ノ語之ヲ證スルニ餘リアリ

龐氏曰ク「自漢魏以前。經方不載。」(全幼心鑑)

戴氏曰ク「自漢已前。方書。初無痘疹。」(證治要訣)

支那ノ醫家ノ說ニヨレバ支那ノ醫書ニシテ痘ヲ記スルハ「肘後方」ヲ最初トス同書ニ曰ク建武中。於南陽。擊虜所得。仍呼爲虜瘡(外臺秘要方所引)ト是レ痘瘡ヲ以テ東晉ノ元帝ノ時建武中兵疫トシテ南陽ヨリ初メテ支那ニ入り來リタルモノトシタルニテ後ノ人ノ之ヲ以テ痘疫ノ初度トス李時珍本草綱目ヲ著ハス時肘後方ヲ引キテ痘ノ東晉ニ初マルヲ云フ後人多ク建武ヲ東晉ノ年號タル建武トセズシテ東漢光武帝ノ建武トスルハ誤レリ肘後方ハ東晉ノ人葛洪ノ著ニシテ單ニ建武ト云ヒタレバナリ之ニ就キテハ異說モ少ナカラズ或ハ前漢ノ時武帝ノ建元中ニ張騫ト云ヘルモノ西域月支國ニ使セシ時ヨリ傳染シ來レリトノ說ヲナスモノナリ(痘疹叢書。痘疹發微。誠書痘疹)或ハ馬伏波交趾ヲ定メテ歸リタル時ヨリ此病アリトスルモノアリ(張氏醫通)又或ハ之ヲ猶ホ古代ニ遡ラシメテ周ノ末秦ノ初メニ既ニ之アリトス(李梴醫學入門)

○我邦ニ於テ痘瘡ノ初度流行ハ聖武天皇ノ天平中ニ在リ

續日本記ニ曰ク「天平七年。乙亥。八月丙午。大宰府管内。諸國疫瘡大發。百姓悉臥。十二月壬寅。

是年頗不稔。自夏至冬。天下患豌豆瘡。天死者多。俗曰「蒙瘡」續日本記ニ曰ク「天平九年。春。疫瘡

大發。初自築紫來。經夏涉秋。公卿以下天下百姓。相繼疫死者。不可勝計。」

當時朝廷ハ醫ラシテ治方ヲ勘ヘシメ之ヲ諸國ノ官府ニ下セシ「類聚國史、拾芥抄、類聚符宣抄ニ見ヘ

タリ之レヲ國史ニ痘ヲ見ルノ初メトシ隔一年ニ一回ノ大流行アリ而シテソハ西方ナル筑紫ヨリ東方ニ蔓延シ其ノ何ニヨリテ起リシカハ「本朝世紀」ニヨレバ「從蕃船痘痘到天下自是患此艱者多。」ト云ヒ外人ノ船我ニ來ルモノ、中ニ罹病者アリテ之レヲ我ニ傳ヘシトナシ「大同類聚方」ニヨレバ「痘瘡初發。起自聖武天皇御宇。釣者遇蕃人繼此病。」ト云ヒ其何國ヨリ傳ハリシカラ云ハサレモ「續古事談」ニハ「颯」と云病新羅國ヨリ起リたり筑紫の人鷓鴣を飼ける船はなれて。彼國に着て其人うつりやみ來りけるとぞ。」ト云ヒ新羅ヨリ筑紫ニ染毒シタリトシ「埴養抄」等ノ記モ之ニ同シ原南陽ノ考ニヨレハ「孫真人者。唐高宗時人。而在天平之前。然則豌豆瘡自漢土傳我西州而至京師。古昔無之。而此時（天平中）初發乎。」

池田霧溪ハ又説ヲナシテ曰ク

『我邦痘瘡。肇於聖武天皇天平中。而當唐玄宗開元中。則雖肇於漢世。而至唐之時。瘴氣大盛。遂波及于我邦。』

ト要スルニ我邦ノ痘瘡ハ初メ支那又ハ朝鮮ヨリ傳行セシモノナランカ初上古最モ朝鮮ト交通多カリシヨリ又續古事談ノ説或ハ幾カラシ池田氏ノ考證ニヨレバ痘ノ第一次流行ハ蓋シ天平以前ニアラントモ云ヘリ

欽明天皇十三年冬十月。百濟聖明王釋迦佛金銅像幡蓋經論ヲ獻ズ時ニ疫行ハレ民多ク死ス人以テ罪ヲ稻目ガ佛ヲ信ズルニ歸ス而シテ「日本紀略」痘瘡ヲ稻目瘡ト稱スルヨリ考フレバ此疫ハ痘ナランコトハ天平七年ヨリ二百七年前ナリ（治痘要訣）○橋本伯壽ハ稻目瘡ヲ以テ麻疹トセリ（斷毒論）其後流行ノ年次我邦ノ史上ニ散見スルモノ概テ左ノ如シ

天平九年續日本紀	延曆九年續日本紀	弘仁五年文德實錄	仁壽二年類聚國史
仁壽三年文德實錄	延喜十五年扶桑略記	延長三年日本紀略	天曆元年日本紀略
天延二年扶桑略記	正曆四年扶桑略記	長德四年扶桑略記	寬仁四年日本略記
万壽二年扶桑略記	長元九年榮花物語	延久四年扶桑略記	承曆元年扶桑略記
寬治元年中右記	嘉保元年中右紀	承德元年皇年代略記	永久元年百練抄
大治元年百練抄	康治二年本朝世紀	應保元年百練抄	安元元年百練抄
治承元年百練抄	建久三年東鑑	建永元年百練抄	元仁元年百練抄
寬元元年百練抄	康元元年百練抄	建治三年國大略	應長元年國大略
正平十五年皇年代略記	正平二十年大日本史	文中三年皇年代略記	享德元年日本野史
享德二年文正年代記	文明九年妙法寺記	大永三年妙法寺記	天文十九年妙法寺記

痘論

痘ノ行ハル、ト支那ニ於テハ日本ヨリモ古ク而シテ上古ノ學者黃帝秦越人淳于公ヨリ後張仲景王叔和
皇甫謐褚澄孫真人等モ之ヲ論セズ醫書ニテ初メテ之ヲ論シタルハ「肘後備急方」ナリ今外臺秘要ニ引ケ
ル「肘後」ノ文ヲ案スルニ左ノ如シ

「比歲有病。天行發斑瘡。頭面及身。須臾周匝。狀如火瘡。皆戴白漿。隨決隨生。不即療。劇者數日必
死。療得瘥後。瘡癩紫黯。彌歲方滅。此惡毒之氣也。世人云。以建武中於南陽。擊虜所得。仍呼
爲「虜瘡」。

「肘后方」ハ晋ノ葛洪ノ著ス所ニシテ爾來漸ク痘ノ説アリ然レモ「肘後」後人ノ竄入多シ其以后ノ書又痘
ヲ記セシモノ「病源候論」最モ古ク最モ信スベシ

病源候論。傷寒豌豆瘡候曰。傷寒熱毒氣盛。多發皰瘡。其瘡色白或赤。發於皮膚。頭作標漿。戴
白膿者。其毒則輕。有紫黑色作根。隱々在肌肉裏。其毒則重。甚者五内七竅皆有瘡。其形如豌豆。
故以名焉。

又時氣皰瘡候曰。夫表虛裏實。熱毒內盛。則多發皰瘡。重者周匝遍身。其狀如火瘡。若根赤頭白

者。則毒輕。若色紫黑。則毒重。其瘡形如豌豆。亦名豌豆瘡。

ト此文記スル所ノ如キ頗ル瘡ナリト見ルベキモノアリ

本邦ノ先輩堀北渚池田錦橋等亦之ヲ言ヘリ「痘疹弁義」痘科辨要」要スルニ「肘後」以後ニ至テ痘ノ
漸ク之ヲ講スルモノアリテ之カ治方ヲ言フモノ多クナリシナラン唯論ノミニシテ方ナシ唐ノ孫思邈宋
ノ陳言ニ至リテハ論モ悉ク方モ載セタリ而カモ未タ專書アラサリシナリ

劉桂曰ク痘疹自漢以前。方書不載。至拓拔魏時。始有方藥。自唐迄宋。有董汲錢乙挺然獨出。

著方立論。爲翼聖經。最爲有功(續醫說)

ナレハ痘科専門ノ書ハ宋ノ時ニ至リテ初メテ之アリ。董汲錢乙陳文中(小兒痘疹方論)ヲ以テ其先鞭ト
ス。然レモ「四庫全書提要」ニ言フ所ヲ見ルニ

「案痘瘡之證。古所不詳。惟「書錄解題」。載董汲「小兒痘疹論」二卷。作於宋元祐中。然其書不傳。
未知所謂痘者即痘否。錢乙「藥證真訣」。於小兒諸病。皆條列至詳。亦不及於是事。

而シテ痘科ノ治ヲ云フモノ董錢陳三家ヲ宗トセザルナシ元ノ時ニ及ビ李東垣(蘭室秘藏)王好古(斑疹
論、痘論英萃)朱彥脩(治痘要法)ノ徒痘ヲ論スルモノアリ

其ヨリ以後劉昉(幼々新書)王賓湖(幼科類萃)徐用(袖珍)寇衡(全幼心鑑)湯衡(嬰童寶鑑)高武(正宗)汪

石山(理辨)魏直(博愛心鑑)李言聞(證治、要訣)聞人規、胡大卿(八十一論)李實(淵源)翁仲仁、龔廷賢(金鏡錄)萬菊軒(心要)俞東阜(扈言)等諸家アリ。明ノ世嘉靖万曆ニ及ヒテ之ヲ講スルモノ最盛ニシテ實驗亦頗ル博ク頗ル富メリ、而シテ龔氏ノ著古人説カサル所多シトシ大ニ世ニ重セラレ後人説ヲナスコト多ク之ニヨリ朱噓菴痘科鍵ヲ著ハスモ之ヲ骨子トセリ、清ニ至リテ費啓泰(救偏瑣言)翟良(痘科類編釋意)黃序(約囊)李善(要略)馮兆張(全集)琰全章(誠書痘疹)等アリ、著作彌多ク發明益繁シク治術亦大ニ進歩シテ種々ノ種痘法起リ朝廷ニテハ乾隆中(一七四四)「醫宗金鑑」ヲ編ムル其中ニ種痘ノ一科ヲ擧ゲ民間ニテハ方氏「種痘小引」張氏「種痘新書」ノ著アリ。後六十年(一八〇五)邱熹ニヨリテ西洋ノ種痘法モ傳ヘラレ遂ニ東漸シテ牛痘ヲ我邦ニ傳フルニ至レリ

○我邦ニ於テハ上世ニハ固有ノ持説アリシナラン。其後次第ニ支那ノ醫説ヲ入ル、ニ及ビテ其傳漸ク不明トナレリ。永觀中(九八三)ニ撰ハレシ「醫心方」ニハ「病源候論」「千金方」等ノ治術多ク法則トセラレタルナレハ其學説ノ之ヨリ遠キアルヘクモアラズ。後世ニ至リテ多數ノ醫書舶載セリ性全ガ「王安方」ニハ「幼々新書」「聖惠論」「醫說」「錢一論」「活人書」「痘疹訣」ヲ引キテ其時猶元ノ初年ニ當レリ李王朱ノ書未タ出デズ。下リテ徳川氏ノ時代ニ至リテ香月牛山ハ管絳孫朋來等ノ説ヲ採リ名古屋玄醫ハ其書ニ陳文魏中直管絳尚恒万全ノ説ヲ擧ゲ堀元厚ハ管絳万全ノ論ヲ引クコト多シ。時代稍遲レテ享保

中武田氏朱氏ノ「痘科鍵」ヲ刻シ。同時代ヨリ世醫又聶氏ヲ尙トヒテ「活幼心法」ト云ヘル書又大ニ行ハル。後三四十年ニシテ池田氏ト云ヘル痘科ノ専門家起レリ龔雲林ガ學ヲ傳ヘテ大ニ發明ヲ加ヘ數代ノ間ニ幾多ノ著書アリ。其門人四方ニアリテ其學風一時我邦ヲ風靡セリ

初メ承應中(一六五二)明人戴笠(一五九七至一六七二)杭州仁和縣ノ人ニシテ年五十明ノ亡ブルニ遇ヒ儒ヲ棄テ、醫ヲ業トシ遂ニ東航シテ我長崎ニ投ス。尋テ肥筑豊ヲ歴テ長門ニ入り周防ノ岩國ニ來リ住ス。吉川氏ノ臣池田正直(號嵩山)篤ク之ト交ル。戴笠嘗テ明ニ在リシトキ龔氏ニ從テ醫ヲ學ビ最モ深ク痘科ニ通ス。正直遂ニ之ニ從テ痘科ノ秘訣ヲ受ク。其子信之其孫正明相承ケテ家學トナス。曾孫獨美(號錦橋、一七三四至一八一六)ニ至リ頗フル志ヲ此學ニ遂クシ痘疫アリト聞ク毎ニ行キテ家法ヲ驗シ効ヲ收ムルコト多シ殿島ヨリ浪華京都ニ出テ痘科ヲ以テ名聲アリ。寛政九年遂ニ召サレテ江戸ニ至リ其明年更ニ侍醫トナシ仍テ爲ニ痘科ヲ醫學館ニ創置シ之ヲシテ痘科ヲ教授セシム。東洋ニ於テ國學ニ於テ痘科ヲ立テ、之ヲ教授講究スルコト此ヨリ始マル實ニ寛政十年即チ西曆千七百九十八年ジエンナ一種痘發明後十年ナリ。錦橋初メテ戴氏ノ法ニヨリテ太極ヲ立テ又元日元時ヲ定メ之ニ參スルニ三初五神四節八證及ヒ唇舌秘鑑面部圖説ヲ以テシ其虛實ヲ分チ死生ヲ決スルコト皮膚ヲ開キテ臟腑ヲ見ルカ如シ是レ古人ノ未タ發明セサル所ナリト稱ス。其子池田柔(號霧溪、一七八四至一八五七)又痘科

教授タリ父子著ス所痘書頗ル多ク皆見ルヘキモノナリ門徒又諸邦ニ布ク。而シテ當時世醫ノ奉セシ醫書ハ何ナリヤト云フニ「痘科鍵」ナリシ。「痘科鍵」ハ享保中武田氏之ヲ刻シタルモ未ダ甚ダ廣ク行ハレズ。錦橋京都ニテ之ヲ門人ニ講シテヨリ盛ニ世ニ行ハル。刊行セラル、ニ及ヒテ其說遂ニ殆ント我邦ニ普チシ。池田氏ノ家學ハ「治痘論」「痘科辨要」「續痘科辨要」等ヲ見テ其委細ヲ見ルベシ是ヨリ前後世勢漸ク移リ、外交益頻ナルヨリ從來諸家ノ痘說入り諸國各其說ヲ奉シテ門戸ヲナスモノアリ吹苗點苗ナド種々ノ種痘法モ或ハ傳來シ或ハ施設セラレ遂ニハ邱熹ノ書ヲ媒トシテ牛痘法モ入り來ルニ至レリ

●痘因

痘瘡ノ原因ニ就キテハ宋以來種々ノ說アリ。或ハ胎毒トシ命門ニ伏ストナシ（錢仲陽）脾胃ニ藏ストナシ（朱噓菴）。或ハ淫火精血トシ（郭子章）。或ハ後天ノ食毒トシ。或ハ味血餅トシ。或ハ穢血トシ。或ハ三穢液毒ト稱ヘ。或ハ淫溢勝復ト稱ヘ（陳文中）。或ハ之ヲ歲運ニ歸シ天行疫厲ナリトスルモノアリ（魏廷豹）
張潔古曰ク「兒之在母腹也。胎養十月。蘊蓄濁惡熱毒之氣。非一日。及歲年而後發」。儒門事親是レ胎毒ノ說ナリ。方全胎毒ヲ解シテ曰ク男女交媾。精氣凝結。毒亦附焉。此胎毒之原也。袁氏痛論

ノ此說ヲ破フル然レモ遂ニ一ニ定マラザリシ

聞人伯園ハ曰ク「小兒必患瘡痘者何此由在胎中受穢毒也。小兒瘡痘。或作於幼年。或發於壯歲。古人預療之術。載在方策。千金方云。兒初生用綿裹指。急拭去口中汚血。不爾啼聲一發。嚙下入腹。致生諸疾。又令飲以甘草湯吐出胸中之惡。仍服生地黃汁一蜺殼許。利下惡物。至如今之人用黃連淡鼓。亦所以革惡穢也。」ト。万全之ヲ解キテ曰ク「兒在母腹。飢則食母之血。渴則飲母之血ト。是レ又先天ノ穢毒即チ胎毒トスルノ說「千金」以來蓋シ此ノ如ク說キシ人アルナリ

李東垣ノ如キハ稟賦ニ出ツルトスモノ曰ク「小兒降生。口中尙有惡血。啼聲一發。隨吸而下。此惡血復歸命門胞中。僻於一隅。隱伏而不發。直至兒內傷乳食濕熱之氣。下陷合於腎中。二火交攻。營氣不從。逆肉裏。惡血乃發」。是レ聞人氏ガ惡血歸右腎ノ說ニ基キ前二氏ノ說ト歸ヲ一ニシ而シテ揣摩ノ臆說、殆ント解スベカラズ

魏桂嚴曰ク「痘之爲證。根於精血之初。而成淫火之後。」男女交媾。無欲不行。無火不動。欲因火動。火因欲熾。」

管樞曰ク「男女交媾。無欲不行。無火不動。慾情肆欲。而火毒。遺於精血之間」ト先天慾火ヲ以テ痘源トセルナリ

聶久吾モ胚胎ノ毒トス

費德封曰ク「精血厚而情慾淡者。順。血旺而精薄。或精強而血虛。或男淡而女熾。或女淡而男熾者。險。男女俱熾。毒精毒血。而爲孕者逆。

汪機曰ク「男女交感。罔不縱情慾欲。而扇動五臟厥陽之火。五臟之精血。己自孕有火毒。子焉施化。以成男女之形。則兒之五臟百骸。莫非火毒所潛伏。火與元氣。不容兩立。殆必待時而發耳。所以多感異氣而發者。淫欲之火亦異氣也。以異感異。譬猶火就燥水就濕。同類相召。寧弗應乎。是レ皆淫火欲火ノ説ナリ

張路玉曰ク「炎方火毒。蒸發先天淫火毒邪而成。蓋得於有生之先。發既生之後。或感風寒驚食。或當歲氣併臨。則蘊發爲痘

陳文仲曰ク「小兒在胎之時。乃母五臟所養成形也。其母不畏禁忌。姿意所欲。加添滋味。好啖辛酸。或食毒物。其氣搏於胞胎之中。所以小兒在胎胞之時。受得此毒。名曰三穢液毒。今瘡疹者。三穢液毒所出也。一者五臟六腑穢液之毒。發爲水泡瘡。二者皮膜筋肉穢液之毒。發爲膿水疱瘡。三者氣血骨髓穢液之毒。發爲膿血水泡瘡。三毒既出。發爲痘疹瘡也」ト。是レ母ノ食スル所ヲ本トシテ而シテ病毒ヲ胎生ノ時ヨリ存スルモノトス

錢仲陽曰ク「小兒在胎。食五臟血穢。伏於命門。若遇天行時熱。或乳食所傷。或驚恐所觸。則其毒當出。」ト是レ母體五臟ノ血液中穢渣食道ヨリ入リ腎ニ伏スルヲ以テ痘瘡ノ原因トナス。以上ハ明ニ生來ヲ主トスル説ヲナスモノナリ

五雜俎ニ載スル韃靼ノ人ハ鹽醋又ハ猪肉ヲ食ハス故ニ痘ナク湧腫小品ニ載スル北戎南蠻ノ人ハ鹽醬ヲ食ハス故ニ痘ナシト謂フモノハ即チ反面ヨリ後天食毒ヲ是認スルナリ而シテ後天食毒ノ説ハ前諸家說中ニモ散見ス

程少岐曰ク「小兒痘疹。皆原於胎毒所成然其發越實本乎歲運而致」。是レ歲運ニ本ツクトナスノ説ナリ袁菊泉曰ク「痘內發於臟腑。外應於運氣。天動人隨。毫髮不隨」。程氏ト同説ナリ

以上ノ説ハ胎毒又ハ歲運ヲ以テ説キタルモノナリ。更ニ立説ノ方面ヲ異ニセルモノヲ擧ケンニ巢元方曰ク「表虛裏實。熱毒內盛。攻於臟府。餘氣流於肌肉」。外臺秘要所引

聞人規曰ク「傷寒邪熱。在表裏」

李言聞曰ク「痘疹之發顯。是天行時氣。塵市村落。互相傳染。輕則俱輕。重則俱重。雖有異於衆者。十之一二而已。豈可槩謂胎毒哉。然疫厲終身不染。比比皆是。而痘疹無一人謂免。疫厲一染之後。不能保其不再染。痘疹一發。不再染。則胎毒之說。又何可盡廢乎」

孫朋來曰ク「淫火即胎毒也。天行即疫厲也。致痘之由端不外此二者。蓋淫大肇於有生之初。伏而不發。必俟天行。煨煉一番。然後洩之」。此四家ハ痘ヲ以テ或ハ傷寒ニ類スルモノトナシ。或ハ之ヲ天行ノ疾病トシ流行性疾病トナスニ似タリ。痘ノ如キ疾病ニ就キテ其傳染性タルヲ説クモノ少ナキヲ此ノ如ク數千年間終ニ此等一二ノ説ヲナスモノアルハ殆ト異シムベキナリ。然レモ其間又左ノ諸家ノ如キ説アリ

郭子章曰ク「痘瘡胎中之毒氣也。鄉鄰痘瘡盛發。天地之沴氣也。天地之中氣。與胎中之毒氣相觸而成痘。故一兒痘。百兒隨之。氣爲之也。重則俱重。沴氣厲也。輕則俱輕。沴氣未甚厲也。時症方重。而獨輕者。胎毒輕也。時症方輕。而獨重者。胎毒重也。

葛洪ノ「肘后方」ニ至リテハ「比歲有病。天行發斑瘡。……彌歲方滅。此惡毒之氣也」ト云ヒ

寇衡ノ「全幼心鑑」ニハ「建武中。於南陽。征虜所得。呼爲虜瘡。次而大小兒相繼傳染。爲受虜之疫氣也」ト云フ

本邦ニ於テハ延長ノ頃(十七世紀ノ初)丹波家ヨリ公卿へ答へシ書ニヨレハ痘瘡ハ歲疫ノ爲ス所トナシ。又和氣氏ノ帝室公卿ニ答へシ書ニハ古昔我邦ニテ多ク病ヲ解シ直ニ之ヲ以テ鬼ノ病トセリ。蓋シ此頃ハ支那ニテハ唐ノ時代ニテ痘ノ方モ論モ未タ具ハラサリシ時ナリ。從テ我邦ニ於テモ亦之ガ確論

ナカリシナリ。其後歷代ノ醫家多クハ支那ノ舊説ヲ踏襲シテ新ニ發明スル所ナク確乎タル定説モアラカリシモノ、如シ。而シテ痘ヲ以テ家學トナスモノ、如キハ幕府痘科ヲ置キシ頃ヨリ之アリ

池田錦橋及ヒ霧溪ハ郭氏ノ説ヲ至當トセル人ニテ。霧溪ノ記スル所ニ據レバ曰ク「痘本胎毒。内伏于右腎命門。外感于天行疫厲之氣而發」。痘者本一種之異毒。而非尋常之胎毒也。其感觸者。亦一種之異氣。而非尋常之疫邪也。要之天行之沴氣。與蘊藏之遺毒。相觸激而發也」ト云フ。諸家ノ説紛々タル中ニ於テ獨リ此見ヲ持セシハ識亦頗フル高シト云フテ可ナランカ。橋本節齋ニ至リテハ「痘者傳來異域之沴氣。感應於人身天稟之毒氣也」ト云ヒテ。而シテ天稟ノ毒氣ト云ヘルハ人ノ各壽天強弱疾病ノ有無輕重多少ヲ殊ニスルニ就テ云ヘルノミナリ。是レ即チ痘ハ殆ド醇然タル流行傳染病ト見解シタルモノナリ

橋本氏ハ其著「國字斷毒論」ニ左ノ如ク言ヘリ

「痘瘡の傳染に二あり第一は痘瘡病に近よりて熱氣鼻に入るときは假令其臭は知らずとも必ず毒氣にかぶるゝなり。第二は痘瘡病の玩物すべて病中寢所にありし物を手に觸れても傳染す。第三は痘瘡家の食物にて傳染す」

●痘證

支那及日本痘科諸書ノ痘瘡ノ證候及ビ經過ヲ記述スル太ダ詳密ニシテ。其研究ノ什麼的ニ精到ナリ
シヲ想フニ足ルモノアリ。左ニ「保赤全書」「活幼心法」「博愛心鑑」「痘科辨要」「續痘科辨要」「治痘論」等
ニ據リ。概括シテ痘瘡ノ證候及ビ經過ヲ記載スベシ
潜伏期ニ就テハ云ク

「夫痘不熱不發。猶五穀之不熟不結。體之熱也。乃毒與時氣。相感觸而動。內傳百脈。外注皮膚。痘未見而先兆」

「序熱之時。睡中微悸。鼻出氣粗。煩渴舌白。脈浮數而緊。脚酸軟。不能行者。是痘兆也」
如「面頰赤喜睡。嘔吐不食。精神恍惚者。亦痘序之驗也」

序熱ニ關シテハ云ク。

熱有輕有重。毒輕則熱輕。毒重則熱重。又有熱五六日出者。有熱一日即出者。
發熱温平。肌膚潮潤。唇舌滋潤無苦。聲音清亮。睡中微々驚。便食如故。或少食貪睡。皆吉兆也
發熱時。腹痛腰痛。四肢酸痛。皆重症
發熱時。吐瀉。切不可行止法
發熱時。譫語癡狂。見鬼見神。燥亂不寧

序熱悠悠。不渴不搖。與感冒之邪相似者
序熱之時。煩渴好飲。舌苔白者。痘序之常候也
序熱之時。驚搐者。謂之驚痘
序熱之時。吐血者。爲「惡候」。如血自大小便出者。死在且夕。唯鼻衄之一症。熱從衄解。勿敢深慮
序熱之時。微汗出者。腠理疎通。痘出自快。如汗流不止者。表虛亡陽也
序熱之始。忽然眼赤腫封合者
序熱之時。食則嗜噫。飲則噎。飲食共不能下咽者。謂之啞喉
痘ノ見證ハ之ヲ別テ四節トス。曰ク見點三日。曰ク起脹三日。曰ク灌膿三日。曰ク收靨三日。合セテ
十二日コレナリ。四節ヲ以テ春夏秋冬ニ配シ。十二日ヲ以テ十二月ニ當ツ。其說ニ云ク
「痘瘡象于天時。期十有二日。以日代月。以象一歲。三日一轉。分爲四節。以象四時。而生長
收藏之令行焉。見點三日春之令也(言一二三日也)。起脹三日夏之令也(言四五六日也)。灌漿三日
秋之令也(言七八九日也)。收靨三日冬之令也(言十十一二日也)。合十二日。以爲定期」
以下各節ヲ略說スレバ

見點(一ニ見苗、放標ト曰フ) 身熱スルヲ三四日。熱解ケテ始テ放痘スルモノヲ順トシ。發熱半日一日ニシテ直ニ放標シ壯熱驚搐スルモノヲ逆トス

見點大ナルモノハ稀ニシテ。小ナルモノハ密ナリ。左右一點相對出スルモノヲ對珠ト名ケ。上下相累出スルモノヲ累珠ト名ケ。皆稀疎ノ候ナリ。五六點叢出スルモノヲ梅花叢ト名ケ。一處合聚群出スルモノヲ蟻窠ト名ケ。皆稠密ノ候ナリ。痘已ニ出レハ則チ熱ハ當ニ解クベシ。如シ解ケサルモノハ毒猶内ニアリ。初苗稀疎ト雖モ再出稠密ニ至ル。之ヲ復出痘ト謂フ

熱微ニシテ見點稜密ナルモノアリ。見點色白ク煩渴冷水ヲ好ミ、躁亂寧カラズ痘苗遲々トシテ起ズ、或ハ忽然隙地朱點ヲ發シ、細少疹ノ似ク、或ハ數窠形稍大、紫黑色ヲ呈スルモノアリ。纔熱直ニ苗ヲ見ハシ、其色紅紫痘出テ、熱愈盛ナルモノアリ(火裏苗痘)。未熱ノ時頭面乍チ大痘數點ヲ發シ之ニ繼グニ大熱ヲ以テシ、餘痘皮下ニ隱々タルモノアリ(報痘)。報痘磊落稀疎ニシテ二三日後、餘痘見ハレザルモノアリ(試痘)。諸痘未タ起ズ、其中一二窠、形特ニ虛大ニシテ突起炎亮、先ツ黃熟スルアリ(賊痘)

見點隱々簇々トシテ乾枯色白クシテ頂陷ノ黑暗ナルモノアリ(蠶退痘)。空殼一聯窠粒アリ紅暈ナキモノアリ(蛇殼痘)。見點焦枯色赤、陷伏起ズ、血點アリテ頭粒ナキモノアリ(蚤斑痘)。其紅紫色

ナルモノアリ(血點痘)

見點ハ面部ニハ他處ヨリモ多キヲ痘ノ常候トス。而シテ頭ノ獨リ密ナルモノアリ(蒙頭)。頸項ノ密ナルモノアリ(鎖項)。胸膈ノ密ナルモノアリ(擠胸)。腹前ノ密ナルモノアリ(蠶腹)。背間ノ密ナルモノアリ(聚背)。腰部ノ密ナルモノアリ(纏腰)。兩臂ノ密ナルモノアリ(鱗坐)。兩膝ノ密ナルモノアリ(聚背)。皆惡候トス

起脹 發熱三日ニシテ見點。又三日ニシテ出齊。四日ニ至レハ則チ面部初出ツルモノ起脹シ。五日ニ至レハ則チ兩手及次出ノモノ起脹シ。六日ニ至レハ則チ兩足及後出ノモノ起脹シ。面目ト與ニ漸ク浮腫シ。鼻塞カリ涕ヲ流シ。口角涎ヲ流シ。兩眼朦朧トシテ開クヲ欲セサルハ順候ナリ

起脹ノ時。色焦紫ナルハ毒盛ナリ。形大ニ皮薄シテ縐紋ヲ起スモノハ毒盛ニ氣虛スルナリ。滿頂紅ナルハ血滯ルナリ。一等光活愛スベク。嬌嫩艶靨ニシテ、手モテ之ヲ捺セハ則チ破レ燈モテ之ヲ照セハ琉璃ノ如キモノアリ、此レ假脹ナリ。若シ五日ニシテ黃色ヲ帶フルハ此レ假漿ナリ。其色濁濃ナルヲ吉トナシ、清淡ナルヲ凶トナス。其黃モ亦蒼老色ナルヲ吉トナシ。黃土色ナルヲ凶トナス

灌膿(一ニ貫膿ト曰フ) 痘症順ナルモノハ。六日ノ暮ニ至リテ。面部半バ膿化シテ微黃色ヲ帶ブ。七日ニ至リテ八九分膿化シ。八日ニ至リテ全ク黃熟シ。九日ノ暮ニ至リテ痘頂微黒ヲ帶ブ之ヲ蒼老

ト謂フ。肉腫稍消エ。隙地細皺ヲ見ハス。是レ將ニ収斂セントスルノ候ナリ。然レ窠粒ノ大小ニ因
 リテ遲速アリ。大ナルモノハ漿滿持久シテ十二日ニ至ルヲアリ。小ナルモノハ五日ニ至リテ已ニ
 膿化黃熟シ八九日ニ至レハ盡ク收結ス
 灌膿ノ時。乾嘔スルモノアリ。鼻塞ルモノアリ。壯熱解ケズ、煩渴歇マズ、反テ寒戰咬牙スルモノ
 アリ。煩燥寢テズ多言妄語スルモノアリ
 收斂。痘九日ノ夕ニ至レハ。人中及ヒ口角兩額ノ邊先ツ黃黑色トナリ。肉腫稍消エ。頭髮中及ヒ兩
 手、十分黃熟シ、兩脚ハ未タ十分ナラズ。十日ノ朝ニ至リテ天庭印堂ノ邊亦黃黑色トナリ、人中兩
 額痂ヲ結ビ。肉腫漸ク減シテ兩眼將ニ開カントス。是ヲ正收トナス
 以上四節ニ嗣デ現ハル、ヲ落痂トス。落痂ノ定期ハ十三日ヲ以テ始トスレモ。其輕キモノハ十一二日
 ニシテ落痂スルモノアリ。重症ニアリテ八九十日ニ及ブヲアリ。又窠粒小ナルモノハ期ニ先チ。窠粒
 大ナルモノハ期ニ後ル、ヲ常トス
 痂皮皮肉ニ粘着シテ脱落セサルモノアリ。醫後面部及手足浮腫スルモノアリ。滿口白糜乳食下ラサ
 ルモノアリ。口氣酸臭物々人ヲ衝キ唇吻紫黑色ナルモノアリ。時ニ發熱頭項或ハ臂腰ノ邊突起赤色
 ニシテ形注節瘡ノ如キモノアリ。偏身大熱ヲ發スルモノアリ。手肘或ハ足膝忽然腫起シテ肌色變セ

ズ直ニシテ屈セサルモノアリ

以上説ク所ハ。痘瘡ノ尋常ノ經過ナリ。而シテ痘科諸家ノ説。痘ニ三項アリトナス。曰ク順。曰ク
 險。曰ク逆。其順症ハ必シモ服藥ヲ要セズ。其逆症ハ俱ニ治スベカラズ。故ニ二症ハ醫ニ藉ルヲナシ。
 唯險ノ一症。亦分テ三項トス。險中ノ順。險中ノ險。險中ノ逆。是ナリト
 併發症(夾症)ニ就テハ。左ノ諸症ヲ擧ケタリ

驚(搖擗) 痘前ニ發スルハ吉兆ナリ。痘發スレハ驚止ム。痘後驚ヲ發スルハ痘ノ成功セサルニ由ル。
 不治ナリ

狂(譫語) 痘前ニ發スルハ順候ナリ。其痘後ニ發スルハ多クハ救フベカラズ

嘔吐 痘ノ出齊ヲ待テ吐自ラ止ムヲ常トス

泄瀉 痘前ニ發スルハ順ナリ

咬牙 初起ハ不治。起脹ノ時ハ凶。七八日ノ後ハ治スベシ

頭痛 止タ頭痛アルハ輕シ

目閉 初起ハ不治。八九日無事。十三四日凶シ

咳嗽 無事

氣急(呼吸困難) 初熱ハ凶。八九日無事

聲啞 初起ハ不治。七八日可治。或ハ哭泣聲啞シ。色錫ノ如クナルハ生ク。暗ナルモノハ死ス。痲落後ハ凶シ。喘息ヲ兼ヌルモノハ終始不治

喉痛 初起ハ治シ難シ。八九日可治。痲後ハ凶シ

心胸痛 不治

腹痛 初熱ハ無事。痲落チテ後ハ凶シ

腰痛 初起及痘中ハ凶シ。十四日後ハ無事ナリ

手足痛 初起ハ凶。八九日無事

手搖 不治

足搖 不治

足冷 膝ヲ過ルモノハ治セズ

眼出血 治セズ

耳出血 治セズ

鼻衄 無事

吐血 鮮血ハ治スベシ。黒血ハ治セズ

尿血 治セズ

大便血 治スベシ

寒戰 初起ハ不治。七八日後ハ死セズ

●痘治

「肘后方」(本草綱目ニ所引)云フ所ヲ見ルニ支那ニ於テハ初流行以來多ク密煎升麻ヲ以テ時々之ヲ食并ニ水ニテ升麻ヲ煮、綿ニ治メテ之ヲ拭ヒ又ハ洗ヒタリ。其後病源候論。其論アリテ其方ナク。「千金」以後其方アレバ太詳ナラズ。我朝天平中頒布セシ藥方及ヒ大同類聚方ニハ痘瘡初生ノ時金箔ヲ煎シテ多ク食フベシトアリ。其後丹波氏「醫心方」ヲ撰ビシ時「千金方」「葛氏方」「救急單驗方」「新録方」等ヨリ引ク所アレバ甚見ルベキモノナシ。蓋シ此等ノ間晉魏以後宋ニ至ルマテ凡ソ六百年和漢共ニ痘ノ治術上見ルベキモノナシ

天平九年痘疫ノ大ニ流行セシ片。其六月二十六日諸國ニ下セシ官符ト云フモノ「醫心方」ニ見ユ。其文左ノ如シ

「凡是疫病。名赤斑瘡初發之時。既似瘧疾瘡出之間。經三四日支體府藏。大概如燒。當是之時欲

飲冷水。固忌莫飲。以綿能勒腹腰。必令溫和。勿使冷寒。又鋪設既薄。無臥地上。唯於床上。敷寶席得臥息。又粥饘并煎餅粟等汁。溫冷任意可用。又糯粳糯以湯釀食之。又病愈之後。雖經廿日。不得輒喫鮮魚。粟菓菜。并飲水。及洗浴。房室強行步當風雨。(又鯖及阿遲等魚。并)年魚不可食。但乾鰯堅魚等煎否皆良。』

此間治療方ノ確立セサル。此ノ如クナリシカハ世習トシテ種々ノ方法ヲ行ヒタリ。祈禱ノ一事ハ他病ニモ多ク施シタル如ク痘疹ニモ一種ノ神(痘神)アリ。又守護ノ神(鷲森明神、住吉大明神)アリ。鬼神ノ病ナリトテ藥ヲ用ヒス清淨ヲ專トシ巫祝ニ乞ヒテ之ニ祈禱セシナリ。サレハ「續日本紀」ニハ天平九年四月。太宰管内疫アリシキ詔シテ幣ヲ部内諸社ニ奉シテ祈禱セシヲ載セ。『扶桑略記』ニハ天曆中紫宸殿建禮門朱雀門ノ三所ニテ疫ヲ除ク大坂ヲナスヲ載ス。其俗引キテ後世ニマテ及ベリ。支那ニ於テモ亦麻娘々、花々五聖等ヲ祭ルノ俗アリ

鈴木良知曰ク。吾邦有痘兒家。必祭痘神。祈兒無恙。其法編柴爲架。載赤紙爲主。安之架上。清一室。掛注連。炊赤豆飯祭之。苟有不謹。則痘兒必啼哭不已。或有痘變灰白者。或有一時發痒者。搔柴架上則止。其所謂痘神者。世不多有。余所見聞者三。一在淺草觀世音堂後。名曰痘疹神。一在曹司谷鬼子母唐前。名曰鷲神。一在本洲鴻巣之大間村。名曰宗像神。痘行之時。香火輻湊。餘時間如也。(醫

海蠶測

原昌克曰ク『本邦患痘家。必祭痘疹神夫妻二位於堂。俗謂之裝神。巫曰。無神名。臨時迎祭所在近祠之靈神。如其然則當供一神而可。何祭其配乎。或曰。痘疹守護神者。出雲國大社之末社。鷲森明神文德仁壽二年。依神命祭之。』(叢桂偶記)

痘神何神也。姑勿深考。或曰。居峨眉山。姐妹三人。身著麻衣。蓋女仙之流。主人間痘疹之疾。人呼爲麻娘。云神甚驗。而嚴于小節。病痘之家。爲位奉之。言語稍不檢。衣物稍不潔。及誠敬少。懈者。病者輒作神言語。呵譴之。雖私隱無不招揭。其甚者。痘或不治。爲得罪於神也(耳食錄)

吳俗抱痘之家。必供五郎神於堂。既兆吉。具牲牢獻之者。此名花々五聖。(猶園。又曰。乃知惡鬼。即是司鬼。神來攝小兒)

之ト同ク古代ヨリ存セシハ鎖幽ナリ初メ痘ノ何物ナルヲ知ラス單ニ異物ト稱シテ痘之ヲ恐レ或ハ假屋ヲ造テ別居セシメ(仍テ喪瘡ノ名アリト云フ説アリ)或ハ山奥ニ携行キ人家ヲ隔テ人路ヲ絶テ或ハ深谷ニ移シテ生死ヲ天ニ任セ治癒スル後ト雖百日ヲ過ギザレバ家ニ歸ヘスヲナシ文化文政ノ頃ニ至ルマデハ此法ヲ行ヒシ地方アリ即チ天草、大村、熊本、岩國、熊野、木曾等ニテ患者アルハ一郷一村ヲ隔テ人家ヲ去ル一里許ノ山野深谷ニ小屋ヲ作り工ハ農家ヲ借リテ人ヲ傳ケ初ニハ食物ヲ運バセ一家親類

モ出入ヲ絶チ醫ヲ迎ヘテ藥ヲ用フルコト少ナシ是方又支那韃靼ニ用ラレ西洋ニ於テモ前世紀中大家ノ
離隔ヲ主張セル人アリキ

『本朝世紀』ニ云ク『聖武皇帝朝。從蕃帆。痘到天下。自是患此報者多焉。時人稱異病。造別居。使病者山居。猶有喪者也。』

「大村藩種痘話」ニ云ク『大村藩領内は古來痘瘡を恐るゝこと甚しく痘瘡にかゝりたるものは人家を離れたる山中に木屋を構へて此處に昇送し定めたる看病人の外は一切交通を斷ち親子夫婦たりとも立寄ることを得ず又其家にては日々に飲食衣服藥等一切需用の品を運次醫士を頼み山使を備ふなど其費用夥しく且一旦山に運ひ入れたる物品は、再び人里に持歸ることならざれば謫に痘瘡百貫を唱へ中等以下の生計にては大抵身代を潰し累代の住家をも離るゝもの少からず』

『五雜俎』ニ云ク『韃靼種類。生無痘疹。以不食鹽醋故也。近聞。其與中國互市。問亦學中國飲食。遂一有之。彼人即昇置深谷中。任其生死。絕跡不致省視矣。一云不食猪肉故爾。』

「夷俗記」ニ云ク『夷人原不知痘疹之說。其所最忌者。無過於痘瘡。無論父母兄弟妻子。俱一切避匿不相見。調護則付之漢人。加無漢人。則以食物付之他所。令患痘者自取之也。至若夫妻之患痘也。必俟聞雷聲。然後相聚。不聞雷聲。則終年避匿如路人然』

晋唐以來後世ニ及フマテ酒、麴、消毒飲、消麻湯、升麻葛根湯ノ類、或ハ葵菜葉ヲ煮、蒜薑ヲ以テ啖ヒテ之ヲ對治シ（肘後方「唐ノ永徵中ノ一ヲ記スル條」）。我邦ニテハ之ニ鍼治ヲ施セシマアリ（「後愚昧記」丹波篤直ガ後光嚴帝ノ痘ヲ療スル條）。而シテ主義大抵元氣ヲ固メ臟府ヲ堅クシテ自然ノ治癒ニ任スニアリ

四庫全書提要ニ周密ノ「齊東野語」ヲ引キテ曰ク

趙賓陽曰。或多以酒麴等物發之。非也。或以消毒飲升麻湯等解之。亦非也。大約在固藏氣之外任其自然耳。然或有變證。則不得不資於藥。云云。所列「本事方」拾金散、四君子湯加黃耆、及狗蠅七枚。播細酒服。治倒懸天花粉蛇蛻同煎。羊肝治目翳證。藥乃皆與今同。蓋人情之嗜慾日深。故其毒根於先天。而其發感於時氣。自元門以來。遂為人生之通病。而方著立論者。亦自元明以後始詳。其間以固元氣為主者。謂元氣既盛。自能驅毒氣使出。以攻毒氣為主者。謂毒氣即解始可保元氣無恙。於是攻補異途。寒溫殊用。痘家遂分為兩岐。斷々執門戶之見。

實ニ元明以來ハ痘科ノ專門家次第ニ増シ。方書年月ヲ逐テ刊行セラル。其治療說ノ二途ニ岐レシト管滌等ノ左ノ言ニ徴シテ其大體ヲ知ルヘシ

「古之治痘者。陳文中乃用木香散異攻散峻熱之藥。丹溪發揮其誤。然亦有有用之而獲捷効者。劉河

間張子和則專用黃連解毒湯白處湯升麻葛根湯等寒涼之劑。此豈古人之用藥迥別。有如斯哉。各因所值之時所犯之證。而為之處方耳。後之宗陳氏者。多用熱藥。宗劉張者。多用涼藥。此刻舟求劍之道也(保赤全書)。

是ニ由テ之ヲ觀ルニ。治痘家ニ二派アリ。一ハ劉河間、錢仲陽、張潔古、王海巖等ニシテ皆寒涼ヲ用ヒ解毒ヲ主トス。一ハ則チ陳文中等溫補ヲ主トスルモノニシテ所謂攻補異道。寒涼殊用。トハ之ヲ謂ヒシナリ。其間又二派ヲ折衷セルモノアリ萬密齋ノ如キ是ナリ

痘疹一科。錢氏用涼瀉。陳氏用溫補。立法不同。執偏門之說者。無以白二先生之心。萬僅為(吾)剖析發明。中仲陽之用涼瀉。因其煩燥大小便不通也。文中之用溫補。因其泄瀉手足冷也。虛則補之。實則瀉之。所謂無伐天和。無翼其勝也。(世醫心法)

是等諸家ノ間ニ立チテ儼然タル一宗師トナリ衆醫ノ仰ギ倣ヒシハ朱丹溪ナリ。吾乃チ之ヲ評シテ曰ク
朱丹溪矯陳氏之偏。而取錢氏之長。生於解毒和中安表。似為的當。舉世宗之。數百年來。無敢議其失者。然矯偏干陳氏。而不敢輕用木香丁香桂附等熱劑。取長干錢氏。而必用本連午勞連趨之類。以監制參芪歸朮等補劑。(活幼心法)

元明以來諸家ノ說紛々トシテ紊絲ノ如ク。之ヲ謂フモ殆ト歸趣ヲ得ベカラス。而シテ其病因ノ論ヨリ出テタル多少ノ治方ナキニアラズ例ヲ擧テ言ハ。或ハ之ヲ母人ノ食毒トナスニヨリテ母ノ葱韭蒜酒醋醬猪兔鷄犬海河蟲魚ヲ食フヘカラストシ(陳氏)。或ハ先天穢毒トスルニヨリテ出生後直ニ口中ヲ拭去シ或ハ甘草湯ニテ吐セシメ又ハ生地黃汁ニテ下サシメテ之ヲ防クトナス(孫氏間人氏)、或ハ後天ノ食毒トナスニヨリテ種々ノ食忌ヲ設クルカ如シ
多數治療家ノ中ニ於テハ又補ナリ攻ナリトモ各好ミテ用フル方藥ナキニアラサルモ今之ヲ一々掲擧スルノ要ハ殆ド之ナシ。今左ニ「痘科鍵」ニ擧ケタル藥劑ヲ叙テ、以テ是等諸家ノ用ヒタル藥劑ノ種類ハ凡ソ如何ナルモノナルカラ示サントス
多ク用ヒラレタル藥劑ハ升麻(肌肉ヲ疎通シ毒ヲシテ盡ク出デシムトテ熱アル間ニ用フルナリ)葛根(肌熱ヲ解キ煩渴ヲ止ム)前胡(内外ノ蓄熱ヲ解キ痰涎ヲ去ル)紫蘇(輕ク痘毒ヲ發散ス)蘇黃(皮毛ニ作用シ那氣ヲ散ズレハトテ喘噎身熱毛焦皮燥ニ用フ)羌活(骨節痛、頭痛、腰痛惡寒等ニ用フ)防風(餘毒ヲ解クトテ痘後ニ用フ)荊芥(咽膈ヲ利シ血熱ノ爲ニ癢ヲ作スヲ止ムト)白芷(身熱頭痛ヲ治シ癢ヲ止ム)桔梗(氣道ヲ開キ咽膈ヲ理メ首尾常ニ用フベシ)甘草(毒ヲ解キ氣ヲ補フ)連翹(毒ヲ解ク)牛蒡子(毒ヲ解キ咽喉ヲ利ス)蟬蛻(痘ヲ發ス)僵蠶(痘癢ヲ治シ毒ヲ解ク)穿山甲(毒ヲ追ヒ膿ヲ排ス)紫草(涼血活

血去血毒痘ノ乾紅焦紫ニ用フ。茜草、紅花(全上)生地黃(涼血ノ効アルト唱へ又痘ノ苦紅又焦紫吐血
 衄血アルモノニ用フ)犀角(全上)牡丹皮(血熱ヲ瀉シ吐血衄血ヲ止ム)地骨皮(氣熱ヲ瀉ス)木通、滑石、
 車前、地膚子、(小便ヲ利ス惡痘ニ用フ)大腹皮(小便ヲ利ス腹脹浮腫ニ用フ)石膏(唇腫ニ用フ)枳殼(便
 通ヲ促ス)青皮(發熱腹脹ニ用フ)陳皮(滯氣ヲ理メ脾胃ヲ健ニス)玄參、山豆根(喉痛ヲ治ス)砂仁、藿香
 (脾胃ヲ理シ嘔吐ヲ止ム)麥冬、五味子(渴ヲ止メ嗽ヲ止ム)黃芩、黃連、梔子、黃柏(火ヲ瀉シ毒ヲ解ク舌
 苔ニ用フ)大黃(內熱ヲ瀉ス下ニ用フ)玄明粉(下ニ用フ)木香、山查(腹中ノ滯氣ヲ理ム)猪苓、澤瀉(熱
 ヲ降シ浮腫ヲ消シ嘔瀉ヲ止メ小便ヲ利ス)何看鳥(氣血ヲ調ヘ血熱癢ヲナスヲ治ス)當歸(補血行血ノ藥
 ナリト)川芎(血ノ氣藥ナリト)白芍藥(血藥ナリト稱ス收斂ノ効アリ五ヨリ結痂マテ之ヲ用フ)赤芍
 藥(瀉血藥トテ五日前血熱症アルキ用フ)熟地黃(補血ノ藥トテ痘後ニ用フ)人參(元氣ヲ補ヒ津液ヲ生
 シ虛喘ヲ定メ虛熱ヲ退ク)沙參(人參ニ代フ)黃耆(氣ヲ補ヒ表ヲ固ク托裏排膿スト稱)柴河車、鹿茸(大
 補ノ劑トシテ虛甚クシテ漿ナキモノニ用フ)肉桂(補劑ニ加ヘ用ユ)丁香、乾薑(腹痛嘔吐等ニ用フ)肉蔻
 (瀉アルニ用フ)訶子(吐アルニ用フ)附子、白朮、茯苓、薏仁、山藥(脾ヲ健ニシ氣ヲ理シ溼ヲ燥シ水ヲ利
 スルノ劑ニシテ虛證ニ用フ)貝母(嗽ヲ止メ痰ヲ清クス)甘菊(血ヲ涼ニシ目ヲ明ニス)茅根(渴ヲ解ク)
 兎糞(翳ヲ去ル)蜜蒙、夜明(痘後眼ヲ治ス)燈心、竹葉(熱症ヲ引導ス)黃蘗(漿ヲ行ル)糯米(胃ヲ助ケ)陳

倉米(目睛吊白ヲ主ル)明朱砂(手足ノ癢瀉ヲ消ス)薑棗(中ヲ和ク)麴蘖(食ヲ消ス)金銀花。生豆腐。天靈
 蓋、人牙(起痘ノ功アリ)雞冠血、人乳(行漿ノ功アリ)酒(藥効ヲ助ク)等ナリ
 而シテ一定ノ症狀アルニ當リ之ニ對スル處治トシテ凡ソ如何ナル藥劑ヲ用ヒタルカハ請フ左ニ列舉ス
 ルモノヲ看ヨ

- | | | | |
|-------|---------------------|------|-----------------|
| 一補氣 | 人參、白朮、黃耆、茯苓、甘草 | 一補血 | 當歸、川芎、芍藥、地黃 |
| 一發散表熱 | 升麻、柴胡、乾葛、紫蘇、前胡、葱姜 | 一清裡熱 | 黃連、黃柏、山梔、犀角、羚羊爾 |
| 一表寒 | 黃耆、桂皮、生姜、川芎、防風 | 一裡寒 | 乾姜、肉桂、附子、木香、豆蔻 |
| 一利小便 | 猪苓、澤瀉、木通、滑石、車前 | 一利大便 | 枳殼、枳實、大黃、玄明粉 |
| 一活血涼血 | 生地、紅花、紫草、牡丹皮 | 一調氣 | 木香、陳皮、青皮、香附 |
| 一咽痛 | 玄參、桔梗、連翹、牛子、山枝甘草、薄荷 | 一嘔吐 | 藿香、砂仁、胃寒、丁香、木香 |
| 一驚搖 | 姜蠶、天麻、朱砂、茯神 | 一咳嗽 | 麥門、瓜蒌、桑白、杏仁、五味 |
| 一風熱 | 蟬退、白芷 | 一池瀉 | 柯子、肉蔻 |
| 一腰疼 | 牛膝、杜仲、玄胡索 | 一頭痛 | 川芎、藎本、蔓荊 |
| 一清痰 | 半夏、南星、貝母、石黑 | 一止渴 | 乾葛、五味、麥門、天花 |

一消食 山楂、麥芽、神曲、草菓
一快斑 紫草、防風、荆芥、升麻

一腹脹 厚朴、蒼朮、大腹皮
一起痘 鹿茸、川山甲

特ニ注目スヘキモノ、如クナルハ白牛毛(保赤全書)牛虱(本草綱目)牛皮膠(本草綱目)牛黃(本草綱目)王氏痘疹方、保赤全書(牛尿(本草綱目)本草食鑑、經驗奇方)牛蹄甲(本草綱目)黃牛肉(本朝食鑑)牛角等牛ニ關シタル材質ノ豫防又ハ治療トシテ多ク擧ゲ稱セラル、トナリ

我邦ニ於テハ元祿以降最久吾カ「活幼心法」入りテ醫家多ク之ニヨリテ治ヲ施シ専ラ温補ヲ主トシタルニ。其後古方家ノ漸ク盛行スルニ及ヒテ之カ爲ニ排セラレテ其治方治敷セズ即チ其用フル所ノ藥ハ古方家ハ好シテ解毒寒涼ノ劑ヲ用ヒテ葛根湯柴圓ヲ專トシ他ハ内托散參歸鹿茸湯ニ限り之ニヨリテ我邦ニ於テモ明清ニ於ケルト同シク治痘家ハ全ク二派ニ分レタリ。寛政文化ノ頃ニ至リ橋南蹊(巴豆)赤松大洲(奪命丹)等各痘家ヲ以テ名アリ。補ヲ唱ヘ或ハ瀉ヲ善トシ其見猶ホ明清以降ト同シ

池田氏ハ幕府ノ侍醫ニシテ醫學ノ教授トナリ痘疹科ヲ專門トシ門人モ我邦ノ諸國ニ敷キシカバ其持スル所ノ治療方ハ大ニ世ニ行ハレタルガ。其祖先高山ハ痘科ヲ戴曼公ニ受ケ。戴曼公ハ之ヲ明人龔雲林ニ受ケタル故其論其方共ニ「痘疹金鏡錄」「痘科鍵」ノ說ニ基ク所多ク。池田氏自家カ著セシ書モ亦多ク世ニ布キ其一家ノ見ハ殆ト我邦ニ通行セシモノ、如シ。「痘科鍵」ニハ升陽散鬱、清熱解毒、托裏行漿、

補脾滲滋ノ四法アリ。經過十二日ヲ四分シテ見點、起脹、灌膿、收斂トシ各彼四法ヲ以テ之カ治ヲナスナリ。池田氏ハ即チ左ノ八法ヲ立テタリ

第一解毒 敗毒和中散(連翹、牛蒡、黃芩、黃連、枳殼、防風、荆芥、桔梗、紫蘇、蟬蛻、川芎、前胡、木通、

升麻、麥門、甘草)。歸宗湯(大黃、地黃、芍藥、山查、青皮、木通、荆芥、牛蒡)ノ類

第二涼血 十神解毒湯(當歸、地黃、紅花、丹皮、連翹、川芎、芍藥、桔梗、木通、腹皮)。清涼攻毒酸(石膏、

黃連、大黃、木通、紅花、荆芥、牛蒡、犀角、丹皮、青皮、地丁、鮮地黃)ノ類

第三補氣 大保元湯(黃耆、人參、白朮、川芎、肉桂、甘草、大棗、生薑)。補中益氣湯(人參、白朮、黃耆、當

歸、川芎、陳皮、柴胡、升麻、甘草、生薑)ノ類

第四養血 十全大補湯(黃耆、人參、當歸、芍藥、白朮、地黃、茯苓、川芎、肉桂、甘草、大棗、生薑)。鷄冠血

酒(雄鷄冠血、和清酒温服)之。其雞不可殺)ノ類

第五固表 加減益氣湯(黃耆、人參、當歸、川芎、白朮、陳皮、升麻、桔梗、甘草、生薑)。温中益氣湯(人參、

白朮、黃耆、當歸、茯苓、山查、川芎、白芷、防風、木香、肉桂、甘草、大棗、生薑)ノ類

第六散鬱 羌活散鬱湯(羌活、防風、白芷、荆芥、桔梗、地骨、川芎、連翹、牛蒡、紫根、腹皮、甘草)。加味歸

宗湯(當歸、芍藥、玄參、大黃、羌活、穿山甲、青皮、荆芥、地黃、山查、牛蒡、木通)ノ類

第七温中 異功散(木香、肉桂、當歸、茯苓、人參、陳皮、厚朴、豆蔻、丁香、半夏、白朮、熟附子、大棗、生薑)。建中湯(人參、黃耆、白朮、當歸、川芎、熟附子、乾薑、肉桂、丁香、甘草、生薑)ノ類

第八攻下 涼膈散(連翹、薄荷、黃芩、梔子、桔梗、大黃、芒硝)。大承氣湯(厚朴、大黃、枳實、芒硝)ノ類
其他俗間ニテ此頃好シテ用ヒタルハ、薰法(蒼、沉香、沐香、柞、鳳尾蕉)柳蟲等ニシテ西洋ノ藥物モ文化以前已ニ我邦ニ入り來リテ江戸ニテ菊川芳柳京都ニテ蘆春齋ノ如キ好シテ洎夫藍てりわかヲ用ヒテ痘ヲ治シ又好シテ一角ヲ用ヒタル人アリト云フ

●人痘種法

○支那ノ醫書中、種痘門ヲ立テ、精シク其事ヲ説ケルハ、「醫宗金鑑」ニ始マレリ「醫宗金鑑」ハ清乾隆帝御纂、乾隆七年(我寛保二年ニ當ル)ニ成リシモノニシテ、全部九十卷、其第六十卷ハ種痘心法要旨ヲ説キ、種痘諸法ヲ舉ケタリ、其説ニ云ク。

「嘗考種痘之法、有謂取痘粒之漿而種之者、有謂服痘兒之衣而種之者、有謂以痘痂屑乾吹入鼻中種之者、謂之旱苗、有謂以痘痂屑濕納入鼻孔種之者、謂之水苗、然則四者而較之、水苗爲上、旱苗次之、痘衣不應驗、痘漿太殘忍、故古法獨用水苗、蓋取其和平穩當也、近世始用旱苗法、雖捷徑微覺迅烈、若痘衣痘漿之說、則斷不可從」

而シテ同書ニ又種痘一科。多ク口傳心授。方書未載。恐後人視爲虛誕之辭。相沿日久無所考稽。使至理良方。竟置無用之地。神功湮沒。豈不可大惜哉。トアルヲ見ルニ此、水苗、旱苗、衣苗、漿苗ノ四法ハ乾隆以前ヨリシテ世ニ行ハレ、醫家中特ニ之ヲ重視シタルモノアリ。乾隆編纂醫家等ノ如キハ則チ其左袒者ナリシヲ知ルベシ

○更ニ其種痘ニ付キテ些細ニ記載スレバ此四法ト云フハ左ノ如シ

第一衣苗法又痘衣種法 衣苗法トハ長漿漿足ノ時ニ痘兒ノ服スル所ノ裏皮ヲ取テ未タ痘セサル兒ニ着セテ夜間モ脱セシメス其痘氣ヲ傳染セシムレハ九日乃至十二日ニ至リ始メテ發熱アリ其効アルヲ少シ「痘疹心法要訣」「痘疹定論」「張氏醫通」「南沙集」「留青新集」「尊卿贅筆」ニ載ス

第二漿苗法 漿苗法トハ痘ノ滿漿ノ時鍼ヲ以テ其痘頭ヲ破フリ布又ハ綿ヲ以テ膿漿ヲ浸シ取りテ之ヲ兒ノ鼻孔中ニ滴シ入ル、ナリ(男ハ左、女ハ右)七日ニシテ發熱見點ス(張氏醫通「種痘新書」
「弋陽縣志」ニモ「董曼曙五十三郡人。徐成吉五十五郡人。得十全神痘法。以棉絮取痘漿之佳者。送人鼻內。及愈有痘如眞。往々靈驗。遠近皆聞其風焉。」トアリ

第三水苗法 水苗法トハ上好ノ痘痂ヲ用ヒ一歲ナラハ二十餘粒三四歲ナラハ三十餘粒ヲ取り磁罐中ニ入レ柳木ノ杵ヲ以テ痂ヲ末シ淨水一乃至五滴ヲ下シ和シ調ヘ棗形ノ形ノ如クニ丸シ新綿少許ヲ

攤シテ薄片トシタルニ裏ミ紅線ヲ以テ栓定シ鼻孔中ニ納入シ(男ハ左、女ハ右)止メ置クヲ六時。冬ハ温メテ之ヲ用フルナリ(痘疹心法要訣「痘疹傳心錄附錄」痘疹會通)

第四早苗法 早苗法トハ痘痂末ヲ碾末シ銀管(長五六寸ニシテ頸ヲ屈テ)ノ管端ニ盛リ鼻孔中ニ吹入スルナリ(男ハ左、女ハ右)五日乃至九日ニシテ發熱ス(痘疹心法要訣「張氏醫通」治痘十全。此法多少ノ變改アリ)

或ハ痘痂ヲ細末ニシ通關散少許ヲ放テ乳ニ勻ヘ小竹管ヲ以テ鼻孔ニ吹キ人レ手ヲ以テ鼻孔ヲ掩閉スルヲ片刻ニス(種痘新書)

或ハ罌伽ヲ研末シ麝香少許ヲ加ヘ丸トナシ兒ノ鼻中ニ納メ直ニ衣ヲ着セシム(南沙集)

或ハ痘痂三四粒ニ清水ヲ入レ柳木ノ杵ヲ用ヒテ研リ糊狀ノ如クニシ別ニ棉花ヲ捏リ小團棗核大ノ如ク兩頭ヲ圓クシ兒ノ鼻孔ノ大小ヲ量テ之ヲ製シ痂末ヲ蘸シテ上ニ糊シ鼻孔ヲ塞ク(臨症指南、痘疹定論)

或ハ罌伽一錢ニ牙皂黃連各三分ヲ加ヘ冬ハ猶ホ葱白一錢ヲ入レ秋ハ配藥ヲ用ヒス之ヲ鼻孔内ニ吹キ入レ再ヒ綿花ニ苗末一二厘ヲ粘シテ鼻内ニ塞キ入レ次日ニ至リ取出ス(痘疹會通)

早苗法中又一ノ異ナルモノアリ

黃晟「集驗良方」ニ云ク「今福建、廣東、江西地方。向有種痘之法。每當天時温和之氣。偶人家嬰兒痘之稀少者。所其痘殼四五粒。研爲細末。用綿包裹。男左女右。塞在嬰兒鼻内。二三日。自然身熱出痘。所出之痘。輕者不過四五粒。重者不過一二十粒痘。稀毒亦稀」。ト。此言ニヨレハ即亦一種ノ早苗法ナリ唯之ヲ以テ苗トセサルナリ

又痘痂屑ヲ末トシ、白湯ヲ以テ之ヲ飲ミ下スノ法アリ實曆中南京ノ近旁ニテ行ハル(種痘必順辨)又一旦種痘シテ其漿ヲ以テ漿苗トスルモノアリ(痘疹心法要訣「弋陽縣志」)

○此ノ如キ種痘法ハ何時代ニ創マリシカハ池田霧溪氏ノ考フル所其其精確ナレハ其言ヲ借リ來リテ之ヲ述ベシ

種痘說ノ由テ起ル所ヲ原スルニ痘疹心法要訣治痘十全等ニ皆云フ

右有種痘一法。起自江右。達於京城。究其所云源。云自宋眞宗時。峨眉山有仙人。出爲丞相王旦之子。種痘而愈。遂傳於世。

トナラバ宋ノ時ヨリ之アル由ナレモ其事史傳ニ於テ考フルコトナク且自ラ其說ノ渺茫ニ似タルヲ云フ時ハ其言ノ据ルニ足ラザルヲ見ベシ

張氏醫通ニ「邇年有種痘之說。始自江左。達於燕齊。近則通行南北。」

ト云フ時ハ清初ノ頃ヨリ擲リタルガ如クニ見ユレ「種痘新書」ニ

張琰カ曰ク「余祖承孫久吾先生之教。種痘。箕裘已經散代。」ト孫氏ハ明萬曆年間ニ生マル

尊鄉贊筆ニモ「安慶張氏。傳種痘法。已三世。

トアレハ明ヨリ始リ清ニ至リ盛ニ行ハレタルヲ明白ナリ

○其法ノ由テ來ル所ニ至リテハ諸書記スル所多クハコレヲ仙傳ニ托ス。

痘疹心法要訣、治痘十全等ニハ「峨眉山人」出爲丞相王旦之子種痘ト稱シ。

醫學源流論ニモ「種痘之法。此仙傳也。」ト云フ

張氏醫通ニ曰ク「詳究其源。云自玄女降亂之方。」ナリ

蘭臺軌範ニ曰ク「種痘之法。是天意好生。有神人出。造良方。以救人也。」ト

慈幼津筏ニ曰ク「世有神痘家。」ト又

弋陽縣志ニ黃冕曙五十五郡人。徐成吉五十五郡人。得十全神痘法。ト稱シ

南沙集ニ「種痘家、天妃娘々ヲ供奉シ朝夕經呪ヲ論ス」ト云ヒ

尊鄉贊筆ニ「小兒ノ生辰ヲ録シ、香ヲ焚テ黃豆一合ヘ藥ヲツケテ方位ヲ按シテ土中ニ埋メ種痘ノ漿

ヲ取テ衣ヲ染テ小兒ニ衣スレハ三日ニシテ黃豆萌芽シ小兒痘痛熱發ス五日ニシテ立生シ兒ノ痘モ亦

發ス」ト云フ

留書新集、種痘小引ニ「江楚間。多種神痘。相傳昔有道士。憫痘症殺人。禮峨眉山四十九日。夢

授藥童子仙苗。翌日痘出。其痂爲屑。吹于群兒鼻中。七日壯熱。十四日而瘳。後取其痂。爲苗通

相傳種。百無一失。」ト云フ

李仁山ノ説ニ「種痘ノ法ハ神明ノ相傳ナリ明朝ニ徽州府ノ商人施氏ナル者海上ニ浮テ一ノ山ニ至リ

媽姐天后ノ靈顯ヲ蒙リ種痘法ヲ授レリト

其他種痘新書ニ專ラ神ヲ敬奉シテ壇ヲ起シ眞實及ビ般若經ヲ讀誦シ異體ノ字號ヲ水碗中ニ書スル類皆

愚俗ヲ輸スノ方便ヨリ出ト知ルベシ。留書新集ニ曰ク以人不信。以神爭敬奉。ト云ハ是ナリ臨症

指南ニ種痘ヲ太平痘ト稱スルモ安全ノ名ヲ唱ヘテ世俗ノ信用センヲ求ムルナン存研樓集ニモ天妃

司神神ノ一ヲ明辨セリ又錢唐第花氏曰。昔傳痘症多厄。觀音大士化身。有種痘之術。誠悲憫衆生。

之普渡慈航也」ト小兒解痘神方ニ見ヘタリ此等皆其名稱ヲ神奇ニシテ信ヲ世ニ取ルニ過ギズ（種痘由

來ノ一池田霧溪ノ文ナリ）

○大槻磐水曰ク「漢蓋傳西域都兒格國地方原法也。欲奇其術。故稱神人之傳也。但言宋眞宗時

爲丞相王旦之子種痘而愈。遂傳於世。則其所由來舊矣。實距今時七百有餘年。蓋在宋未傳歐

羅巴洲之前也。〔瘍醫新書接痘編〕吾人未タ詳ニ之ヲ究メズ

○我邦ニ於テハ房州ニ於テ昔ヨリ一種ノ種痘法アリ

多記桂山ガ醫牘ニ曰ク「聞斯邦房州濱海一村。有自數百年前。行種痘法。多用乾苗。乃先於彼土。支那ヲ指ス。而知用此。亦奇矣。」ト

池田霧溪ハ之ヲ以テ近世ニ起リタルモノトシ李仁山ノ法ニ倣ヒタルカト云ヘリ

李仁山トハ如何ナル人カ。彼ハ支那ノ杭州ノ人ニシテ延享二年（一七四五）初メテ彼邦ノ種痘法ヲ我邦ニ傳ヘタル人ナリ

抑彼種痘法ヲ重視シテ之カ爲ニ特ニ一門ヲ作リタル醫宗金鑑ノ書ハ乾隆七年（一七四二）ニ出版セラレタルモノニシテ其書ノ初メテ我邦ニ舶載セシハ種痘必順辨ニヨレバ寶曆二年（一七五二）ナリ李仁山ハ延享二年四月（一ニ延享元年トス）長崎ニ來リタルナレバ醫宗金鑑ノ入ルニ先タヤテ其法ヲ我ニ傳ヘタルナリ但仁山カ何處ヨリ何人ニ就キテ其法ヲ得タルカハ未ダ之ヲ明ニセズ

○桑田立齋ノ「引痘要略解」ニ云ク

（前略）其一ハ鼻ニ種エ、其一ハ臍ニ種ユルノ二法アリ、鼻ニ種ルハ支那ニ始マリ、臍ニ種ルハ西洋ニ始マリテ行ハル、ト已ニ久シ、我皇國ヘハ支那ヨリ李仁山トイフモノ來リテ鼻ニ種ルノ法ヲ

傳フ、云々

南醫醫話ニ曰ク

有德廟（吉宗）ノ御世、長崎ヘ唐土ノ醫李氏ナルモノ來リテ種痘ノ法ヲ行フ、其頃此種痘盛ニ行ハレテ長崎ノ小兒ハ多ク李氏ニ頼ミテ痘ヲ腫エタリ、百發百中一人モアヤマタズ、余ガ友關谷士焯ガ父堀江道元モ此李氏ニ學ヒテ種痘セシメタリ、李氏ガ名東都ヘモ聞ヘテ官醫ニ命セラレ此法ヲ學ハシメタリト云ヒ傳フ、云々

種痘必順辨ニ云フ所ニヨレハ

延享元年九月長崎鎮臺松並氏有德公（吉宗）ノ命ヲ奉シ清ヨリ渡來セル李仁山ナルモノ長崎ニテ種痘ヲナスニ就キ之ヲ試ミントシ長崎ノ醫柳隆元、堀江道元ヲシテ仁山ニ從行セシメ大村侯ノ領内大浦ニ至リ此地ニテ妓女二十人ニ種痘ス後又柳、堀二人ニ命シテ長崎ニテ之ヲ幼兒ニ施サシメシモ痘ヲ發セサルモノアリ且後日ニ至リテ其兒ノ中ニ眞痘ニカ、リシモノモアリシヨリ當時人之ヲ毀リタルモノモアリタリト云フ

○李仁山ハ延享二年四月渡來シ明年ノ春專ラ種痘ヲ施セシカ其說ハ時ノ通辭平野繁十郎、林仁兵衛兩人ニテ和解シ奉行ニ差出タリ。之ヲ「李仁山種痘和解」ト名ツク。其書ニ據ルニ其種痘法ハ大都「醫宗

金鑑「種痘新書」及ヒ「集驗良方」等ノ書ニ載スルモノニ同シ

○此種痘法ノ盛ニナリシハ「醫宗金鑑」ノ舶來以後即チ寶曆二年以後ノ一ニシテ、殊ニ安永七年ソノ種痘篇ヲ拔萃シテ「種痘心法」ト題シテ梓行セシトキヨリ漸次ニ行ハル、トナリ。文化文政ヨリ天保安政ノ頃ニ至リテハ此法大ニ行ハレ、痘家ヲ以テ名ヲ成セルモノ尠ナカラズ。就中高名ナル種痘家ハ肥前大村ノ長與俊達、芳陵英伯、筑前秋月ノ緒方春朔、武州忍ノ河津隆碩、常州水戸ノ本間玄調、上總佐貫ノ井上宗端、木下川ノ庄屋次郎兵衛(引痘要略解)、江戸ノ桑田玄真、桑田立齋等ナリ

緒方春朔(號濟菴)ハ筑前秋月ノ人ニシテ長崎ニ學ビ吉雄氏ノ門人タリ。嘗テ「醫宗金鑑」ノ種痘心法ヲ讀ミ仁山ガ施術ヲ聞キテヨリ頻ニ心ヲ潛メ研究スル所アリ。寛政元年(一七八九)秋月藩痘瘡流行ニ際シ城南天野某ノ三兒及ヒ本田某ノ四兒ニ鼻乾苗法ヲ施シ其効著シキヨリ其藩醫相尋テ己カ兒ニ種痘シ春朔自家ハ後五年間ニ四百兒ニ施シタリト云ヒ就テ學フモノモアリシガ寛政六年江戸ニ祗役セシトキ又連ニ其名ヲ聞キテ施術ヲ好ムモノアリテ先ツ五カ田村農家ノ四兒ニ施シ其ヨリ三田阿波侯邸ノ五兒麻布某侯邸ノ一女、久留米侯邸青山侯邸、山崎侯邸等ニテ各一兒ニ施シ市中ニテハ芝赤羽麻布白金伊皿子臺古川町筑羽町竹川町鍋町八丁堀神田紀伊岡坂下等ニテ五十餘人ノ兒ニ種痘シタリ其術世ニ聞エ高クシテ白杵(北野梅菴)相良山内(刈谷道悅)、寺田宗仙(津和野(松尾榮庵)ノ諸藩侯ハ其侍醫ヲシテ就

テ學ハシム。後唐津、五島、成羽、(備中)、人吉、水口(伊勢)ノ諸藩ニモ門人ヲ得タリ。寛政七年「種痘必順辨」ヲ著シタルカ是レ蓋シ本邦第一ノ種痘書ナリ

大村藩ノ中ニモ古クヨリ早苗引痘法行ハレ藩醫ニモ之ヲ施スヲ許シ多少ノ保護法アリ。文政中ニハ長與俊達、芳陵英伯、待山某ノ三人アリ。此藩ニテハ古來患者隔離法ノ如キモノアリテ人一般ニ痘アルモノト齒セサルヲ以テ種痘ヲナスニモ亦一種他國ト異ナル所アリ。即チ人家外一里以上ノ山ニ數棟ノ長屋ヲ作り毎年正月末ヨリ二月ノ始ニ童男女百人許ヲ集メテ種痘ヲ施シ落痂後二三週マテハ留メテ此ニ住セシメタリ。其所ヲハ指シテ種痘山ト云ヒ長與氏ノ種痘山ハ古田山ト云ヘル所ニアリタリ

○當時種痘家ノ行ヒタル種痘ノ果ノ如何ナル者ナリシカヲ示サンカ爲ニ緒方氏ノ方法ヲハ此ニ舉ケン

夫レ種痘ヲナスニハ先其兒ノ稟賦虛實ヲ詳ニ察シ金鑑中不可ノ條目ヲ照シ考ルチ先務トス必ス輕忽ニ看過ス可ラス痘ヲ種ユルノ時日ヲ決セハ七日前ヨリ預メ調護嚴密ニシテ飲食坐臥心ヲ用ヒ調攝意ヲサルチ緊要トス專ラ喜怒ヲ過サシムベカラズ若年長ノ女ニ種痘セハ兼テ經行ノ期ヲハカリ經行絶テ三日ヲ經テ下苗スヘシ痘中經行ニ逢サルトチ斟酌スヘシ尤房事ヲ禁ス選苗 種痘ハ苗ヲ選ムト緊要ナリ胎毒引導ノ本ナルカ故ニ出痘ノ可否ハ全ク苗ノ善惡ニ係ルナリ能ク心ヲ用テ輕率ニスヘカラス苗ノ用ユヘキハ其痘弱メテ順痘ニシテ始末夾雜ノ痘ナク出痘後十一日ヲ經テ落痂シ其痂充實ニシテ尖圓光澤アルモノヲ佳トス之ニ反スルハ用ユ可ラス種痘ハ部ヲ稀少順候ナル故ニ其痂ヲ取得テ苗トス最良ナリ

蓋痂 硝子器或ハ陶器中ニ貯フヘシ器ノ口ヲ蠟ニ封シ冬月ハ三旬ニ過キサル吉ナリ清潔淨涼ノ所ニ置テ天

日又ハ火氣ニ近ツテ可ラス濕熱ニ達ヘハ損敗シ性氣脱ス

製苗 新陶器ヲ打破シ其中幼藥ノ至ラサル所處理沙面ヲナス故ニ細碎ケ易シ研リ末ニスルニハ柳木ノ杵ヲ用ユ掃ヒ落スニハ
椀橋ノ毛刷毛ヲ住トス他ノモノハ用ユ可ラス

下苗分量 心法中水苗種法ノ條ニ一歳ノモノハ二十餘粒三四歳ノモノハ三十餘粒ヲ用フトアリ按スルニ痘痂ニ大小厚薄ア
リテ輕重均シカラズ豈粒數ヲ以テ度ヲタツヘケンヤ余心ヲ用テ歷試シ今新ニ審定スル所ハ初生ヨリ四五歳ノ兒ハ痂三厘
ヨリ五厘ニ至テ宜シ十歳以上ノモノト雖一分ニ過ベカラス

下苗 初生及四五歳マテノ者ハ睡中ニアラサレハ下苗シ雖シ曲管カ柳篋ヲ用ヒ少シツ、痂屑ヲスクヒ載セ呼吸ヲヨク考ヘ男
ハ左女ハ右ノ鼻孔ニ對シ指出セハ息ニシタガウテ肺臟ニ傳フ七八歳以上ノモノハ能ク合點サセ置キ吸込サシム矢張少シツ、
與フベシ火急ニシテハ肺氣損スルナリ

下苗時日 冬至ヨリ春末清期ノ節中テ限ルは一陽來復シテ發生ノ氣アルノ間ナリ他ノ節カダク用ユヘカラス時日ハ曆ノ中段
ニ在ル成開ノ日下段ニテハ天月二德合月裁種ニ宜シ時ハ當日ノ前夜子ノ初刻ヨリ翌日ノ晝午ノ初刻マテニ施スヘシタトヘ可
種日ニアタルトテ月次十一日十五日ハ忌ムヘシ人神所在ノ日故ナリ

下苗後 下苗シテヨリ發熱スルマテノ間何モサシタル症ナキモノハ家方五物湯ヲ用ヒ置クヘシ其藥劑ノ中ヘ家方金甌丸ヲ二
粒三粒ツ、加入シテ與ヘ服サシムヘシ是レ吾門ノ秘ナリ
家方五物湯 木通中 金銀大 川芎小 大黃小 甘草少 右水煎同 金鷄丸 山查子 右一味細末糊丸梧桐子大辰砂ヲ衣
トス

痘序

苗ヲ下シテヨリ一七日ニ及テ熱ヲ發スルモノ常ナリ五日ニシテ發熱スルモノ偶々コレアリ是ハ其兒ノ生質拔壯實ナ
ル故ナリ然モ此類ハ百中ニ二三ノミ九日ニシテ發スルモノ往々アリ十一日ニシテ發スルモノ亦百中ニ二三アリ十一日ヲ過テ
發セサルハ斷テ不應ナリ萬一十一日後ニ至テ發スルモノハ決シテ種痘ノ應ニアラズ是天行痘ナリ下苗後五日以前ニ發スルモノ
モ亦必ス種痘ニアラズ此理ヲ豫テ種痘ヲ乞フ家ニ爲ト論シ置ク「肝要ナリ

信苗

苗ヲ下シテヨリ二三日ニテ面上或ハ四肢胸腹ノ間ニ顆粒ヲ出シ恰モ痘ノ放標ニ似タルモノ出ル「アリ種痘コトニ出ル
ニモアラズ是レ痘ノ將發ノ驗ナリ其色桃花ノ如ク滑澤鮮明ノモノ出沒不定ハ吉兆ノ信トス治セスシテ自消ス若紫黑枯燥シ或
ハ灰白堅硬魚目ノ如クナルハ鼻毒ノ標ナリ此症ヲ現サハ審ニ其發スル所ノ經絡イヅレノ部位ナルヲ察シ速ニ治ヲ施スベシ其
法銀鍼ヲ以テ瘡頭ヲ破フリ上ニ二聖散ヲ敷キ内解毒ノ藥ヲ用ヒ症ニヨリテハ下劑ヲ與フル「モ亦可ナリ種痘ハ此信苗ヲ治ス
ルヲ以テ要トス之ヲ認レハ百害交發シ救療スベカラサルニ至ル心ヲ用フ可シ

北筑秋ハ醫員 種痘科 緒方春朝 性章識 嫡孫緒方文友性醫子時天保十年己亥正月於平安認之
右「種痘緊轄」一卷ハ秋月藩ノ痘料緒方春朝ノ著ヲ其孫文友自筆記シテ藝醫員小川元調ニ贈リタルモノニ係ル、此ニ掲載セ
ルハ小川氏ノ藏本ヲ寫セルナリ。

當時他ノ諸家ノ種痘法モ、右ニ記セル緒方氏ノ法ト略、相同シク。而シテ其法ハ「醫宗金鑑」ノ則ニ從フベシト云フ「緒方氏
ノ書中ニ明記セルヲ以テ觀レバ、當時ノ種痘法ハ「醫宗金鑑」ニ則リシモノナリト斷言スルモ不可ナカル可シ

○此種痘法ハ此ノ如クニシテ漸ク我邦内ニ行ハレ、其術ヲ以テ名アルモノ四方ニ出ヅルニ至リタレト
モ、其成績ハ全ク佳良ナリト云フ「得ズ。故ニ當時痘科顯門ヲ以テ朝野ニ名ヲ震ヒシ池田錦橋ノ如キ

ハ絶對的ニコノ種痘法ニ反對セリ而シテ其言亦理由アリト云フベシ其說ニ云ク。

李仁山張遜玉、痘ヲ植ウツスヲ云ヒ置キヌ。余四五兒ニ試ムルニ。其稀少ニシテ自ラ愈ルモノハ様痘ニ類シテ後再ヒ痘ヲ發スルアリ。又甚タ稠密ニ發シ出テ、漸ク治療ヲ盡シテ愈タルモアリ。又大逆ニシテ六日ニ至リ。黄泉ニ陥ルモノ一人アリシヨリ禁シテ種痘ノ法ヲ用ヒズ。(國字痘疹戒草) ○此ノ如クニシテ支那ノ種痘法ハ彼ヨリ起リ此ニ傳ヘ來リテ支那ニモ日本ニモ盛ニ行ハレタルカ

○西洋種痘ノ方法、種類等ハ吾人此ニ紹介スルノ必要ナルヲ見ス又其法ノ我邦ニ入リシハ寛政五年ニアリ寛政五年(一七九三)ノ頃蘭人某役人高木氏ノ請ニヨリ長崎ニ於テ種痘ヲ施セシハ即チ西洋種痘法ノ我邦ニ施サレシ最初ニシテ支那種痘法ノ入りシヨリハ五十年程後レタリ當時其術ヲ受ケシモノ浦五島街谷山某ノ兒、同街橋本穎川ノ二兒、大黒街熊本侯ノ邸内加藤ノ兒、西濱町井村浦山ノ二兒等六人ニシテ橋本穎川二兒ハ痘ヲ出サレリシト云フ而シテ其法ハ鍼ヲ以テ灌膿ノ痘ヲ破リ膿ヲ鍼ニ塗リ之ヲ以テ兒ノ尺澤ノ靜脈ニ刺シ後綿ヲ以テ之ヲ縛スルニ在リシトナリ是ヨリ其法暫時中止セシカ如クナリシカ後二十年許ニシテ江戸ノ醫桑田玄眞長崎ニ於テ譯官馬場殿里ニ從ヒテ西洋醫書ヲ讀ミ弊斯兒種痘論ニ至リ大ニ其講スベキヲ知リテ且初メテ之ヲ其兒ニ試ミ益之ヲ擴メシカ其子立齋モ亦此法ヲ傳ヘ

テ之ヲ施セシト十二年ナリト云フ玄眞カ種痘法ハ腕或ハ脚ニ一小孔ヲナシ善性痘瘡ノ膿熟シタルヲ潰シ其液ヲ疵口ニ塗り其上ニ綿散絲ヲ置キ又上ニ膏藥ヲ貼シテ後適宜ニ之ヲ温ムルニ在リテ其著書種痘新編ハ文化十一年(一八一四)ヲ以テ公ニセラレタリ

天保ノ末弘化ノ初ノ頃ニ至リ前ニモ擧ゲシ長與俊達ハ既ニ漢醫方ヲ棄テ、西洋方ヲ執ルニ及ビ牛痘ノコトヲ傳聞スルモ未タ其原料ヲ獲ス鼻苗法ノ呼吸器諸臟ノ雜症ヲ惹起シ危險多キヲ憂ヒテ東西ニ折衷シ牛痘種法ニ倣ヒ痘癩ノ研末ヲ水ニトキ鍼針モテ上膊ニ移植シタリ是レ西洋流ノ人痘種痘法ニ同クシテ唯痘漿ヲ用フルト痘癩ヲ用フルトノ差異アルノミ一藩ノ人之ヲ腕種ト稱ヘテ長與氏方ヲ稱揚シ他學家ノ鼻種ト區別シタリ(大村藩種痘之誌)

附 錄

痘書

支那(多紀柳片醫籍考ニ依ル)	保嬰痘疹方	一	存
董汲	痘疹叢書	五	存
謝天錫	秘傳痘疹壽嬰集	一	存
劉洙	痘疹集覽	四	存
陳文中	小兒痘疹袖金方論	一	存
熊宗立	博愛心鑑	三	存
薛已	博愛心鑑發明全書	三	存
黃石峯	痘疹全書	一	存
聞人規	痘疹八十一論	一	存
王好古	仁端錄	十六	存
王好古	痘治理辨	一	存
王好古	痘治附方	一	存
朱震亨	痘疹正宗	四	存
朱震亨	痘疹醫心法	十二	存
支那(多紀柳片醫籍考ニ依ル)	痘疹全書(一題痘疹片玉)	一	存
董汲	痘疹啓微	一	存
謝天錫	痘疹全書	一	存
劉洙	增定痘疹寶鑑	二	存
陳文中	痘疹筆議	一	存
熊宗立	痘疹綱目	一	存
薛已	麻書	一	存
黃石峯	痘疹卮言	一	存
聞人規	痘疹一斑	一	存
王好古	痘疹欄局	一	存
王好古	痧疹辨疑	一	存
朱震亨	慈幼痘疹說問	十八	存
朱震亨	經驗痘疹治法	一	存

徐春甫	痘疹洩秘	一	存
匡鐸	痘疹方	一	存
支秉中	痘疹玄機	四	存
汪若源	痘疹大成	一	存
郭子章	博集稀痘方論	二	存
吳子楊	痘疹二證全書	四	存
吳子楊	小兒痘疹要訣	四	存
李實	痘疹淵源	一	存
張晴川	痘疹便覽	一	存
李言聞	痘疹證信	一	存
龔廷賢	痘疹辨疑全幼錄 <small>全幼一作金鏡</small>	三	存
胡廷訓	補遺痘疹辨疑全幼集	四	存
孟繼孔	治痘詳說	一	存
柳樊邱	痘疹神應心書	二	存

汪琥	顧行	唐守元	陸道元	翁仲仁	朱棟隆	朱惠明	管樾	丁鳳	盧銑	小兒痘科	治痘三法	毓麟芝室秘傳痘疹玉髓
廣金鏡錄	痘疹金鏡重磨	後金鏡錄	金鏡錄鈔	痘疹金鏡錄	痘疹不求人方	痘疹傳心錄	保赤全書	痘科玉函集	痘疹證治要訣	一	一	二
			三	存	存	存	存	存	存			存
徐君盛	徐璣	朱一麟	王仲威	聶尚恒	龔居中	何洛英	吳洪	陰有瀾	張宇傑	鄭大忠	張士與	孫一奎
髓頭活幼小兒痘疹全書	痘疹經驗要方	治痘大成集	痘疹慈幼津楫	活幼心法	小兒痘疹醫鏡	痘疹發微	痘疹會編	稀痘方	清源活水保嬰痘證百問歌九	痘經會成	痘疹百問歌	痘疹心印
五	五	四	二	二	二	一	十	一	五	九	一	二
存	存	存	存	存	存	存			存	存	存	存

黃一麟	萬邦孚	沈好問	高士	請承易	宋一	倪有美	汪秋鶴	汪一	汪一	胡一	趙貞觀	
痘疹遺書	痘疹方論	痘疹啓微	痘疹論	痧痘集	痘科異治	痘疹解義	痘疹正覺草	餘毒治法條例	痘疹	痘疹	痘疹玉髓	痘疹論
	五				一	一	一	一			一	痘疹全書
陳楚瑜	蔡繼周	李延昱	汪繼昌	朱巽	李仲梓	秦昌邁	王大綸	許學	吳邦寧	黃良佑	馮國鎮	顧行
痘疹秘要	保嗣痘疹靈應仙書	痘疹全書	痘科秘訣	痘科鍵	痘科點	痘疹折衷	痘疹心法	痘疹約言	痘疹心法	麻痘秘法	痘疹規要	治痘全書
一	二			二		二	二					二
存	存			存		存	存					

吳國翰	痘疹保嬰彙粹鑿衡集	二	存	李善	痘疹要畧	四康熙辛巳存
汪旭奇	痘經(或作痘疹大全)	三	存	談金章	誠書痘疹	三
—	痘疹直指方	一	存	張琰	種痘新書	十二
—	痘疹心書	一	存	朱錫珣	痘疹定論	—
程嘉祥	痘傳經驗痧麻痘疹秘集	五	存	—	痘科正宗	—
呂獻策	痘疹幼々心書	十七	存	吳建鈕	異傳種痘經驗良方	—
吳元溟	痘科切要	一	存	—	痘疹傳心錄 <small>(附慈幼疹心及採種痘法)</small>	十九
費啓泰	救偏瓊言	十	存	舒詔	痘疹真詮	—
翟良	痘科類編釋意	三	存	方象瑛	種痘小引	—
—	痘疹全書	—	—	—	痘疹心法要訣 <small>(醫學全鑑中之一種)</small>	—
馬之騏	疹科纂要	一	存	—	治痘十全	—
吳學損	痘疹四合全書	三	存	—	痘疹會通	—
馮兆張	痘疹全集	十五	存	—	本邦	—
黃序	痘科約囊	五	存	戴笠	痘疹百死形狀傳	一
						寫本

同	痘瘡唇舌秘訣	二	同	蘆勝秀	痘疹致要	一	文化六年刊
同	治痘方面	一	同	橋本德	斷毒論	二	文化七年刊
同	痘瘡唇舌圖訣	一	同	同	國字斷毒論	二	文化八年刊
同	曼公先生痘疹口訣	一	同	緒方春朔	種痘必順辨	一	安政五年刊
同	戴曼公治術集	一	同	同	種痘證治錄	—	—
堀元厚	痘疹辨義	一	同	原昌克	種痘繫轄	一	寫本
村上純	痘疹要藥方	一	同	池田獨美	痘瘡策	一	寫本文政三年
名古屋玄	醫方問餘痘疹	一	同	同	國字痘疹戒草	三	文化三年刊
林魁	醫稀痘神方	一	同	同	痘科辨要	十	文政四年刊
橋春暉	痘瘡水鏡錄	一	同	同	痘科鍵刪正補註	六	文政十二年刊
村上純	李仁山種痘和解	一	同	池田晉	痘瘡養生訣	一	文政八年刊
渡充	痘瘡養育	一	同	同	續痘科辨要	三	文政十年刊
黑澤松益	痘瘡醫筌	一	同	同	治痘要訣	一	嘉永四年刊
村井柁	痘瘡問答	一	同	同	種痘辨義	一	安政五年刊

同	古今痘疹類編大成五十	進藤坦	治痘極意	一	文政六刊
同	精選痘疹良方	同	痘科辨要、補核	一	文政六刊
同	痘疹辨疑金鏡錄	片倉元周	痘疹矩	二	
同	纂註	吉益南涯	痘疹紀聞	一	寫本
同	秘法痘疹唇舌試考	石塚波	護痘錦囊	二	文政七刊
同	治痘要方	同	痘矩		
同	痘科輯說	同	護痘須知		
同	痘疹食物考	岸山憲	長沙痘害編	一	天保八刊
同	治痘口訣	桑田玄真	種痘新篇	一	寫本
池田瑞英	痘鑑	宇田川榛齋	小兒全書種痘編	一	寫本
同	痘科方意解	大槻繁水	瘍醫新書接花痘編	一	寫本
同	痘科鍵私術	杉田成卿	治痘真訣	一	嘉永二年刊
同	池田家痘疹治術	柴田玄庵	活幼心法附說	一	嘉永五年刊
同	口授	本間玄調	內科秘錄痘疹	一	文久元年刊
同	秘傳痘科唇舌傳				
萬節蘆庵	痘疹年代記				

以上痘書ノ大概ヲ舉ルノミ。左ノ數書ハ著者、冊數等ヲ詳ニセサルヲ以テ只其名ヲ列舉シテ他日ノ穿鑿ヲ待ツ

- 痘疹安全記 痘疹紅こより 痘疹美面定
- 痘麻病起因考 痘疹咒調實記 痘疹秘話
- 痘疹論 痘疹玉環方 治痘可用方
- 治痘圖說 斷痘發揮

種痘考

○種痘奇法

英國ノ醫エドワード、ジエンナーガ發明セル種牛痘法ノ支那ニ傳ハリシハ嘉慶十年（我文化二年、西曆一千八〇五年ニ當ル）ノ四月ニシテ。ジエンナーノ發明（西曆一千七百九十六年。我寛政八年、支那ノ嘉慶元年ニ當ル）ヨリ十年ノ後ナリ

「種痘奇法」ニ曰ク「茲於嘉慶十年四月内。由陳噶喇時船。自小呂宋。裝載嬰兒。傳此痘種。到澳。本國（英）醫生。協同澳門醫生。照法栽種。華夷童稚。不下百數。俱亦保全無恙」

「引痘略」ノ序ニ曰ク「迨嘉慶十年四月。由小呂宋。舟載嬰兒。遞傳其種。以至澳門」。此時支那ニアリシ英國人哆琳。種痘法ノ概要ヲ説ケルヲバ。同國人嘶噶。漢文ニ繙譯シ。同年（嘉慶十年）ノ六月ニ刊行セリ。其書ハ標題ヲ「種痘奇法」ト曰ヒ。僅々數葉ノ小冊子ナレド。支那ニラジエシナー種痘法ノ事ヲ記述セルハ此書ヲ以テ嚆矢トス

○邱浩川及ヒ引痘略

嘉慶十年四月。種痘法始メテ支那ニ入りタレド。人未タ之ヲ信セズ。獨リ南海ノ邱熹（號浩川）トイフ

モノ熱心ニ其術ヲ講シ。先ヅ之ヲ自體ニ試ミ。次デ之ヲ家人戚友ニ試ミテ皆驗アリシカバ。廣ク此法ヲ施ス。十餘年ニ及ビ。萬舉萬全ノ良法ナルヲ論定シテ「引痘略」ヲ著セリ
「引痘略」ハ嘉慶二十二年ノ冬ニ成リテ道光十一年ニ上梓セルモノナリ。書中ニ引痘說、首在留養苗漿。次在認識瘋疾。引泄法、度苗法、出痘時宜辯、出痘后須知ノ七章ヲ別チテ。種痘法ノ何物タルト、ソノ利益ト、術式ノ大概トヲ示シ。又諸家ヨリ贈レル題詠序詞等ヲ附録シテ此法ノ虛偽ナラズ、且其事ノ勞セスシテ而カモ功ノ甚大ナルヲ證明セリ

○英吉利種痘奇書及ヒ「引痘新法全書」

ジエンナー種痘法ノ發明アリシヲ我邦ニ傳ハリシハ支那ヨリニシテ。其媒介タリシハ哆嗽咬、嘶嚙、嗽ノ「種痘奇法」及ビ邱熹ノ「引痘略」ナリ

「種痘奇法」ノ我邦ニ來レルハ何年ト云フヲ詳ニセズ。然レモ世ノ人が斯書アルヲ知リシハ尾張ノ人伊藤圭介ガコレニ訓點ヲ加ヘ校刻シテ公ニセシ時ニシテ。ソノ年月ハ天保十二年辛丑ノ冬ナリ
「引痘略」ハ我天保二年ノ出版ニシテ。其我邦ニ入りシハ天保ノ末年ナルベシ。

難波抱節ノ「散花新書」ニ云ク。邱氏引痘略、道光十一年辛卯新鐫。即天保二年辛卯ナリ。道光十八年戊戌再刻。即天保九年戊戌ナリ。後四五年ヲ經テ。僅ニ三部ヲ齎シ來レモ未タ世ニ普ク傳ラズ

南紀ノ人小山肆成之ヲ取リテ校刻シ。「引痘新法全書」ト題シテ世ニ行ヒシヨリ。ジエンナー種痘ノ法ハ漸ク我邦人ノ知ル所トナレリ

「引痘新法全書附録」ノ序ニ曰ク。引痘法之行ニ于都下。蓋創ニ於小山有造刻ニ引痘全書ニ焉。有造得ニ之。其先師高階樹園翁。行之十三年于今。而後人漸從之

「引痘新法全書」ハ弘化四年ノ出版アレモ。其序ハ天保十三年ノ春ニ成レリ。小山氏ハ既ニ邱浩川ノ「引痘略」ヲ翻刻シテ世ニ示セシモ、漢文ノ讀ミ難ク靴ヲ隔テ、痒ヲ搔クカ如キノ憾アルヲ慮カリ、假字ヲ挿ミ、「引痘新法全書附録」ト題シ、兒女子ニモ解セラルベキ書トナシ。嘉永二年ノ冬コレヲ出版セリ

○文政傳苗

「種痘奇書」「引痘略」等ノ書入り來リ。又和蘭ノ醫書モ傳ハリ。牛種痘法ノヲ漸ク我邦人ノ知ル所トナリテ之ヲ切望スルモノアリ。文政ノ初年ニ和蘭ノ醫某牛痘苗ヲ携ヘテ我長崎ニ來リテ種接ヲ試ミシニ當時ノ俗之ヲ妖怪ノ術トシテ浮言百出遂ニ其目的ヲ達セサリシト云フ

本文ハ郭氏ノ「皇國醫事沿革小史」、東京醫事新誌第二百三十二號及二十三號ニ載セタル「日本種痘家ノ始祖」ヨリ抄出セルモノナレモ。事實ノ確否ハ未ダ之ヲ究メズ

○天保傳苗

天保十年蘭人リシユール牛痘漿ヲ齎シ來リテ種接ヲ試ミタレモ應驗アラズ

「檜林家系譜」檜林宗建ノ條ニ曰ク「天保十年蘭人リシユール始めて牛痘液を持渡候につゝ其種を以て種え試みんと欲されども世人疑惑して信用するものなし仍て實兄檜林榮建及び當時の町年寄高島四郎太夫と計り普く懇諭し施術に應ずるものを需め漸く兩兒を得て施種せしも萌生せずして其種消滅せり」

天保ノ末年林洞海大石良榮二人相謀リ長崎町年寄高島四郎太夫ニ托シ痘苗ヲ和蘭ニ求メシヨアリ。コノリシユールノ齎シタルモノ即チ是ナルヤ否ヤ詳ナラズ。林氏等ハ痘苗ヲ得テ之ヲ長崎ノ兒女十ニ人ニ接種ヒシニ不幸ニシテ皆感染セサリキ(林洞海翁親記)

天保十二年(或ハ十三年)江戸ノ大槻俊齋痘苗ヲ高島四郎大夫ヨリ獲テ之ヲ淺草藏前伊勢屋ノ兒(名ヲ幾次郎ト曰フ。當時高名ノ洋藥舖神崎屋源藏ノ姉ノ子ナリ)ニ施シテ驗アリシト云フ。是ヲ江戸ニテ牛痘ヲ種エタルノ嚆矢トス(大槻俊齋傳)。然レモ惜ムベキコトハ此苗永續スルコトヲ得ザリキ高島四郎太夫ハ秋帆ト號シ。洋方砲術ノ祖トシテ其名高キ人ナリ。此人西洋醫學ノ輸入ニモ大ニ力ヲ竭シ。殊ニ牛痘輸入ノコトニハ斡旋一方ナラザリシト云フ。初メ高嶋氏和蘭人ニ種痘ノコトヲ聞キテ之ヲ得ンコトヲ思ヒ。蘭人ニ頼ミシニ蘭人モ大ニ周旋シテ痘苗ヲ和蘭ヨリ取寄セシニ其苗印度ノ熱海

ノタメカ變敗シテ之ヲ種ユルモ善感セズ。蘭人ノ申出ニハ子供ニ種痘シテ連レ來ラハ其功アルベシ左レハ乳母モ添ヘサレハ叫ハヌコトアリケレモ。婦人ヲ連レ來ルハ國禁ナレバ如何トモスベカラズ。蘭人モ殆ド當惑シケレモ尙コレニ懲リズ。種々工夫シテ漸ク其苗ノ發生ヲ得タリト云フ(此一事ハ杉享二翁ガ高島氏ヨリ直接ニ聽キタルニテ余ハ又杉翁ヨリ此話ヲ聽ケリ)

○嘉永傳苗

嘉永元年七月蘭醫モ一ニツケ牛痘苗ヲ齎シ來ル

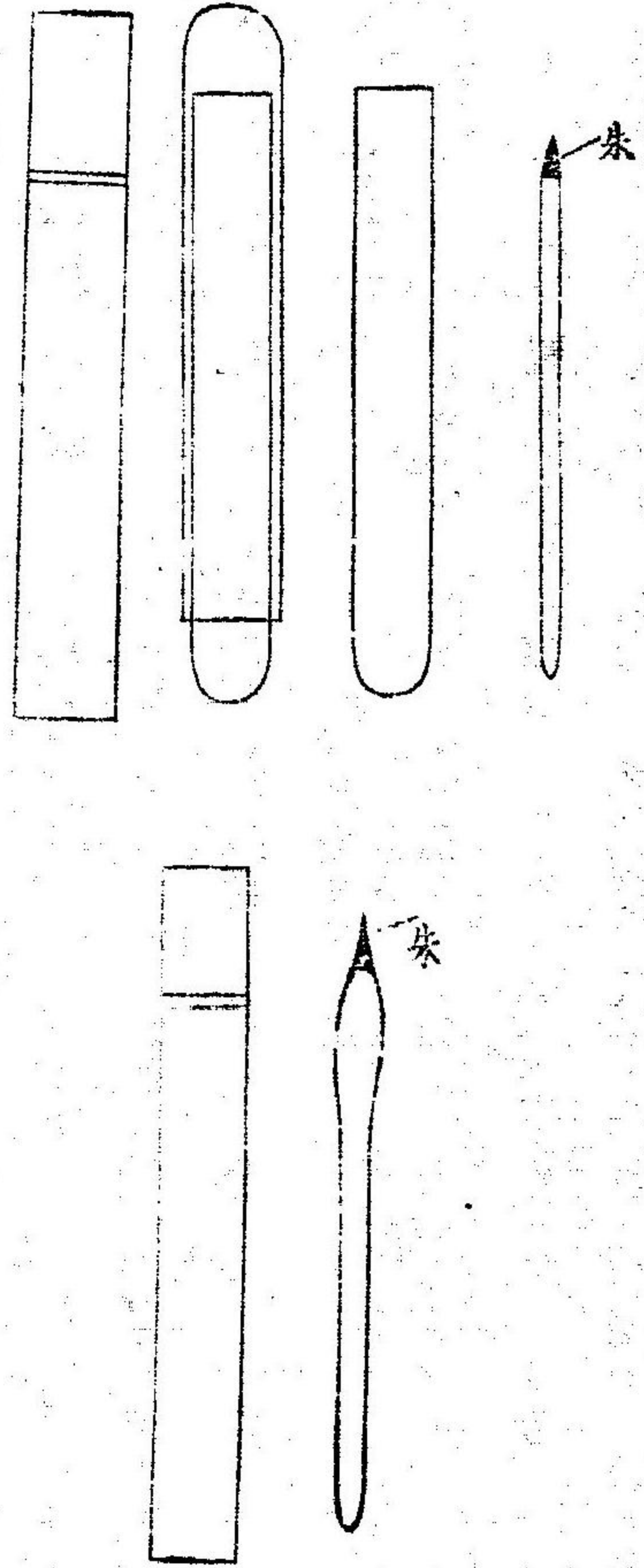
是ヨリ先キ弘化四年七月。鍋島侯(閑叟侯)西洋種痘法ノコトヲ聞キ其醫員檜林宗建ニ内命ヲ傳ヘ。牛痘苗ヲ和蘭ニ求メシメラル。檜林ハ累世通詞ノ家ニシテ蘭館醫員トシテ出入自由ナリシヲ以テ。當時在館ノ甲必丹レフヤソンニ面シテ其事ヲ托セシニ、幸ニ其年ノ九月蘭船歸國便ニ托シ本國ニ其旨ヲ通スルコトヲ得タリ。翌嘉永元年十月入港ノ蘭船ニテモ一ニツケノ牛痘苗ヲ齎セシニ則チコレガ爲ナリ此時種痘ノ實況ハ檜林宗建ノ「磨尼缺對談錄」ニ詳ナリ。左ニ其全文ヲ轉載ス

茲歲嘉永元年戊申秋七月先生(モ一ニツケヲ指ス)舶來シ牛痘苗ヲ齎シ來ル。其貯法ニアリ

其一 象牙ヲ以テ長サ一寸三分ノ針ヲ製シ。針頭ニ痘液ヲ粘着セシメ。之ヲ數枚束テテ管ニ入レ。管ノ兩端口ヲ熔塞シテ再鷲翅管ニ重ニ入レ。之ヲ又「ブリツキ」管ニ入レテ管口ヲ固封シ。終ニ又木

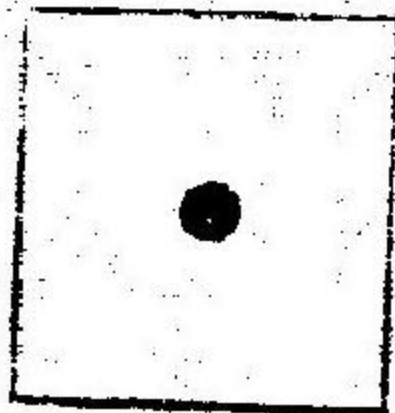
管ニ收メテ蓋閉シ。
紙ニテ糊封ス。其圖
下ノ如シ

其二 硝子管ニシ
テ。一端ハ管狀トナ
リ一端ハ殆ト筆鋒ノ
如シ。其鋒尖ノ處ニ
凝結セル痘膿些少ヲ



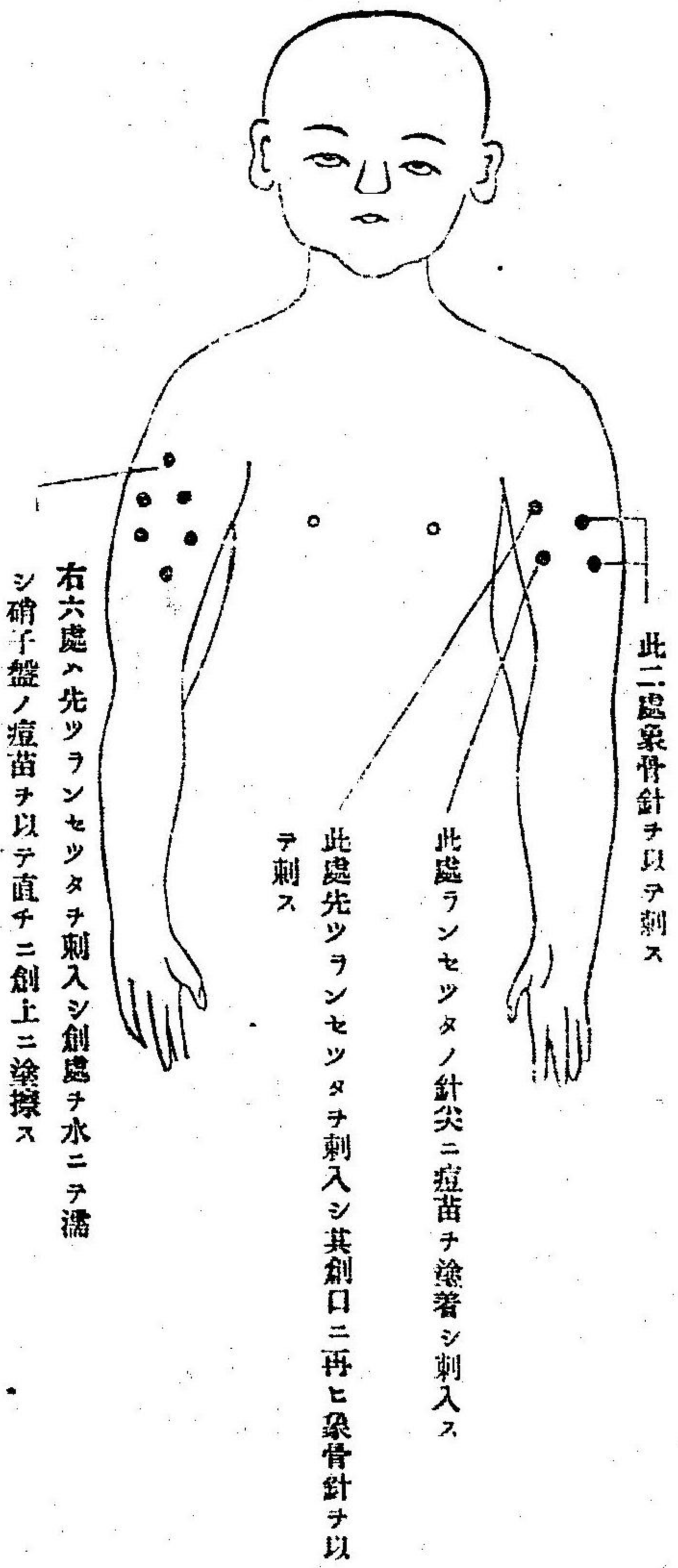
充テシメ。管狀ヲチセル一端ハ鎔塞シ。筆鋒狀ナル一端ハ「ゴルラクス」ヲ以テ塗封ス。此硝子管ヲ
再ヒ「ブリツキ」管ニ入レ。管口ヲ固封シ。之ヲ又木管ニ收メテ紙ニテ包裹シ。糊封スル「前圖」ノ如シ
其三 一寸餘方ノ硝子盤ニ痘膿ヲ塗着シ。此盤二枚ヲ合セ「ゴルラクス」ヲ以テ四方ノ合際ヲ塗密シ。

昔年此法ヲ以テ貯ヘ來ルモノハ盤ノ内面中央凹處ヲ設ケ「コ」ニ膿液ヲ充テシ
ム。今之ヲ質問スルニ其凹處ヲ設クルモノハ。外氣ヲ合ムニ由テ却テ宜シカラ

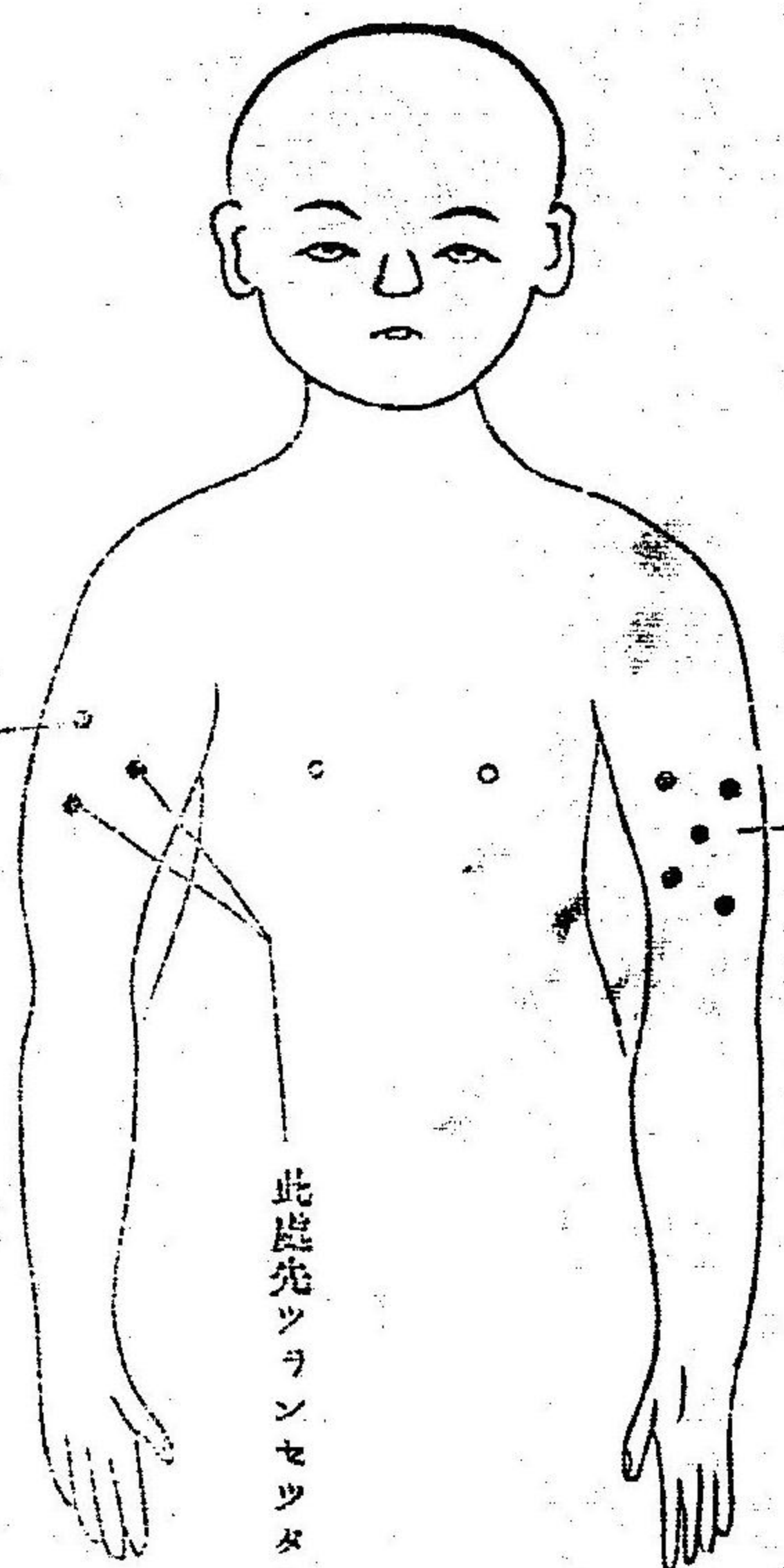


スト云ヘリ

戊申七月十七日午時前、右三様ノ痘苗ヲ取テ兩兒ニ種試ム。一兒ハ左腕ニ四處右腕ニ六處。一兒ハ
右腕ニ三處左腕ニ五處。各處種法ヲ異ニス。即左ノ圖ノ如シ



右六處ハ先ツランセツタヲ刺入シ創處ヲ水ニテ濡シ硝子盤ノ痘苗ヲ以テ直チニ創上ニ塗擦ス



此五處ノ種法前ニ同マ

此處先ツランセツダチ刺入シ其創口ニ再ヒ象骨針ヲ刺入ス

此一處象骨針ヲ刺入ス

右ニ示ス始ク、種ユルニ三様ノ法ヲ以テス。精密丁寧ヲ盡セトモ終ニ其効ヲ遂ケズ。先生(モーニツケ)余ニ謂テ曰ク、凡ソ痘苗五十日ヲ過ルモノハ種テ感受セズ。今齋シ來ルモノ已ニ四十餘日ヲ過グ。願クハ速ニ種施センコトヲ欲セシニ。事ニ依テ數日ヲ延キ之ヲ種試スルノ日痘苗已ニ五十餘日ヲ過ク。其感能セサルモノハ蓋シ此故ナラン」ト

モーニツケ齋ス所ノ痘苗復タ發痘セズ。檜林宗建乃チモーニツケニ告テ云ク、日本ノ種法。人痘ヲ種ユル毎ニ痘痂ヲ用フ。其痂已ニ數月ヲ經過スルモ亦能ク萌生ス。依リテ考フルニ牛痘モ亦痂ヲ以テセハ如何」ト。モーニツケ此言ヲ聽テ然リトシ。直ニ蘭船歸國ノ便ニ托シテ牛痘痂ヲ送ルベキコトヲ通信セリ

翌嘉永二年七月入港ノ蘭船ニテ牛痘痂モーニツケノ許ニ達セリ。由リテ之ヲ三名ノ兒ニ種接セシニ。二兒ハ感セザリシモ、一兒ハ感受シテ善良ノ痘ヲ發セリ

「檜林家系譜」ニ云ク。嘉永二年七月二日入港ノ蘭船ニテ更ニ牛痘痂ヲモーニツケ氏ノ許ニ輸シタルニツキ。宗建ノ三男建三郎出生後十ヶ月ノ小兒ニシテ未タ天然痘ヲ感セサルヲ幸ヒ。蘭館ニ連レ行キ。全氏ノ種術ヲ受ケント欲スレバ。公儀ヨリ常ニ諸人ノ出入ヲ禁セシ場所柄ト云ヒ。況シテ乳母ニ小兒ヲ抱カセ行クコト不叶ニツキ。蘭館出入ノ醫師檜林宗建ノ小兒難病ニツキ。此度渡來ノモーニツケ氏へ診察ヲ受度ト稱シ。七月三日長崎奉行大屋遠江守殿へ願出候處。同月六日蘭館常出入ノ醫師ニツキ特別ノ義ヲ以テ願ノ通御開濟相成。依テ建三郎ト外ニ和蘭陀通詞役ノ小兒兩人。都合三兒ヲ召連レ。蘭館へ罷越シ。其痘痂ヲ以テモーニツケ氏三兒ノ兩膊へ種接セラレ。且種痘針三本ヲ與ヘラレタリ。然ルニ其種痘萌生ノ時期ヲ待テ候處。他ノ二兒ハ萌生セズ。建三郎一名兩膊共ニ美痘

ヲ發ス。玆ニ於テ漸ク遺憾ナキヲ得タリ(建三郎氏ハ今東京ニ在リ)

按フルニ。郭氏ノ「皇國醫事沿革小史」ニ「嘉永元年六月和蘭ノ商船長崎ニ來リ蘭醫ドクトルモンニツキ又牛痘ノ痲トヲ齎ス。時ニ長崎ノ人吉雄圭齋モンニツキニ就キ。其術ヲ傳ヘンヲ乞フ。乃チモンニツキ自ヲ手ヲ下シ和蘭譯官加福喜十郎ノ子某ニ種接シテ之ヲ示ス、是レ實ニ我邦ニ於テ種痘法傳習ノ嚆矢トス」ト記載セルハ、誤聞ナラン。嘉永元年ニモ一ニツケノ齎セシハ痘漿ニシテ感染セズ。由テ翌二年更ニ痘痲ヲ輸入シテ始テ感染セシモノナルニ、嘉永元年ニ善感スルノ之アル筈ナケレバナリ。且ツ「長崎奉行所記録」ニ由ルニ、吉雄氏ガ蘭館出入ノ許可ヲ得タルハ安政二年四月ニシテ嘉永元年ニ後ル、一八年ナリ。當時モ一ニツケハ歸國シテ長崎ニ居ラズ(モ一ニツケハ嘉永四年九月歸國セリ)。此際蘭館出入ノ制甚タ嚴重ニシテ常人ノ蘭醫ニ近ツカント甚難シ。嘉永元年ニ吉雄氏ガモ一ニツケニ親炙セシト云フヲ疑ハシキナリ。故ニ余ハ郭氏ノ「醫事沿革小史」、某氏撰ノ「吉雄圭齋傳」、及ビ「東京醫事新誌」ニ載セタル「本邦種痘家ノ始祖」ニ。吉雄氏ヲ以テ種痘法傳習ノ嚆矢トセルニ反對シ。榎林宗建翁ヲ以テ種痘術傳來ノ祖トス。鍋島侯年譜、「長崎奉行所觸書」、「榎林家系譜」、福地載世「牛痘小考」ノ序、及ヒ長與專齋翁、三宅秀博士諸家親話、歷々之ヲ證スベシ

○鍋島閑叟侯

佐賀侯(鍋島閑叟)英明ニノ意ヲ政治ニ用ヒ。殊ニ泰西文明諸邦ノ文物ニ意ヲ注クヲ深シ。榎林宗建ノ牛痘ヲ和蘭ニ求メシモ實ニ斯侯ノ命ヲ奉セシニ由ル。嘉永二年モ一ニツケノ齎セシ痘苗ノ善感スルヤ。其八月六日榎林ハ佐賀ニ赴キ。侯ニ謁シテ詳ニ其由ヲ上申ス。侯大ニ喜ビ。侍醫佐野壽仙、大石良英、林梅腹、島田南嶺等ヲ召シ、榎林ヲシテ先ツ良英南嶺二氏ノ兒ニ種接セシムルニ皆好結果ヲ得タリ。由テ直ニ公子淳一郎(今ノ式部長官直大侯)貢姬(慈貞院夫人)ニ種接セシメラレシニ。又其ニ能ク萌生セリ。侯大ニ歎賞シテ云ク「天下ノ生靈痘瘡ノタメニ損セラル、モノ幾許ナルヲ知ラズ。而モ未タ之ヲ救フノ術ヲ得ズ。汝今率先シテ種痘ノ術ヲ傳フ、所謂上醫ハ國ヲ醫スルモノ是ナリ」ト。賜賚甚タ厚シ。既ニシテ榎林ハ長崎ニ歸リ。善良ノ痘種ヲ撰ミ。之ヲ江戸ノ戸塚靜海、京都ノ日野鼎哉ニ送り、又「牛痘小考」ヲ著シテ種痘ノ法則ヲ述ブ。時ニ嘉永二年十月某日ナリ。是ヨリシテ牛痘ノ苗天下ニ遍テク。其術亦廣ク世ニ行ハル、ニ至レリ

鍋島閑叟侯年譜ニ云ク。

嘉永二年八月御側方外向へ左之通

御歳三十六

此節蘭人牛痘之種持渡長崎に於て引痘相成候趣相聞候に付右種御取寄相成御領内相廣り候様御内々思召を以て大石良英出崎被仰出候末彼地榎林宗建之子へ引痘相整へ御城下差越相成候に付左に書載之人々へ引痘方被仰付右牛痘にて引痘相成候得は別に輕易

之儀にて別條無之もの之由に候處自然妄之種へ方等相整如何之儀致出來人々疑惑を懐き候儀等有之候ては御注意に不相叶候條引
痘方又は右懸り合仰被付候人々之外妄之取斗無之様屹度筋々相違相成候様之事
但し牛痘種之儀最前御内々檜林宗建手筋を以て御注文之未聞人持渡候其未追々淳一耶様外御引痘被成候様被仰出

○檜林宗建及ビ牛痘小考

「牛痘小考」ハ檜林氏ガモ一ニツケニ親炙シテ得タル牛痘種法ノコトヲ略記セルモノニシテモ一ニツケ
ノ種法ヨリ牛痘ノ原考、種法ノ訣、及ヒ牛痘種接ニ關スル經驗ノ數條ヲ擧ゲ以テ種痘ノ法則ヲ述ベタ
ルナリ。長崎ノ儒醫福地載世其書ニ序シテ曰ク「西肥藩侍醫和山檜林君累世名家、其家祖榮休先生（鎮
山）泰西醫學ヲ創唱ス是時ニ方テ本邦學者未ダ西學ノ何物タルヲ知ラズ。君父祖ノ業ヲ嗣ギ博見多聞
術精微ヲ窮メ。門聲益鳴ル。凡ソ和蘭人本邑ニ客トシテ在ルモノ疾病アル毎ニ輒チ必ス君ヲ招テ治ヲ
請ヒ。皆其能手タルヲ信ズ。君嚮ニ蘭醫慕某ヲシテ牛痘種ヲ輸セシメ。而シテ其種法秘訣盡ク蘊奧ヲ
傳フ。方今本邦州郡牛痘盛行ハレ長ク後生族嬰ヲシテ一大患ヲ免レシムルモノ誰カ復タ君ノ力ニ頼
ラサランヤ。其功偉ナル哉。然レモ君亦郷黨ノ草醫陋學賤術ノ徒亂傳種者生ヲ誤ラントスルヲ恐レ。
之ヲ書ニ筆シ。名テ「牛痘小考」ト曰フ。余謂テ曰ク君ハ則チ牛痘ノ嚆矢タリ家祖ハ則チ西學ノ先登タ
リ。是祖ニノ是裔アリ名家タル所以ナリト

檜林宗建、名ハ高房、和山ト號ス、其祖鎮山和蘭通事ヲ以テ外科ヲ善クシ檜林流外科ノ一派ヲ立テ、
ヨリ五世相傳ヘテ宗建ニ至ル。宗建父ノ後ヲ承ケテ佐賀侯ニ仕ヘ。文政六年獨醫シ一ポルトノ來ルヤ
之ヲ其家ニ延テ醫方ヲ傳ヘンコトヲ謀リ、奉行本多佐渡守及ビ町年寄高島四郎太夫ノ斡旋庇護ニヨリテ
兄榮建及ヒ門下ノ士ト共ニシ一ポルトニ親炙スルコトヲ得タリ。後佐賀侯ノ命ヲ奉シテ痘苗ヲ和蘭ニ求
メ。遂ニ能ク歷驗アルニ至リ。種痘ノ祖トシテ仰カル、ニ至レリ。嘉永五年十月病ヲ歿ス。年五十一

○越前侯及笠原良策

是ヨリ前。越前侯諱慶永牛痘ノ國家ニ益アルコトヲ信ジ、官ニ請フテ支那ヨリ其苗ヲ求ム可キコトヲ侍醫笠
原良策ニ命セラレ。笠原ハ其旨ヲ長崎唐通詞頼川四郎左衛門ニ通シ依頼シ置キシニ。嘉永二年蘭醫モ
一ニツケ其苗ヲ齎セシニヨリ、頼川ハ己カ孫ニ種エテ其苗ヲ京師日野鼎哉ニ送レリ。日野鼎哉ハ良策
ノ師ニシテ頼川トモ懇意ナリシヲ以テ始ヨリ此事ニ關スレハナリ。鼎哉自家ノ孫并ニ懇家ノ兒ニ下苗
シ置キテ、急ニ越前ニ注進ス。之ニヨリテ良策早速上京シテ京師新町二一館ヲ設ケ都下ノ兒ニ試ミタ
リ。此事ニ關スル書類（長崎奉行所記録）ヲ左ニ掲ケテ參考ニ供セン

嘉永年西正月阿蘭陀通詞ニ

松平越前守領分越前國往古ヨリ難痘ニテ死去者多ク歌ヶ鋪次第ニ付右救之爲メ西洋牛痘苗取寄方之儀同人來願出候趣ヲ以テ書

付二通阿部伊勢守殿御下々渡シニ付右牛痘苗取寄方從江府申來修問唐紅毛之内何レヨリ持渡可哉兩通詢共相糺否可申出候依之越前守家來差出候書面相渡候間寫取可相返候

嘉永元年申十二月四日伊勢守殿荒川統太郎ヲ以御下ケ二通

越前守様御領分越前國之儀往古ヨリ難痘ニテ人命ヲ失ヒ候者多分ニ有之殊ニ天保之度申酉兩年凶荒之折柄痘病流行莫大之人別相減シ人絶ニ相成向モ不少既ニ農業耕種等差支相成候ニ付様々手當仕來候折柄五ヶ年前御國中難痘流行仕小兒之死亡萬人餘ニ及ヒ其内又々右様痘流行仕候ハ、連モ以前之人別ニ相復候期モ無御座候牛ト歎ケ舖次第ニ付近年別テ痘瘡之治療厚ク可致工夫ト手醫師共ニ御申付置被成候處近來西洋國ヨリ相傳リ候趣キニテ牛痘苗之儀清國ニテ追々相弘リ候由ニテ手醫師共ヨリ別紙之通牛痘苗御取寄被下候様申出候依之奉願候ハ、誠ニ奉恐入候得共相成可御儀ニモ御座候ハ、右牛痘之苗御取寄御渡被下候様其御筋ニ何卒御聲掛リ被成下候様奉願候右願之趣御聞濟被成下候ハ、追々御國中之人別以前ニ相復農業向無差支可相成 御仁惠之程有難仕合ニ存奉候尤牛痘苗之儀相心得候醫師之内何方ニ成リ共罷出候心得ニ御座候間宜ク差圖被成下候様奉願候此段御手前様迄内々申上候様御國許ヨリ被仰付越候間御序之節宜ク被仰上可被下候以上

松平越前守内

嘉永二年申十二月

中村 八太夫

牛痘苗之儀近來西洋國ヨリ相傳候趣ニテ清國南海之邱蘇ト申者道光十四年ニ引痘新法全書ト申候ニ其効驗等委細ニ有嘉慶十年ニ清國廣東ニ初テ相傳リ候由右牛痘申者牛之乳上ニ發シ候痘瘡様之物ヲ刺其臍ヲ取リ人ニ種エ候得ハ痘苗ヲ致消化再ヒ痘瘡ヲ相病不必申萬舉萬全ニテ爲痘瘡致死亡候者無御座候僅四顆ニ限リ一度種候得ハ其人之痘臍ヲ取リ追々相用心候故永相傳リ如何

様ニモ相弘物之由圖書中ニ委細有之右ハ臍汁之儀故日數相立候ハ、變濁致シ易キ物ニ付番方精密ニ不仕テハ苗性相變候故兼テ勤辨仕置候儀モ有之候器物等ハ追テ差上申度奉存候右牛痘苗之儀ハ素ニ西洋國ヨリ相傳リ候由ニ候得共海路遠ク御座候事故年月ヲ經ルニ付自然苗性相變シ効能無御座候哉ニ相聞候間可相成御儀ニ御座候ハ、廣東省邊ヨリ御取寄被成下候ハ、現功可有御座ト奉存候ニ付此段申上候以上

○種痘波及

牛痘ノ我邦ニ傳ハリシハ。鍋島侯ノ命ニヨリ。檜林宗建幹旋。其苗ヲ和蘭ニ求メ嘉永二年モ一ニツケノ齋ラシタルニ始マル。前既ニ言ヘリ。其之ヨリシテ各國ニ遞傳セシハ安藝ノ人三宅春齡ノ「補憾錄稿本」(嘉永三年夏成ル。淨書ノ儘ニテ出版セズ。別ニ上木ノ補憾錄二冊アリ)ニ其種槩ヲ擧ゲタリ。左ニ其全文ヲ抄出ス

檜林宗建ハ長崎ニ住シテ肥前ノ醫官タリ。先ヅ之ヲ己カ兒ニ種テ是ヲ拉テ其本藩ニ之キ。君命ヲ以テ其侍醫大石良英、他醫官七八人ト謀テ徧ク之ヲ藩内ニ移シ植ユ(檜林宗建傳信)○長州侯モ亦之ヲ聞キ青木研藏ヲ肥前ニ遣テ其苗ヲ得セシメ。先ヅ其家塾ニ七十余人ヲ試ミテ而ノ后之ヲ其明倫館内ニ行ハシム。士民來リ請フモノ課日毎ニ三十三人ヲ以テ限トス。支封ノ國長府徳山モ此政ニ隨ヘリト(松浦元朝話○長州國令○青木)○我カ藝國ニ於テハ九月二十一日予カ兄栗齋、津川元敬、後藤松軒ノ三子頼聿庵ノ子ニ行フヲ初トス。此頃ハ京、坂、越前、其他各國皆之ヲ聞テ渴望セシノミ○越前侯其

初ヨリ請ヘル所ヲ以テ。乃チ侍醫笠原良策ニ路費ヲ賜ヒ長崎ニ赴カシム。路次京師ニ至ル偶マ長崎ノ譯官江川某(穎川)其苗ヲ日野鼎哉ニ贈テ且之ヲ笠原氏ニ達センコトヲ傳フルニ會フ。良策大ニ喜テ京ニ滯ルコト數日。越前ノ兒三人ヲ招テ苗ヲ移シ携テ其藩ニ歸リ。又其苗ヲ貯テコレヲ江戸邸中ニ贈ル。岩文進我藩文初、市川敬叔ト稱スニ命シテ之ヲ其定府ノ兒ニ施セリ(岩文進)○大阪ノ醫緒方洪庵之ヲ聞キ即チ京ニ至リ日野氏ニ就テ禮ヲ卑フシテ其苗ヲ得タリ高橋文部氏京ノ醫緒方氏乃チ日野氏ノ弟葛民ト相謀某ニ聞クトコロ○江戶ハ大槻俊齋(水戸ノ支對松平播磨侯ノ醫官)リ二郡ニ除痘館ヲ開キ之ヲ行フコト甚盛ナリ(丸茂敬)○伊東玄朴(肥前ノ醫官)林洞海(小倉ノ醫官)戸官塚靜海(薩州ノ醫官)其他有志ノ醫官皆之ヲ行ヘリ(高橋文)○大阪ハ町奉行柴田日向君ヲ初トシテ万民各々先ヲ爭テ之ヲ請フ其數幾萬人ト云フコト知ラズ(丸茂敬)○宮津候ハ醫官ヲ大阪ニ遣シ其術ヲ學テ先ツ其女公子ニ行ヒ遂ニ偏ク其對内ニ施ツシム(丸茂敬)○小田原侯ハ太阪ノ醫内藤數馬ヲ聘シテ河内ノ封地三万石中ニ施サシメ每人銀四錢三分ヲ賜フ數月ニシテ三千人ニ及ブト云フ(上)○足守侯(備中)ハ其醫官緒方洪庵ノ大阪ニ在ルヲ招キテ先ツ其女公子ニ行ヒ。遂ニ除痘館ヲ設テ遍ク其封内ニ施セシム。其近郷撫川、高松、帶江、早島ノ四邑ハ皆幕下諸士ノ采地ナリ。其主各々洪庵ヲ聘シテ其民ニ施サシム。通計五千人ニ及ブト云フ(草津ノ醫緒方氏ノ緒方氏ノ門人ニシテ備中ニ從テ同シク引痘セシモノナリ)○防州岩國モ亦其宗國長州ノ令ヲ聞テ醫官ヲ遣シテ此術ヲ得ンコトヲ請ヒ

封内ノ民ニ施セリ(岩國往來商)○各國一時ニ播殖シテ盛大ナル筆墨ノ及フ所ニアラズ。其他諸侯之ヲ施シ士人ノ之ヲ行フモノ皆到ル所ニシテ必然ラン。唯予カ聞ク所此ノ如キノミ

○中川五郎治

モ一ニツケカ牛痘ヲ齎セシヨリ前、松前ノ人中川五郎治種痘ノ術ヲ露西亞ヨリ傳ヘ。文政七年、天保六年、天保十三年ノ惡痘流行ノ際ニ。奮テ其術ヲ施シテ。爲ニ慘毒ヲ免レタルモノ多カリシト云フ中川五郎治ハ松前ニテ夷人ヲ役使スル部落ノ役人(毒人ト名ク)ナリシカ。文化五年卯ノ歲エトロフ島ニテ露西亞國ニ擒レ。彼國ヲホーツカイルコツカ等ニ在ルノ間。彼國官醫ノ種痘術ヲ施スヲ見テ。之ヲ我邦ニ傳ヘント欲シ。其助手トナリテ接種法ヲ傳習シ。且牛痘種法ノ書二冊ヲ得テ後我邦ニ歸レリ。其後松前侯ニ仕ヘ名ヲ儀重郎ト改メ。七十餘歳ニシテ歿セリト云フ

狹貫(上總)ノ醫官井上宗端ガ嘉永三年六月十四日。右ノ中川氏ニ面接シテ聞取ル「露西亞傳牛痘法之記」ニ云ク

牛ニ種痘スル法ハ。毛ノ稀ニ皮ノ薄キ所吻又ハ内股邊何處ニテモ凡一寸許毛ヲ剃リ。其内ハ蘭切刀ニテ一分許ノ淺創二三所附。其痕ハ善良新鮮ノ人痘膿ヲ塗置ケハ。三日目ヨリ嫩衝ノ氣味アリ。八九日ノ頃此所ノ膿ヲ硝子板ヘ塗乾シ貯ヘ置キテ用ニ供ス

人ニ種ユル法ハ。左右腕ノ内蘭切刀ニテコソケ（脈絡ノ有無ニ拘ラス一分許ニケ所血ノ出ルマテナリ）。其上ヲ右ノ硝子板ニテコソリ。ザット布ニテ卷置クノミ

右中川氏ノ「ニ就テハ青森ノ菊池武文ト云ヘル人。明治十五年發行ノ「東京醫事新誌」第二百二十七號ニ「文政年間ノ種痘家」ト題シテ記述セシヨアリ

○長與俊達、小山肆成及ヒ井上宗端

前章ニ記スル所ノ中川氏ノ術ハ之ヲ露西亞國ヨリ得タルモノナレドモ。此レト異ナリテ外人ヨリ傳ヘズ。只西洋牛痘ノ法ヲ聞キタルノミニテ發憤其術ヲ工夫セル人。余ガ知ル所ニテハ三人アリ

其一ハ。肥前大村藩ノ侍醫長與俊達（今ノ中央衛生會長長與專齋氏ノ祖父）ナリ、嘗テ英國ノ書ヲ讀テ牛痘ノ法ヲ載スルヲ見テ大ニ喜ビ其苗ヲ得ント欲シ。牛二頭ヲ買ヒ嬰兒ノ痘ヲ種エ其膿ヲ取テ之ヲ試ムルヲ數次皆成ナラズ。後十年、モーニツケ始テ其苗ヲ齎シ長崎ニ至ル。氏先ツ之ヲ得テ四五人ニ驗シ。遂ニ其法ヲ傳ヘテ閩藩復タ痘死ノ患ナキニ至レリト

其二ハ。紀州熊野ノ人小山肆成ナリ。嘗テ清人邱嘉カ著セル「引痘新法全書」ヲ翻譯シテ西洋牛痘ノ法ヲ世人ニ知ラシメタリ。此人牛痘苗ヲ得ント欲シ。人ヲ但馬ニ遣シ。牛犢一頭ヲ畜テ。人痘ノ膿ヲ牛ノ鼻口ニ注入ルヲ數次。牛即チ發熱不食。發汗一二日ニシテ解熱スレモ乳傍更ニ痘ニ似タルモ

ノヲ出サズ。茫然トシテ手ヲ束テシガ。「本草綱目」ヲ閱シテ白牛虱ヲ用テ痘ヲ免ル、ト説アルヲ見テ。以爲ラク牛虱効アリ。況ヤ牛血其効ナカランヤト。由テ牛乳房ノ小泡ノ血ヲ取り之ヲ痘漿ニ和シテ法ノ如ク施スニ。三四日ニシテ四顆四顆現點シ。又三四日ニシテ發熱惡寒目痛腰疼アリテ。渾身發痘ス。然レモ一人ノ稠密ナク一人ノ難症ナシ。此術ヲ施スヲ數百人ニ及ヒタレトモ。藥ヲ服セシハ十ノ一二ノミ。後更ニ工夫シテ上好ノ人痘ヲ犢牛ノ乳傍ニ種ユルヲ數頭ニシテ。乳傍疱ヲ生シタリ。之ヲ取り得テ試ニ種接スルニ。皆四顆六顆現點シテ。濃漿滿膿落痂十余日ニシテ成効ヲ告クルニ至レリト云フ

其三ハ。狹貫ノ醫官井上宗端ナリ。氏ハ牛體ニ生スル痘ヲ採リ人體ニ移接シテ天然痘ヲ預防セリト云フ。三宅春齡ノ「補憾錄」ニ云ク

距今六七年。父執星野良悅翁ノ江戸ニ在リシハ狹貫候ノ用人玉井久右衛門、翁ニ語テ曰ク。予カ本府ノ醫牛體ニ生スル痘ヲ取り人體ヲ移接シテ天然痘ヲ預防セリ。予カ兒孫皆之ヲ施シテ驗アリ。故ニ一鄉孕牛アルトギハ必之ヲ買ヒ其犢牛ヲ畜飼ノ。痘ニ罹ルヲ待ナ。輒チ之ヲ人ニ接シテ。而ノ後其牛ヲ賣レリト、云々

後三宅氏、玉井氏ヲ介シテ。其種痘法ヲ狹貫醫官井上宗端ニ質ス、宗端即チ答ヘテ云ク

前年ヨリ。人痘漿又ハ痲ヲ取り積ニ接シ。其種ニテ小兒ニ接種致候ヘトモ再痘ノモノ無之候
西洋諸國ニ牛痘ノコアリ候ヲ見テ存附。人痘痲ヲ取り細末ニナシ牝乳ノ鼻中ニ吹入候處六七日
ヲ經テ乳邊ヘ發痘其苗ニテ小兒ニ接シ候

人痘ヲ取り積ニ接シ候ヘハ眞ノ牛痘ニテハ無之交雜ノ痘ニテ種所ニ限ラズ手足顔面ニ發出致シ候
牛ヨリ取テ小兒ニ接シ其兒ノ漿ヲ以テ他ノ兒ニ接シ千万人ニ及フト雖モ其性同様ニ御座候

○大阪除痘館

嘉永二年。痘苗ノ京都日野鼎哉ノ許ニ着シタリトノ報アルヤ。大阪ノ總方洪庵ハ日野高民ト相謀リ。
十月晦日一小兒ヲ携ヘ上京シ。分苗ヲ乞セシニ。日野高民モ其志ノ篤ニ感シテ。十一月七日一小兒ヲ
携ヘ鼎哉同伴ニテ下坂シテ之ヲ分苗セリ。是ヲ大阪種痘法ノ嚆矢トス。洪庵即チ日野高民、中耕介山
田金江、原左一郎、村井俊藏、内藤數馬、山本河内、各務相二、佐々木文中、緒方郁藏等ト謀リテ一
社ヲ結び。金ヲ醜シテ種痘ノ普及ヲ圖ル。安政五年春(四月廿四日)ニ至リテ官許ヲ得テ公然種痘ヲ施
行スルニ至レリ。(江戸ノ種痘所ハ万延元年七月ニ許サレタリ。故ニ種痘ノ官許ヲ得シハ大阪ヲ始
ス)

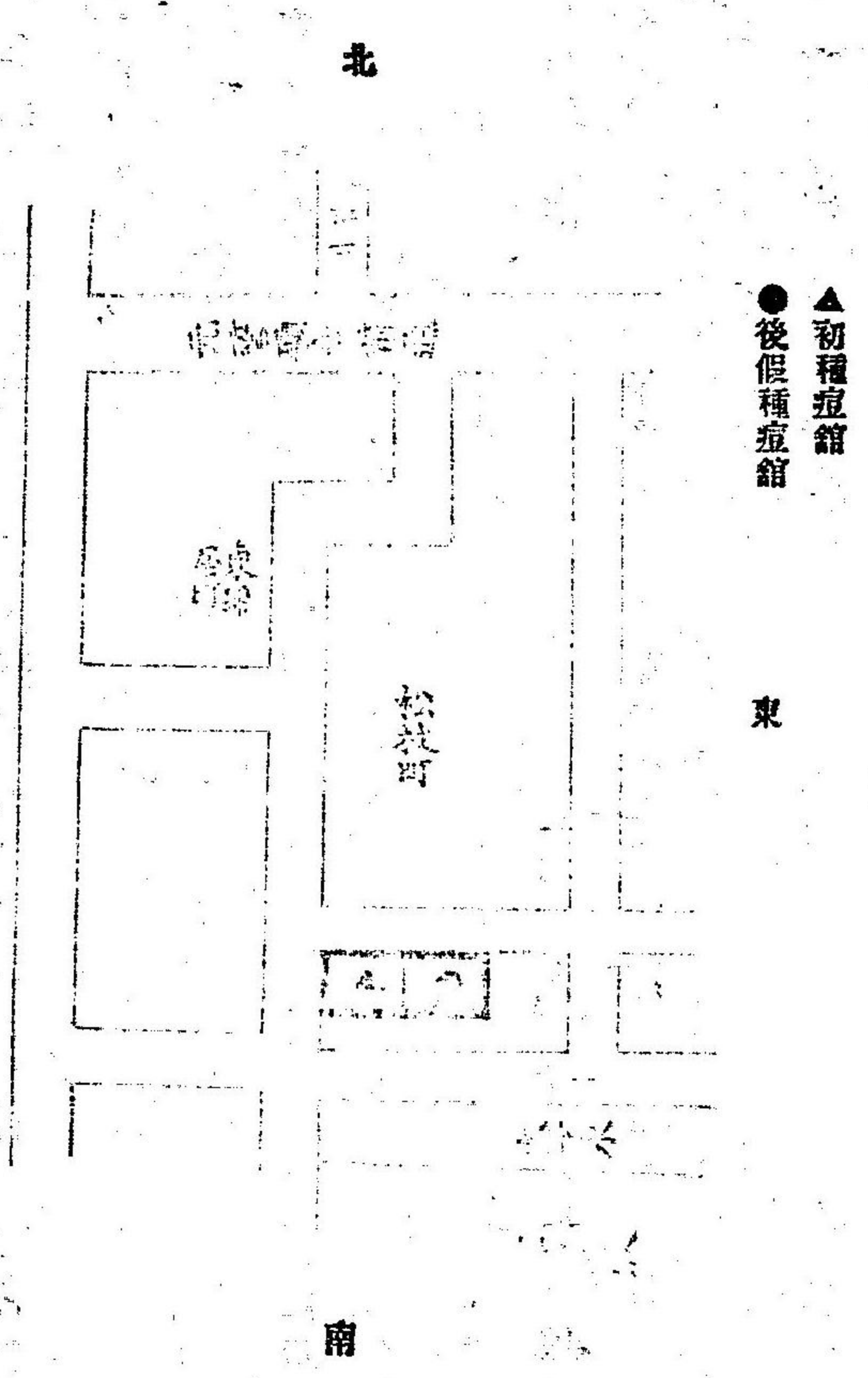
○京都有信堂

嘉永年間。楡林宗建、赤澤寬輔、吉田圖書、小石中藏、馬杉立輔、長柄春龍、熊谷貞恭、江馬榴園等
ノ諸家。種痘ノ普及ニ盡力シ。富小路姉小路上ル町ニ有信堂ト云ヘルモノヲ創立シタリ。是ヲ京都種
痘所ノ嚆矢トス

○江戸種痘所

安政四年八月。伊東玄朴、戸塚靜海、竹内玄同、林洞海、箕作阮甫、三宅良齋、其他四五輩、大槻俊
齋ノ宅ニ相會シテ種痘所ヲ設クルコトヲ協議シ。當時西洋醫方ヲ以テ門戸ヲ都下ニ張ルモノ凡八十餘名
ヨリ金ヲ醜シテ。翌年ノ春神田お玉カ池ニ之ヲ設立セリ。醜金セル人名ハ。箕作阮甫、竹内玄同、高
須松亭、永田宗見、林洞海、大槻俊齋、三宅良齋、坪井信良、轡田研齋、三澤良益、坪井信道、川本
幸民、戸塚靜海、伊東玄朴、手塚良庵、渡邊春汀、手塚良齋、戸塚靜甫、伊東玄晁、伊東南洋、山本
長安、大野松齋、安藤玄昌、益木良齋、足立梅榮、小島俊禎、津田長春、石川櫻所、野中玄英、桑田
立齋、鈴木立岱、太田拙齋、杉田玄端、赤城良伯、松本良甫、杉田杏齋、添田玄春、入澤貞意、吉田
淳菴、桂川甫周、小菅純盛、石井宗謙、岩名昌山、中村靜壽、藤井方朔、吉田収庵、篠田元順、山田
玄琳、島村鼎甫、伊東玄民、程田玄悅、渡邊榮仙、片山秀亭、美濃部浩庵、吳黃石、村松玄龍、西川
元泰、菊池海準、平野元敬、菅野道順、牧山修卿、奥山玄仲、河島宗端、田村泰造、池田多仲、上坂

良菴、高橋順益、三浦有恆、太田東海、溝口聖民、岩井元敬、綾部善達、益城良甫、大槻玄俊、河島元成、大熊良達、柳見仙、榊原玄辰、岡部同直、小林玄同、乃木文迪、大高元俊、甲斐田甲齋ノ諸家ナリ



種痘所ノ位置ハ神田お玉が池元誓願寺前川路左衛門尉拜領屋敷ノ一部分ニシテ。各醫協力同心シ。衆庶ヲ勸奨シテ嬰兒ヲ出サシメ廣ク種痘スルヲ專ニス。種痘司、診察、鑑定等ノ役割ヲ置キテ當番ヲ定メ、四日目種痘日毎ニ各醫出席セリ。然レモ素ヨリ私立ノ一社タルヲ以テ規約ヲ立テ定約ヲ設クルモ十分ニ實行シ難

ク。春秋ノ好時節ニハ過多ノ兒一時ニ群集スレハ、炎暑ノ候寒冷ノ日或ハ風雨霜雪アルニ方リテハ絶テ一兒ノ來ルモノナク殆ド絶苗セントスルコト數回ナリ。依テ更ニ一案ヲ立テ社員八十名各某月日ヲ定メ病家若クハ知人ニ勸諭シ必ス二三兒ヲ媒介スヘキトセリ。而カモ猶其兒家ノ親戚狐疑シ疾病事故ニ托シテ遁レントスルモノ多シ。是ニ於テ百方策窮スルノ極。湯屋ノ二階店、結髪店又ハ洗濯婆ニ説諭シ一兒ヲ紹介セハ謝スルニ金若干ヲ以テスルニ至リ。辛フシテ連續スルコトヲ得タリト云フ

五年種痘所火災ニカ、リ。六年下谷和泉橋通ニ移ル。其場所ハ藤室家ヨリ北ヘ二ツ目横丁、徒士町幕臣山本嘉兵衛安井鎌太郎拜領屋敷ノ内ヲ借り、コ、ニ種痘所ヲ再建シ。万延元年十月十四日、之ヲ官ニ納メ。俗吏ヲ置キテ支配セシメ。二年十月二十八日。之ヲ西洋醫學所ト改稱シ。文久三年二月二十五日西洋ノ二字ヲ去リ。明治元年三月十六日海陸軍病院ト改稱シ。六月九日王政御一新ニツキ新政府ニ引渡シ。十月朔日東京府大病院トナル。是レ實ニ今ノ帝國醫科大學ノ濫觴ナリ

初ノ種痘所ノ起ルヤ。其目的種痘ノ普及ヲ圖ルニアリト云フト雖モ、別ニ亦西洋醫方講習ヲ以テ目的トナセシモノナラン。文久元年以後ハ大ニ規模ヲ改メテ「醫學所」トナリ、専ラ學生ヲ誘掖スルノ所トナレリ、但シ其中種痘ノ一科アリ。ソノ科ヲ卒ルモノニハ免狀ヲ與ヘ。種痘法ヲ制シテ之ニヨリテ種痘セシメラレタリ。左ニ文久年間「醫學所」制定ノ分苗則及種痘條目ヲ掲グ

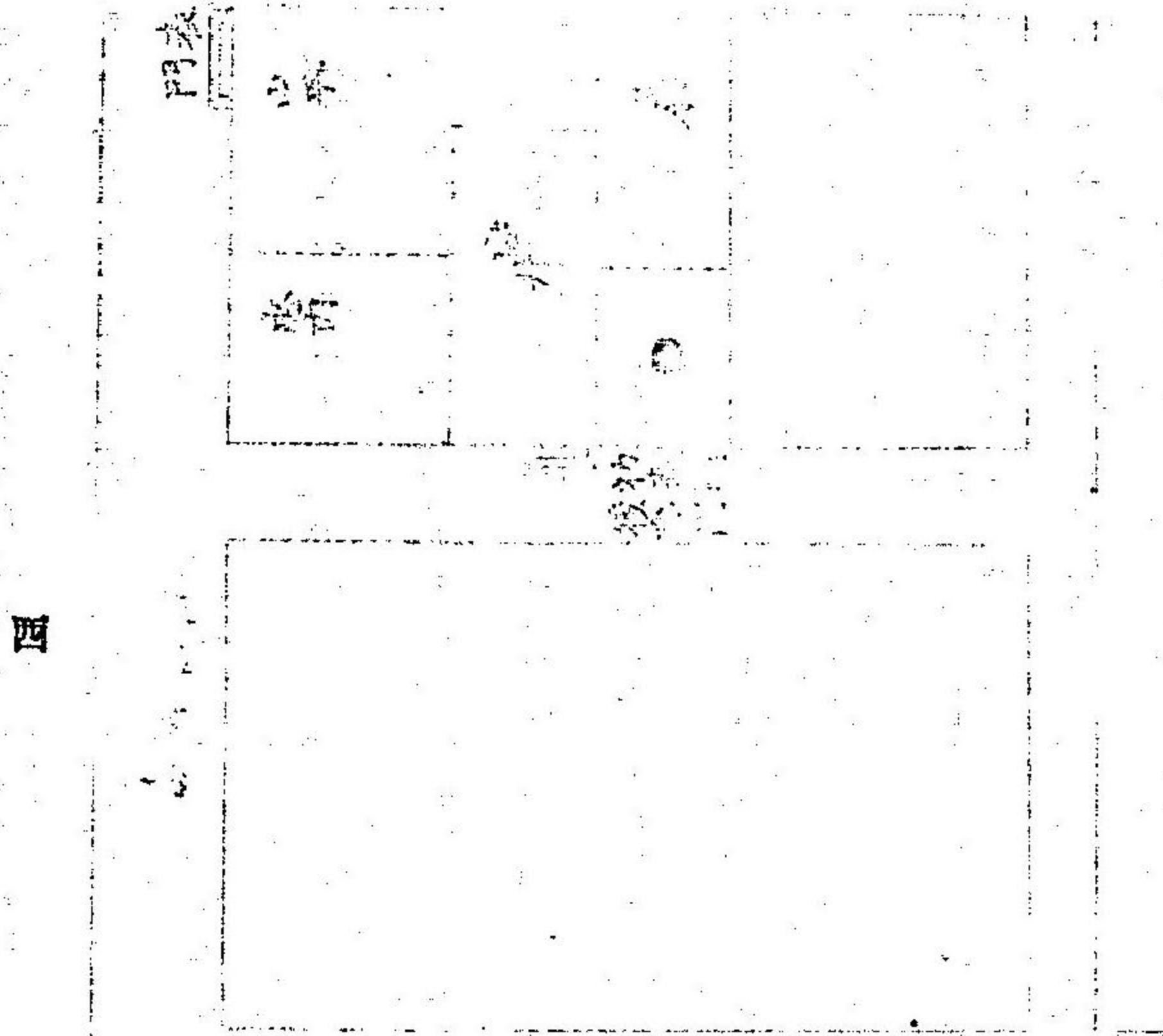
●島居織部

頭取役宅

東

北

南



分苗則

- 一初めて分苗相願候者は入門束修として目録金百匹相納可申事
- 一入門後重て分苗相願候者は其度毎に醫學所爲永績金金百匹宛相納可申事
- 一初めて種痘致候ものは先づ醫學所へ四五度以上出席致し種法并眞偽の鑑定等習煉可致事
- 一 種痘免狀受候共其國にて他へ免狀差出候事不相成候種痘免狀相願候ものは醫學所へ願出可申事
- 一別紙醫學所條目の寫堅く相守可申候事

條目

- 一初生兒は上膊に四箇内腕に六箇つゝ、兩手にて二十箇相施し候事
- 一二歳より四歳迄は上膊に六箇内腕に八箇つゝ、兩手にて二十八箇相施し候事
- 一五歳以上は上膊八箇内腕十二箇つゝ、兩手にて四十箇相施し候事
- 但一拇指宛間を置き一痘苗にて兩手一度に相施し候事

條目

一 種痘中他病を併發し危篤に相成候節は世俗にて種痘の罪に歸し候輩も有之候につゝ右様の惡名受不申候様に相心懸種たる日より四日目には急度診察致し七日目には無相違召連候様に申論し置八日目又は九日目にも診察致し他の病併發有之候は、厚く施療致可申候事

●牛種痘繼所

前段數章ニ説ケルカ如ク。嘉永二年牛種痘和蘭ヨリ傳ハリテ種痘ノ方法速ニ波及シ。種痘科ヲ以テ世ニ名アルモノ諸方ニ起リ。幕府亦種痘所ヲ設ルニ至リシモ、唯人ヨリ人ニ傳ヘタルニテ、未タ種痘ノ全効ヲ収ムルニ至ラズ。大政維新ノ後長興寺齋氏。文部省ノ理事官ニ從ヒ。西洋諸國ヲ巡遊セルトキ和蘭ニテ親シク目撃シタル所ノ方法ニ從ヒ。試ミニ之ヲ牘牛ニ種接セシニ、佳良ノ成績ヲ得タリ。乃チ「牛

種痘繼所「ヲ東京馬喰町四丁目ニ設ク。時ニ明治七年六月ナリ。是ヨリ新鮮治療ノ痘苗ヲ獲テ更ニ海
外ノ船齋ヲ仰カザルニ至レリ

○牛痘書目

英吉喇國種痘奇書	伊藤圭介校刻	一	天保十二年
引痘新法全書	小山肆成校刻	二	弘化四年
引痘要略解	桑田立齋著	一	嘉永二年
新訂牛痘奇法	廣瀬元恭校刊	一	嘉永二年
牛痘發蒙	桑田立齋著	一	嘉永二年
牛痘小考	檜林宗建著	一	嘉永二年
牛痘新書	有馬攝藏譯	一	嘉永二年
牛痘約説	坪井誠軒著	一	嘉永二年
工所牛痘編	青地林宗譯	一	嘉永二年
三名哲牛痘法	伊東玄朴著	一	嘉永二年
濟生備考	杉田成卿著	三	嘉永三年

散花錦囊	緒方郁藏譯	二	嘉永三年
痘瘡かくする傳	熊谷直恭著	一	嘉永三年
牛痘諸説	織田貫齋著	一	嘉永三年
謨私篇附録牛痘編	坪井信良譯	一	嘉永三年
散花新書	難波抱節著	三	嘉永五年
牛痘解蔽	西村春雄著	一	嘉永五年
補憾録	三宅春齡著	二	嘉永六年
補憾録二編	三宅春齡著	二	嘉永六年
引痘喻俗草	三宅春齡著	一	嘉永六年
引痘心得歌	三宅春齡著	一	嘉永六年
散花養生訓	池内逢輔著	一	安政二年
内科秘録種痘編	本間玄調著	一	文久元年
蘭客種痘談	杉亨二譯	一	寫本
種痘龜鑑	久我克明著	一	明治四年

12/21

明治二十九年二月廿九日印刷
明治二十九年三月四日發行

定價金二十五錢

發行者兼編輯者

神田區駿河臺鈴木町二番地
私立獎進醫會

右代表者

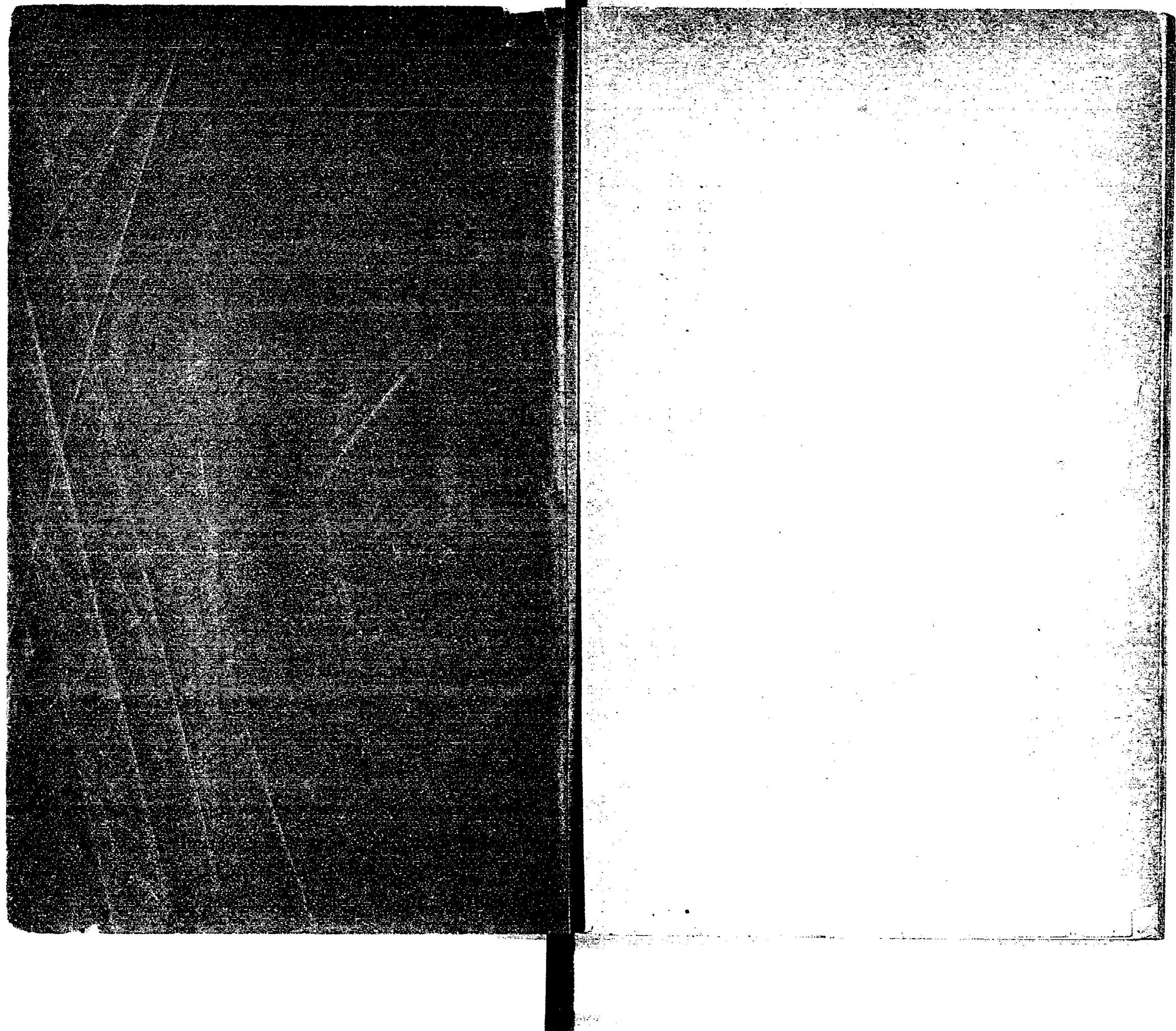
東京下谷區中根岸町八十一番地
藤根常吉

印刷者

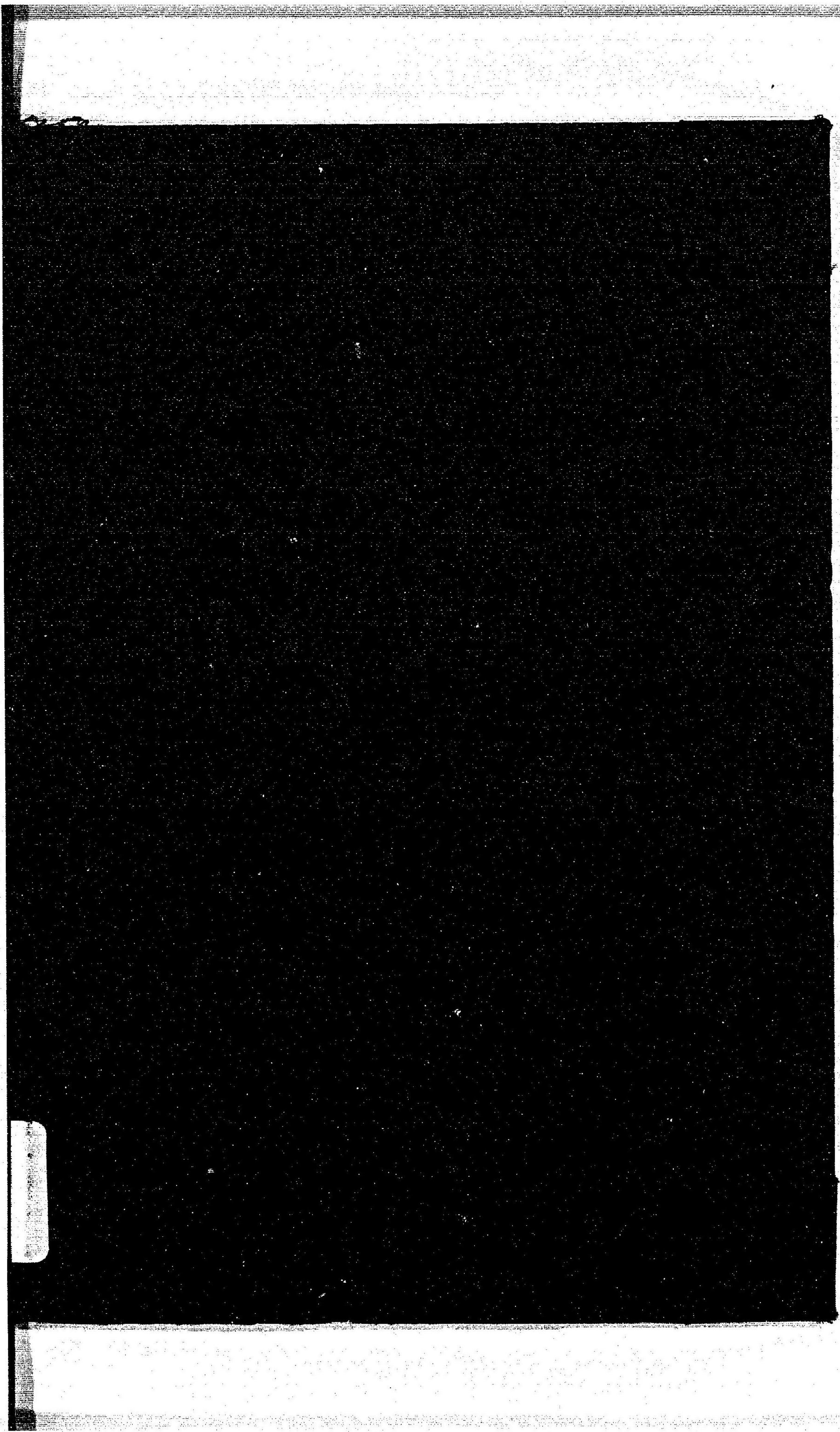
東京日本橋區藥研堀町三十三番地
活版印刷所厚信會
仁科衛

發賣書肆

東京本郷區龍岡町
吐鳳堂書店



40
247



1